

## 4. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成20年度発掘調査報告

### 1. はじめに

今回の発掘調査は、京都西南部の渋滞を緩和する目的で計画された京都第二外環状道路敷設に先立ち、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施したものである。道路は長岡京市域では長岡京市南部を東西に流れる小泉川に沿って山間部に至るルートが予定されている。このルートは桓武天皇によって造営された長岡京跡域西南部に当たる地域を横切る。

小泉川は現在、河川改修によって直線状に流路が変更されているが本来は大きく蛇行しながら流れていた。そのため河川の氾濫によってすでに遺構面が削平されている可能性も指摘できた。発掘調査の必要な箇所を特定することを目的に、平成15年から試掘調査を先行して、調査可能な地域から順次試掘調査を行うと共に、面的な調査が必要な地域には発掘調査を実施してきた(岩松ほか2005、岩松ほか2006、岩松ほか2007、戸原・岩松・竹井2008)。

調査対象地域は、長岡京市調子地区から同奥海印寺地区までと広範囲にわたり、15地点を対象に実施した。これらの地点は長岡京跡のほか友岡遺跡・伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡・西山田遺跡・奥海印寺遺跡・鈴谷窯隣接地にも該当する。本報告書は長岡京跡右京第937次・947次・956次・957次調査に関するものである。平成20年度には第946次調査(調子地区)も実施したが、21年度に実施した周辺調査とあわせて平成22年度に報告する予定である。

現地調査は調査第2課調査第2係長森 正、主任調査員松井忠春・戸原和人・竹原一彦・中川和哉・森島康雄、専門調査員竹井治雄・石尾政信・黒坪一樹・岡崎研一、主査調査員柴 暁彦、調査員高野陽子・村田和弘が担当した。本報告書は戸原・中川・石尾・黒坪・岡崎・村田が執筆し、岡崎が取りまとめを行った。文責については文末に明示した。本報告書で使用した国土座標は現地記録も含め日本測地系の第Ⅵ座標系を使用した。土層および遺物の色調は農林水産技術会議監修の『新版標準土色帖』を用いた。現地調査、報告に当たっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターを始め関係機関、地元自治会、近隣住民の方々の指導と協力をいただいた。記してお礼申し上げます。

### 2. 自然と歴史(第1図)

今回の調査地は、京都盆地西南部に位置する長岡京市の南部にあたる地域にある。西側には、京都盆地を形成する山が迫り、この山は丹波方面へと連なる。この山塊は丹波帯と呼ばれる古生層からなりたっており、チャートや粘板岩などが分布している。この山塊に源を発する小泉川左岸に遺跡はある。現在は河川改修によって直線状に改修されているが、本来は大きく蛇行してお

付表2 平成20年度第二外環状道路建設に伴う調査一覧表

次数	番号	地区名	所在地	調査期間	調査面積	備考
第937次	1	上内田地区 (7ANOKD-8)	長岡京市下海印寺上内田	H20.06.17 ~10.08	1,200㎡	本掘
第946次	2	調子地区 (7ANRHK-7)	長岡京市調子2丁目	H20.06.17 ~H21.02.17	3,220㎡	本掘 ※次年度報告
第947次	3	伊賀寺地区 (7ANOOD-7)	長岡京市下海印寺下内田	H20.07.28 ~10.10	630㎡	本掘
	4	樽井地区 (7ANOTI-2)	長岡京市下海印寺樽井	H20.07.08 ~08.12	300㎡	試掘
	5	下内田地区 (7ANOOD-7)	長岡京市下海印寺下内田	H20.08.19 ~10.03	150㎡	
	6	方丸地区 (7ANOHR-10)	長岡京市下海印寺方丸	H20.09.17 ~10.30	150㎡	
	7	菩提寺地区 (7ANOBZ-2)	長岡京市下海印寺菩提寺			
	8	駿河田地区 (7ANPSG-2)	長岡京市奥海印寺駿河田			
9	駿河田地区 (7ANPSG-3)	長岡京市奥海印寺駿河田	H20.11.19 ~12.04			
第956次	10	尾流・方丸地区 (7ANOR-7) (7ANOHR-11)	長岡京市下海印寺尾流・方丸	H20.12.01 ~12.18	80㎡	試掘
	11	西条地区 (7ANOSJ-3)	長岡京市下海印寺西条	H21.01.07 ~02.26	330㎡	
	12	荒堀地区 (7ANPAR-3)	長岡京市奥海印寺荒堀	H21.01.14 ~02.04	190㎡	
	13	高山地区 (7ANPTY-1) (7ANPSH-1)	長岡京市奥海印寺高山	H21.02.09 ~02.20	110㎡	
	14	西条地区 (7ANOSJ-4)	長岡京市下海印寺西条	H20.11.25 ~H21.01.20	240㎡	
15	尾流地区 (7ANOR-8)	長岡京市下海印寺尾流	H20.11.26 ~H21.02.26	820㎡		

り、それに対応するように川の両側に氾濫原も大きく広がっている。川は長岡京市域から大山崎町を経て、大阪湾に注ぐ淀川と合流する。

小泉川流域では後期旧石器時代から遺跡が認められる。南栗ヶ塚遺跡では、旧石器時代後期に属するサヌカイト製のナイフ形石器を含む石器群が検出された。この石器には、接合資料も認められ、この地域では珍しく本来の包含層が残されていた。

縄文時代には小泉川流域で多くの遺跡が発見されている。最も古い時期の土器は、下海印寺遺跡から発見された早期のポジティブな押型文土器片である。早期に属するチャート製のいわゆるトロトロ石器が<sup>はざま</sup>俗遺跡から出土している。前期には南栗ヶ塚遺跡から北白川下層式の縄文土器が住居跡に伴って検出されている。

中期には伊賀寺遺跡から400m離れた友岡遺跡(右京第325次調査地点)から、段丘斜面に投棄された状態で、船元式土器が大量に出土した。中期末の北白川C式の時期には、伊賀寺遺跡で6棟の竪穴式住居および遺物が検出されている。また、大山崎町脇山遺跡(高野1997)でも北白川C式土器を含む土坑が検出されている。

後期初頭の中津式土器は伊賀寺遺跡で、後期縁帯文期は伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡で遺構・遺物が発見されている。元住吉山式土器を伴う竪穴式住居跡は、伊賀寺遺跡で確認されている。ま

た、同時期の墓壙も発見された。そのうち2か所からは多量の焼骨が発見され、供献土器と考えられる注口土器が出土している。

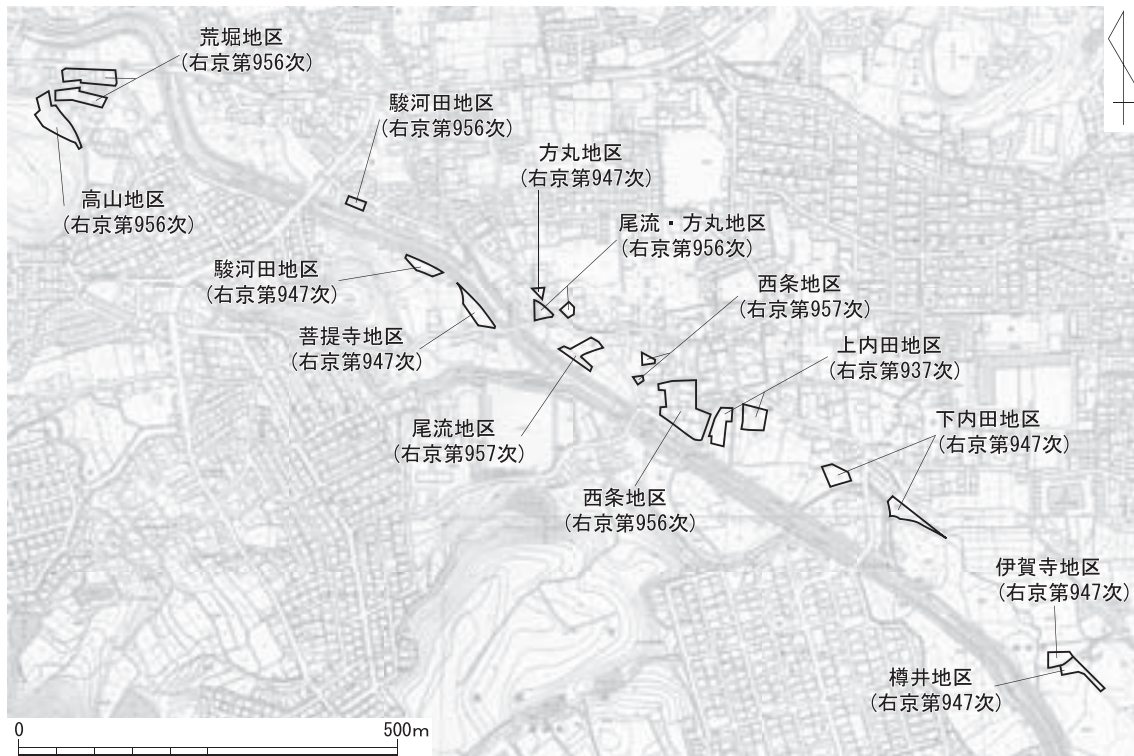
縄文時代晩期に入ると、小泉川下流の大山崎町下植野遺跡において突帯文の甕棺が検出されている。

弥生時代前期の遺構は、小泉川流域では発見されていないが、畚遺跡で土器が出土している。弥生時代中期前葉には南栗ヶ塚遺跡や下植野南遺跡で方形周溝墓群が発見されている。両遺跡とも石製武器が出土した主体部が確認された。中期後葉の土器は畚遺跡から発見されている。弥生



第1図 調査地及び主要遺跡分布図(数字は付表2の調査地点)





第2図 調査地位置図

時代末の竪穴式住居跡は伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡で発見されている。右京第902次調査のものはベット状遺構を持つ多角形の竪穴式住居跡である。

古墳時代には、下流に境野1号墳と呼ばれる全長約62mの前方後円墳が存在している。古墳時代前期に築造され、段築と埴輪列が確認されている。古墳時代後期に入ると多くの竪穴式住居跡が伊賀寺遺跡内の随所で確認されている。同じように下植野南遺跡においても5世紀後半から6世紀にかけての竪穴式住居跡が多数発見されている。

飛鳥時代の遺物が出土する<sup>ともわか</sup>鞍岡廃寺の存在が古くから知られていた。正確な位置は確認されていないが、飛鳥時代から長岡京期に至る瓦が発見されている。出土瓦には「田辺史牟也毛」と線刻されたものがあり、渡来系氏族である田辺氏との関係が注目されている。

奈良時代の建物としては、掘立柱建物などが伊賀寺遺跡や下海印寺遺跡、下植野南遺跡などで発見されている。

今回の調査地域は、長岡京跡右京域の西南部にあたる。長岡京は延暦3(784)年桓武天皇によって平城京から遷都され、延暦13(794)年に平安京に移るまで都として機能していた。長岡京の造営は10年と短く、七条より南の地域で明確な条坊は発見されていない

(中川和哉)



## (1)長岡京跡右京第937次調査(7ANOKD-8・上内田地区)・伊賀寺遺跡

## 1. はじめに

調査地は、長岡京跡右京七条四坊十二町に相当する。下海印寺西条の集落付近が高台の地形を呈しており、その縁辺部にあたる。縄文時代から近世にかけての集落遺跡である伊賀寺遺跡にも含まれる。

この調査は、平成19年度に行われた右京第901次調査・右京第902・928次調査および右京第926次調査(試掘調査)の成果を受け、実施したものである。右京第902・928次調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡が見つかり、右京第901・926次調査では、古墳時代初頭～後期の流路跡や、古墳時代中頃～後期にかけての土器が出土する土坑を検出している。このような周辺の調査成果から、今回の調査地には古墳時代の流路の続きや竪穴式住居跡などが存在すると考えられた。調査地は、水路をはさんで2か所に設定した。右京第926次調査地の西側を上内田-1地区とし、右京第928次調査地の北側を上内田-2地区とした。遺構名は、地区ごとに通し番号を付し、地区・遺構番号として4桁で表した。

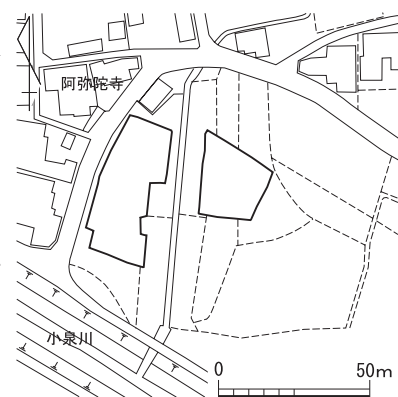
## 2. 調査概要(第3・4図)

基本層位は、厚さ0.9m前後の盛土の下が褐灰色砂質土や灰色礫混じり砂質土が0.8mほど堆積しており、これらを除去するとオリーブ灰色粘砂質土となる。オリーブ灰色粘砂質土の上面が中世の遺構面となる。その標高は、32.1mである。オリーブ灰色粘砂質土には、長岡京期～平安時代後期にかけての土器片を包含する。この層を除去すると古墳時代の遺構面となる。

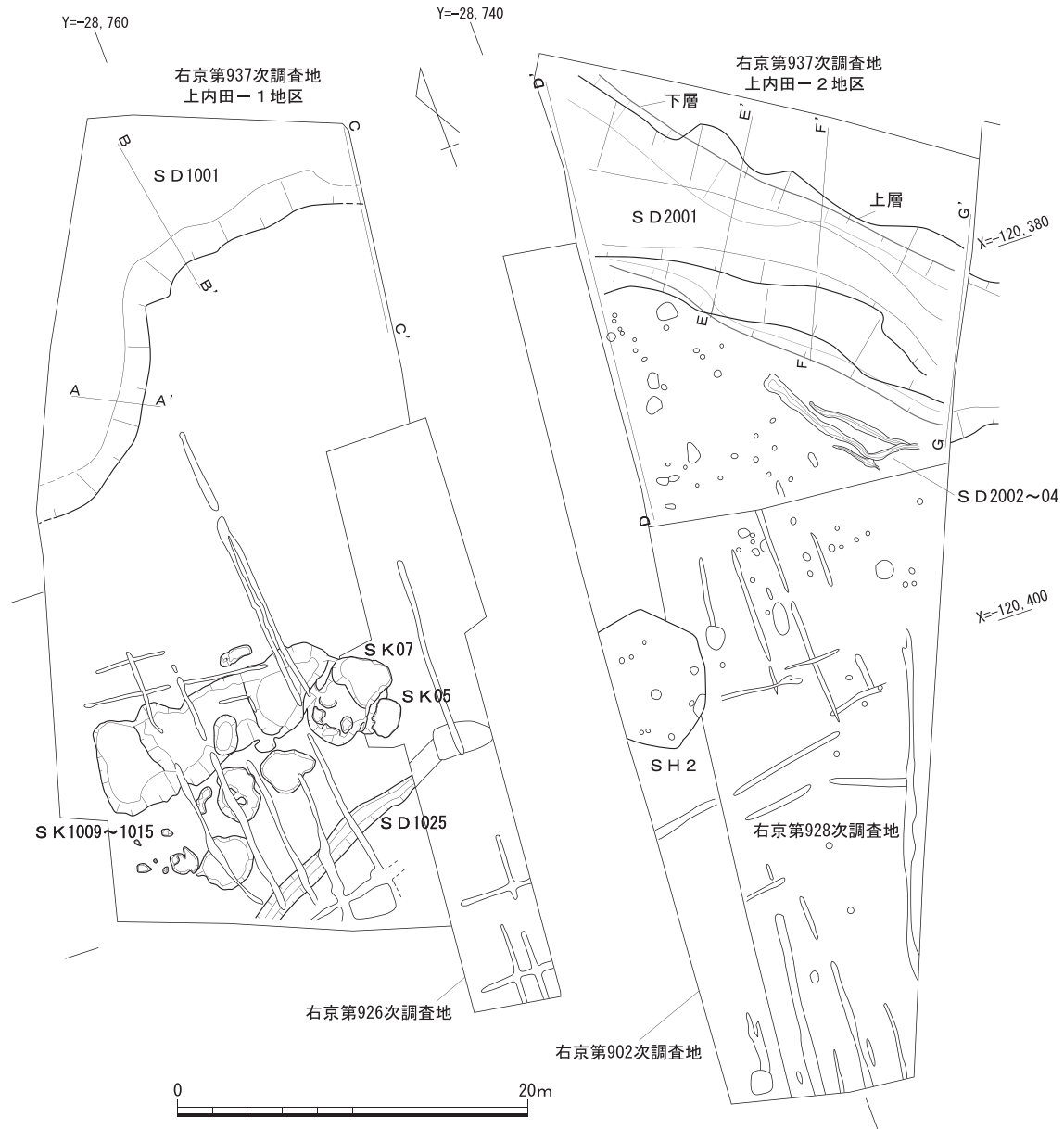
1)縄文時代 上内田-2地区で検出した流路S D2001を大きく断ち割ったところ、流路のベース面である黄褐色砂礫土内から縄文土器片が数点出土した(第5図)。黄褐色砂礫土層は、流路跡S D2001のベースとなることから、弥生時代以前の洪水堆積層と判断され、付近に遺構が存在するとは考えがたい。

2)弥生時代後期末～古墳時代 この時期の遺構は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の流路跡(S D2001)、古墳時代中期後半～後期の土坑群(S K1009～1015)・流路跡(S D1001・2001・1025)を検出した。隣接する右京第902・928次調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡(S H2)を検出していることから、今回の調査地においても住居跡の存在を想定したが、建物跡などの検出には至らなかった。

土坑S K1009～1015(第8図) 1地区南側から、東西方向に長い不整形な土坑S K1009とその周辺部から小規模な土坑群S K1010～1015を検出した。土坑S K1009の東端は、右京第



第3図 上内田地区  
調査トレンチ配置図



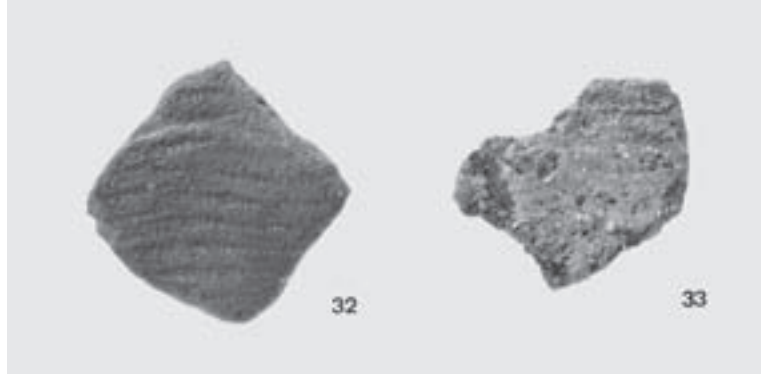
第4図 上内田地区遺構配置図

926次調査時に土坑SK05・07として確認しており、今回これを含めて図示した。その規模は、東西17.5m、南北6m、深さ0.1~0.5mを測る。土坑床面は平坦でない。埋土はオリブ灰色粘質土で、これらの土坑は、湿地状の堆積環境にあったとみられる。土坑底や下層から、完形品を含む須恵器杯身・杯蓋・甕、土師器直口壺・高杯などが出土した(第11・12図)。これらの遺物から、古墳時代中期後半~後期にかけての土坑群と考えられる。遺構の性格については、不整形な形状やベース面が青灰色粘土であることから、粘土採掘坑の可能性が高いと思われる。ただし、土師器壺などが正置した状況で出土していることを考えると、水辺の祭祀に関わる遺構である可能性も否定できない。また土坑群SK1010~1015は、土坑SK1009付近に集中し、埋土も灰色系の粘質土と同色であり、深さも0.1~0.3mと土坑SK1009とほぼ同じであった。このことから、これらの土坑群は元来1基の土坑であったが、後世に大規模な削平を受け、部分的に深く掘り込

まれた箇所が残り、数基の土坑が集合したように検出した可能性があると考える。

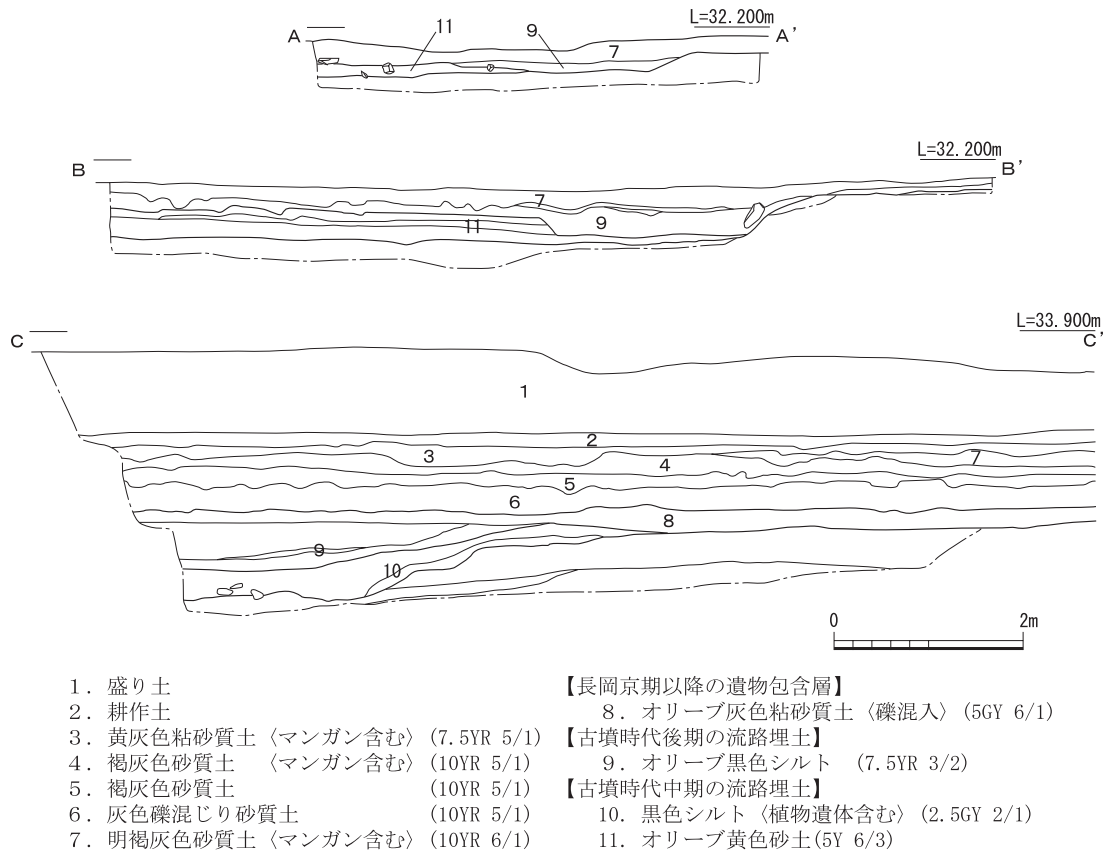
流路 S D 1001 (第 4・6 図)

調査地北西側から北部にかけて「L」字状に屈曲する流路を検出した。規模は、最大幅10m、深さ0.4~0.8mを測る。流路に沿う形で西から北側にかけてわ



第 5 図 上内田地区出土縄文土器

ずかな高台が巡り、その裾部を東流する。流路の埋土は、大きく 2 層に分かれた。調査地北側では、上層に古墳時代中期後半~後期の土器片を包含するオリブ黒色シルトが、下層には植物遺体を含む黒色シルトが堆積していた。下層に、遺物は包含しない。流路屈曲部より上流である調査地北西側では、上層にオリブ黒色シルトが薄く堆積し、わずかに古墳時代中期後半以降の土器片が出土した。その下層は、西側の高台からの流れ込みによるためか、オリブ黄色砂土が堆積し、中から石庖丁(49) 1 点と木製の編み錘(48) 1 点流れ込んだ状況で出土した。この流路 S D 1001 が構築された時期は不明であるが、流路として機能していた時期は古墳時代中期後半である。石庖丁などの遺物の出土は、西側の高台に遺構の存在を示唆するものである。



第 6 図 上内田-1 地区流路 S D 1001 土層断面図





- 1. 盛り土
- 2. 耕作土
- 3. 褐灰色砂質土 (10YR 6/1)
- 4. 黄褐色砂質土 (2.5Y 5/4)
- 5. 褐灰色砂質土 (10YR 5/1)
- 6. 灰色礫混じり砂質土 (N 5/1)

【長岡京期以降の遺物包含層】

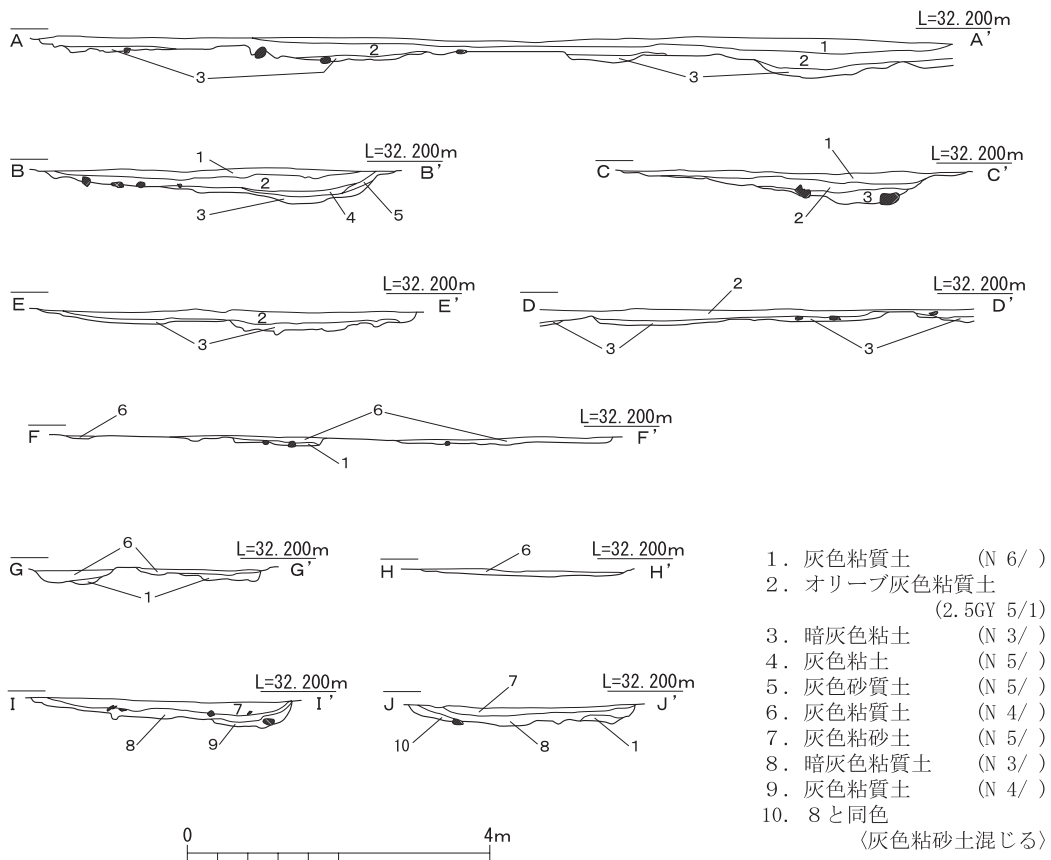
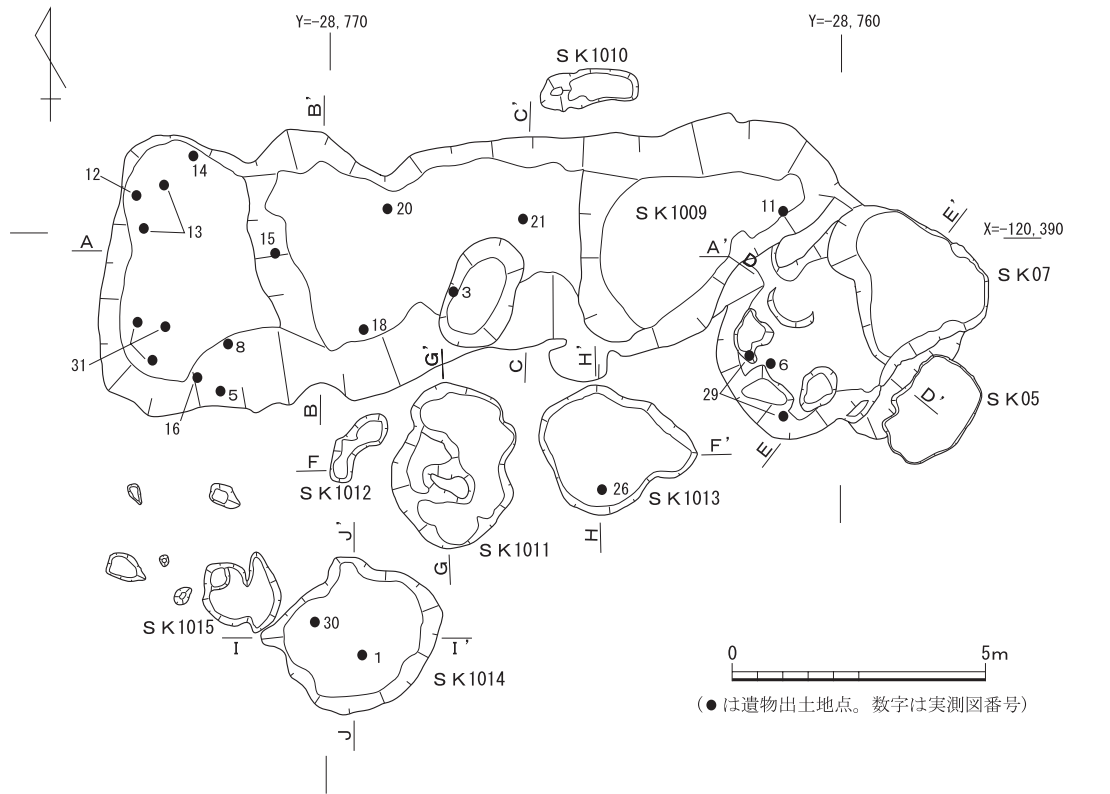
- 7. オリーブ灰色砂質土 (5GY 6/1)
- 【古墳時代中期の流路埋土】
- 8. 緑灰色砂質土 (10G 5/1)
  - 9. オリーブ黒色シルト (7.5Y 3/2)
  - 10. 黒色シルト混じり砂質土 (7.5Y 2/1)
  - 11. オリーブ黒色粘質土 (5GY 2/1)

【弥生時代中期の流路埋土】

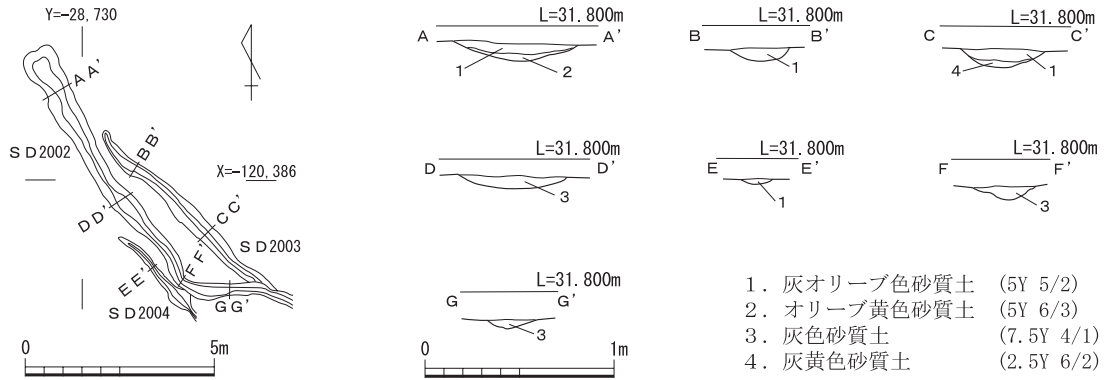
- 12. 暗緑灰色砂礫混じり砂質土 (7.5GY 4/1)
- 13. 緑黒色砂混じりシルト (植物遺体含む) (7.5GY 2/1)
- 14. 緑灰色礫混じり粘質土 (5G 6/ )
- 15. オリーブ灰色シルト (2.5GY 6/1)
- 16. 黄褐色シルト混じり砂礫土 (2.5Y 5/6)
- 17. 灰色砂混じり粘質土 (7.5Y 4/1)
- 18. 灰黄褐色砂礫土 (10YR 4/2)
- 19. 緑灰色シルト混じり粘質土 (10GY 5/1)
- 20. 明緑灰色粘質土 (5G 7/ )



第7図 上内田-2地区流路S D2001土層断面図

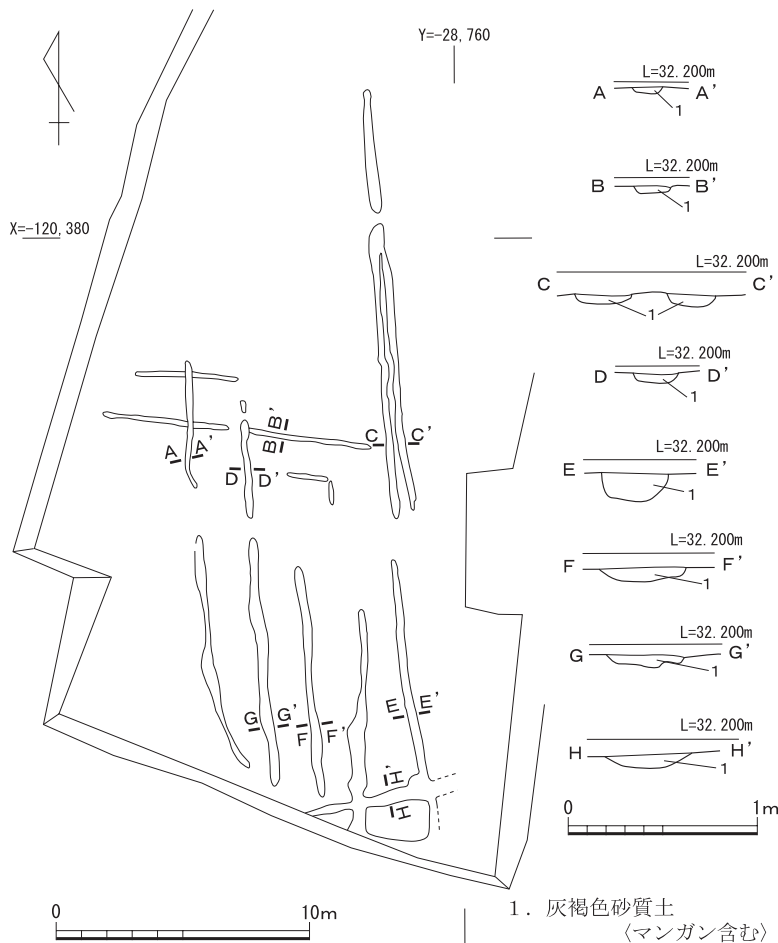


第8図 上内田-1地区土坑SK05・07・1009~1015実測図



第9図 上内田-2地区溝 S D 2002~2004実測図

流路 S D 2001 (第4・7図) 調査地北側で東流する流路を検出した。右京第901次調査で検出した流路に続く。断面観察や出土遺物などから、大きく2時期に分かれた。上層は、古墳時代中期~後期の流路で、下層は弥生時代後期末~古墳時代初頭の流路である。上層流路の規模は、幅7~10m、深さ0.3mを測る。下層流路の規模は、幅8m、深さ0.4~0.6mを測る。上層で検出した流路は、1地区で検出した流路 S D 1001の続きである。下層の流路は、1地区では認められず、調査地北北西の方から流れていたものと考えられる。



第10図 上内田-1地区中世耕作溝群実測図

### 3) 時期不明

溝 S D 2002~2004・柱穴群 (第9図) 出土遺物がなく時期不明であるが、長岡京期~平安時代後期の土器片が出土するオリブ灰色粘砂質土下から検出し、古墳時代の遺構と考える。

### 4) 中世

この時期の遺構としては、1地区から中世の素掘り溝群を検出した。

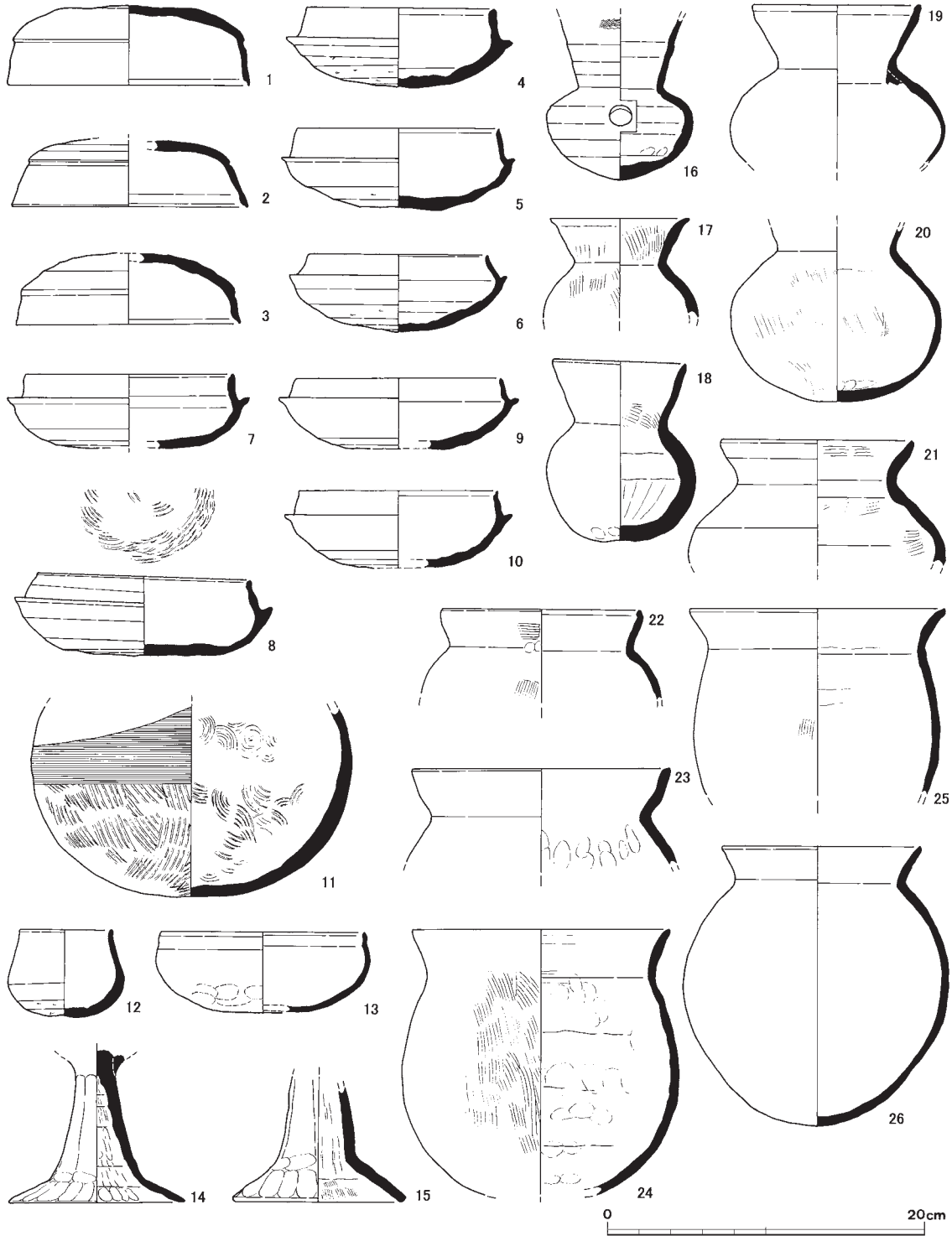
素掘り溝群 (第10図) オリブ灰色粘砂質土を掘り込んで10数条の溝を検出した。その規模は、幅0.2~0.4m、深さ0.05~0.15mを測る。耕作に伴う溝と推定される。溝内から、瓦器片が出土している。



3. 出土遺物

上内田地区出土遺物は、第11～14図に掲載した。

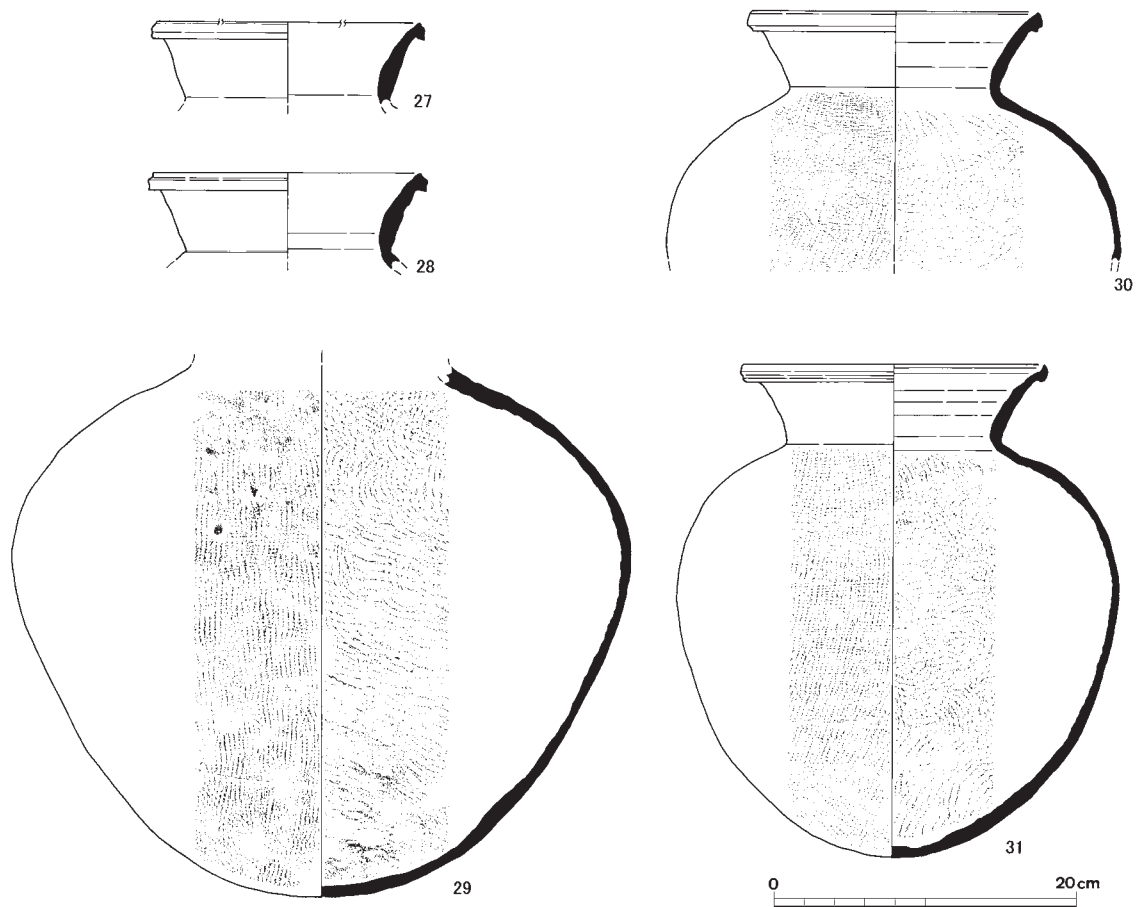
土坑S K1009から出土した遺物は、2～9・11～16・18・20・21・29・31である。土坑S K1011出土遺物は24、土坑S K1012出土遺物は25である。土坑S K1013出土遺物は26、土坑S K



第11図 上内田地区出土遺物実測図(1)

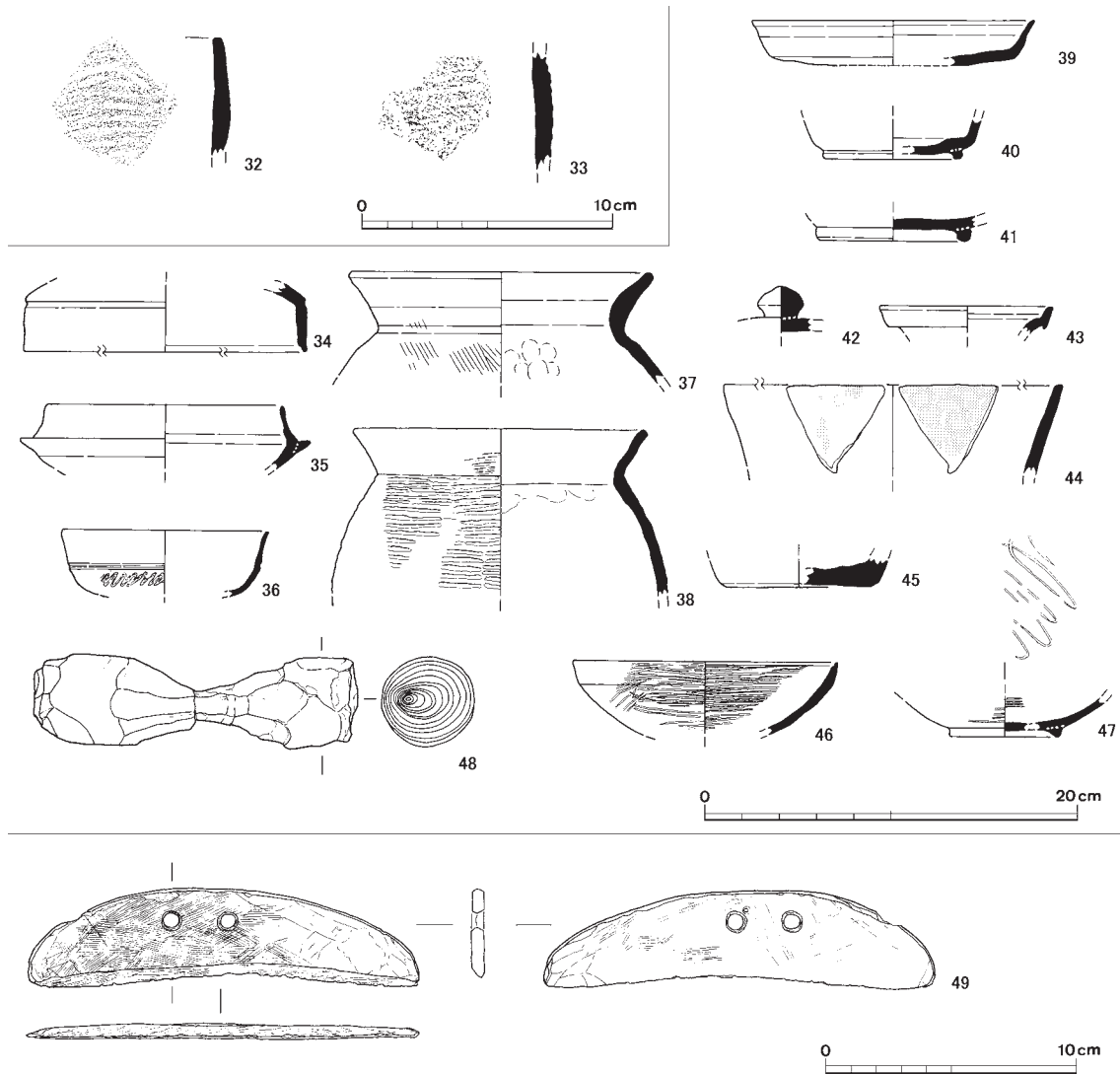
1014出土遺物は1・10・17・19・23・30である。土坑S K1015出土遺物は27、土坑S K1016出土遺物は28、土坑S K1017出土遺物は22である。溝S D1001出土遺物は34～45・48・49で、溝S D2001出土遺物は46・47である。溝S D2001のベース面である黄褐色砂礫土内から出土した縄文土器片は、32・33である。西条-1地区の遺物包含層であるオリーブ灰色粘砂質土出土遺物は、50～68である。

1～3は、須恵器杯蓋である。1・2は、平坦な天井部と下方を向く口縁部からなる。3は丸みを帯びた天井部と下方を向く口縁部からなる。いずれも端部は外下方に尖る。口縁基部に凹線が1条巡る。4～10は、須恵器杯身である。わずかに丸みを帯びた底部と内上方に立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は丸い。底部外面はヘラ削りし、そのほかはロクロナデ調整する。8の底部内面には、タタキの痕跡が輪状に残る。11は、須恵器壺である。底部から体部にかけて球形を呈す。内外面をタタキで調整し、体部外面にその後カキメを施す。12は、土師器鉢である。小型品である。底部はヘラ削りする。13は、土師器杯である。浅い体部と上方に立ち上がる口縁部からなる。摩滅しており調整不明である。体部下半外面に指による圧痕が残る。14・15は、土師器高杯の脚部である。内外面をヘラ状工具や指によるナデ整形する。16は須恵器壺である。口縁部に1条の波状文が巡る。17～21は、土師器壺である。球形の体部と外上方に立ち上がる口縁部からなる長頸壺と短く外上方に立ち上がる短頸壺がある。内外面を縦方向のハケ調整する。22～



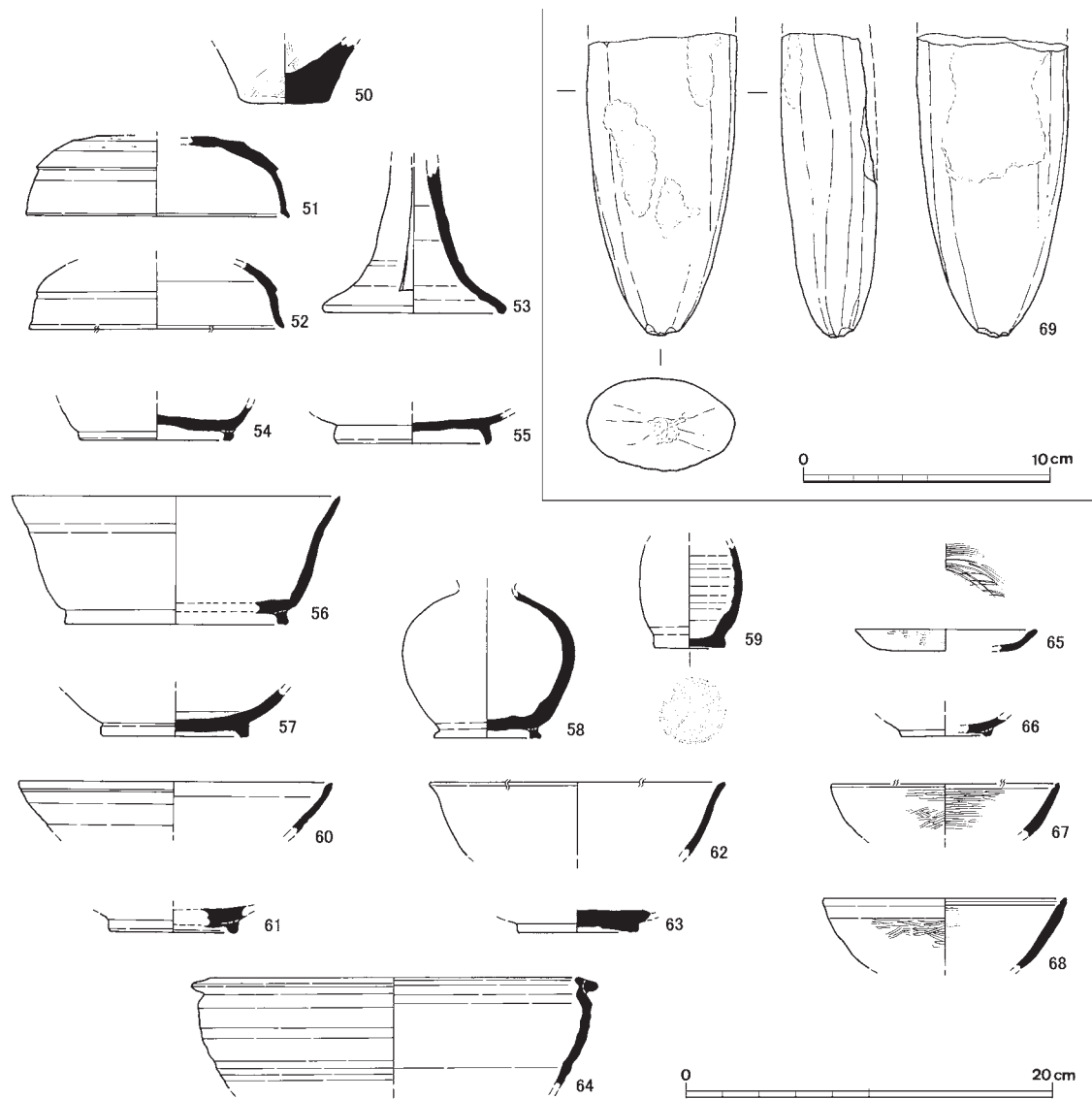
第12図 上内田地区出土遺物実測図(2)

26は、土師器甕である。口縁部が屈曲して立ち上がるものや外反するものがある。体部外面は縦方向のハケ調整をおこない、内面には指圧痕が残る。27～31は、須恵器甕である。体部肩部がやや張り、卵形を呈す。口縁端部は上下方に尖る。34は、須恵器杯蓋である。口縁基部に1条の凹線が巡る。35は、須恵器杯身である。口縁部は内上方に立ち上がる。36は、無蓋高杯の杯部である。体部半ばに1条の凹線が巡り、その下に波状文を施す。37は、土師器甕である。体部外面は縦方向のハケ調整を施し、内面はナデ仕上げする。38は、土師器甕である。溝S D1001出土遺物の中で、時期の古いもので、庄内併行期である。外面はタタキを施し、内面は摩滅しており調整不明である。39は、須恵器皿である。平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。40・41は、輪状の高台を貼り付けた須恵器杯である。42は、須恵器蓋の擬宝珠つまみである。43は、須恵器壺の口縁部である。44は、須恵器杯で、内面全面と外面の一部に漆が付着する。45は、須恵器鉢の底部である。46・47は、瓦器碗である。46は、内外面に密に暗文を施す。47は、底部内面に千鳥に暗文を施し、断面三角形の低い高台が付く。48は、木製の編み錘である。49は、サヌカ



第13図 上内田地区出土遺物実測図(3)





第14図 上内田地区出土遺物実測図(4)

イト製の石庖丁である。半月形直線刃形を呈す。50は、弥生土器壺か甕の底部である。体部外面はタタキ、内面はハケ調整する。51・52は、須恵器杯蓋である。口縁基部に1条の凹線が巡る。53は、長脚の須恵器高杯である。2か所に一段透かしを設ける。54～56は、須恵器杯である。55は、高さのある高台が付く。56は、平坦な底部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。ロクロナデ整形する。58は、輪状高台の付く須恵器壺である。体部は球形を呈す。59は、須恵器瓶子である。57は、須恵器椀である。底部内面に重ね焼きの痕跡が残る。60～63は、緑釉陶器椀である。60・62は濃緑色の釉葉が、61・63は淡緑色の釉葉が内外面に施される。64は、須恵器鉢である。内湾しながら立ち上がる体部と内上方に尖る口縁部からなる。体部はミズビキ整形し、口縁部はナデ仕上げする。65は、瓦質の皿である。内外面に暗文がみられる。66は、瓦器椀の底部である。67・68は、瓦器椀である。口縁部内面に1条の凹線が巡る。内外面に密に暗文を施す。

#### 4. 小結

調査の結果、弥生時代末～古墳時代初頭の流路跡と、古墳時代中期後半～後期の流路跡と、同時期の土坑群などを検出した。長岡京跡に伴う遺構は検出しなかった。弥生時代末から古墳時代初頭の流路は、1地区の北北西から2地区を通り、右京第901次調査で検出した流路に続く。この時期の遺構としては多角形の竪穴式住居跡SH2がある。1地区から他に住居跡が見つからなかったのは、西側の高台から竪穴式住居跡SH2付近にかけて緩やかに傾斜していたが、後世に削平されたためと思われる。この流路は、古墳時代中期～後期になると現小泉川から地形に沿うように蛇行して流れるようになる。土坑や流路内埋土から古墳時代中期後半～後期の土器・土器片が出土したことは、北西部の台地上を中心に古墳時代中期後半以降の集落が展開すると思われる。また、2地区の洪水堆積層からの縄文土器片出土は、下海印寺遺跡に近いことを考えると注目される。

(岡崎研一)

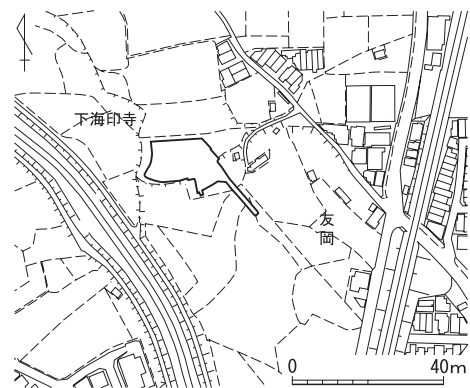
## (2)長岡京跡右京第947次調査(7ANOOD-7・伊賀寺地区)・伊賀寺遺跡

### 1. はじめに

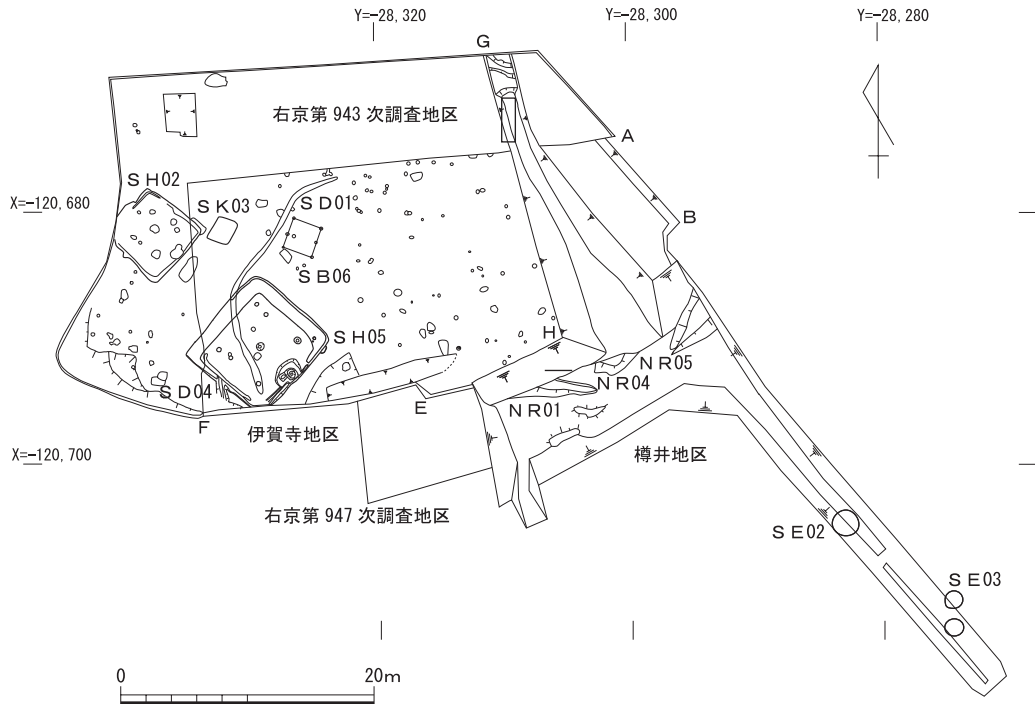
調査地は、長岡京跡右京八条三坊十町にあたる。また、伊賀寺遺跡の南東端に位置する。小泉川にほぼ平行して北西から南東方向に延びる丘陵の西端部分にあたる場所で、小泉川氾濫源(樽井地区)と約2mの比高差がある。調査地の北側に丘陵の崖面が想定されている。右京第943次調査では、縄文時代の住居跡や火葬骨を埋葬した土壌、弥生時代終末期の竪穴式住居跡などが検出されている。今回の調査地は、右京第943次調査地に隣接する。

### 2. 調査概要(第15・16図)

伊賀寺地区は、右京第943次調査の調査成果を参考に、灰褐色・紫暗褐色土の遺物包含層まで重機により掘削した後、人力で掘削作業を行った。また、東部で右京第943次調査地を含む南北方向の断ち割りを実施した。調査成果として、右京第943次調査で検出された弥生時代終末期(庄内併行期)の竪穴式住居跡(SH02)の東隅、同時期の竪穴式住居跡(SH05)、時期不明の土坑(SK03)、竪穴式住居跡SH05の上面を通る中世の溝(SD01)、中世以降の掘立柱建物跡や柱穴などを検出した。以下に主な検出遺構について記述する。遺構番号は右京第943次調査地から連続する竪穴式住居跡SH02・SH05はそのまま使用し、それ以外は新たに遺構番



第15図 伊賀寺地区・樽井地区  
調査トレンチ配置図



第16図 伊賀寺地区・樽井地区遺構配置図

号をつけた。

### 1) 弥生時代の遺構

**竪穴式住居跡 S H05 (第18図)** 検出面からの深さ約0.3m、一辺約8.0mの方形住居跡である。中軸線が約45度西に振れている。南東辺の中央部に2.0×1.5mの袋状土坑があり、南東以外の辺に1.0~1.2mのベット状遺構が付き、明瞭でない部分があるが周壁溝が廻る。中央部に被熱を受けた炉跡と推定される場所が2か所あり、1か所は直径約0.6m、深さ約0.2mを測り、焼土が混入していた。隣接するもう1か所は約0.5mの方形で深さ約5cmを測る。柱穴は深いもの4か所とやや浅いもの2か所、合計6か所を検出した。南西辺側でベット状遺構の整地土の下層から周壁溝が確認できたので、竪穴式住居跡 S H05が6.5×7.0mの住居を拡張したものであることが判明した。遺物は床面直上から出土したものが大半であるが、住居跡がほぼ埋まった後に混入したと推定されるものがあった。

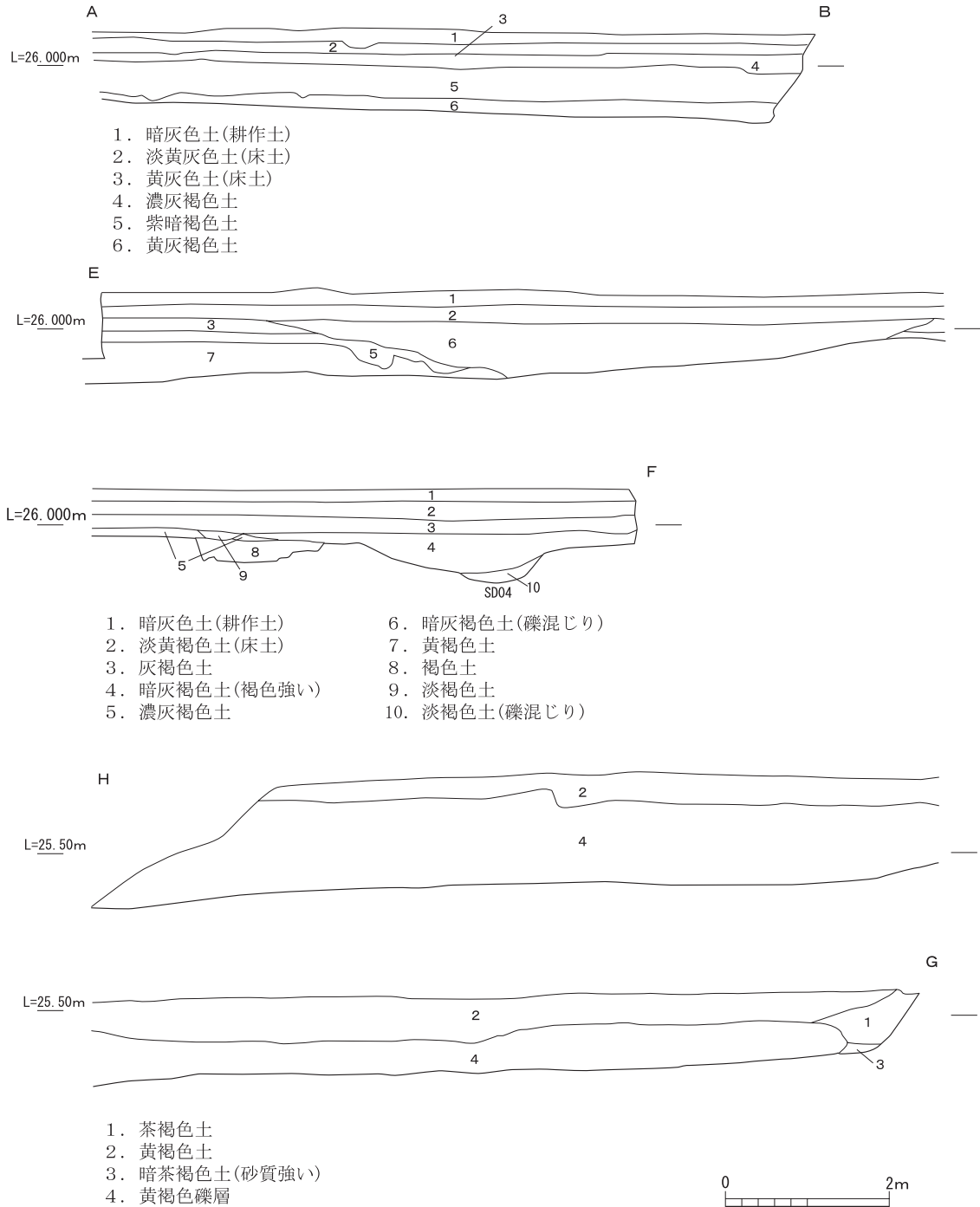
**竪穴式住居跡 S H02 (第16図)** 右京第943次調査で検出された住居跡の東隅を確認した。検出面からの深さ約0.3mを測り、周壁溝が廻る。

### 2) 中世の遺構

**溝 S D01 (第16図)** 竪穴式住居跡 S H05の上面で検出した、弧を描くように北東から南西方向にはしる素掘り溝である。埋土は淡褐色土で幅0.3~0.4mで、深さ5cm前後を測る。13世紀以降の土師器皿の細片が若干出土した。

**溝 S D04 (第16図)** 竪穴式住居跡 S H05の南西部上層で検出した。埋土は礫を含む淡褐色土で、幅0.4~0.7m、深さ10cm前後の素掘り溝である。北から南に傾斜している。若干の土師器皿、須恵器などの細片が出土した。



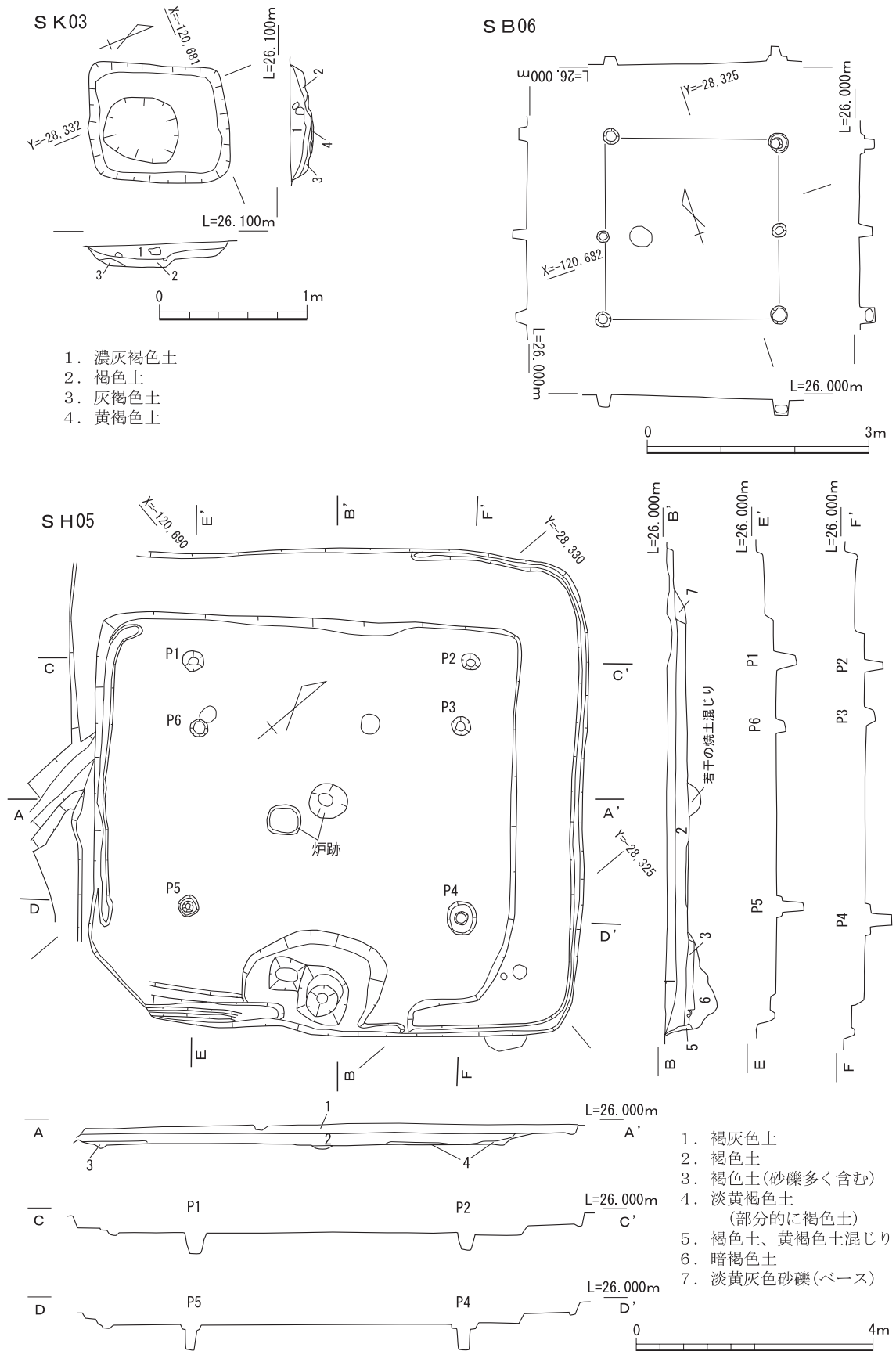


第17図 伊賀寺地区土層断面図

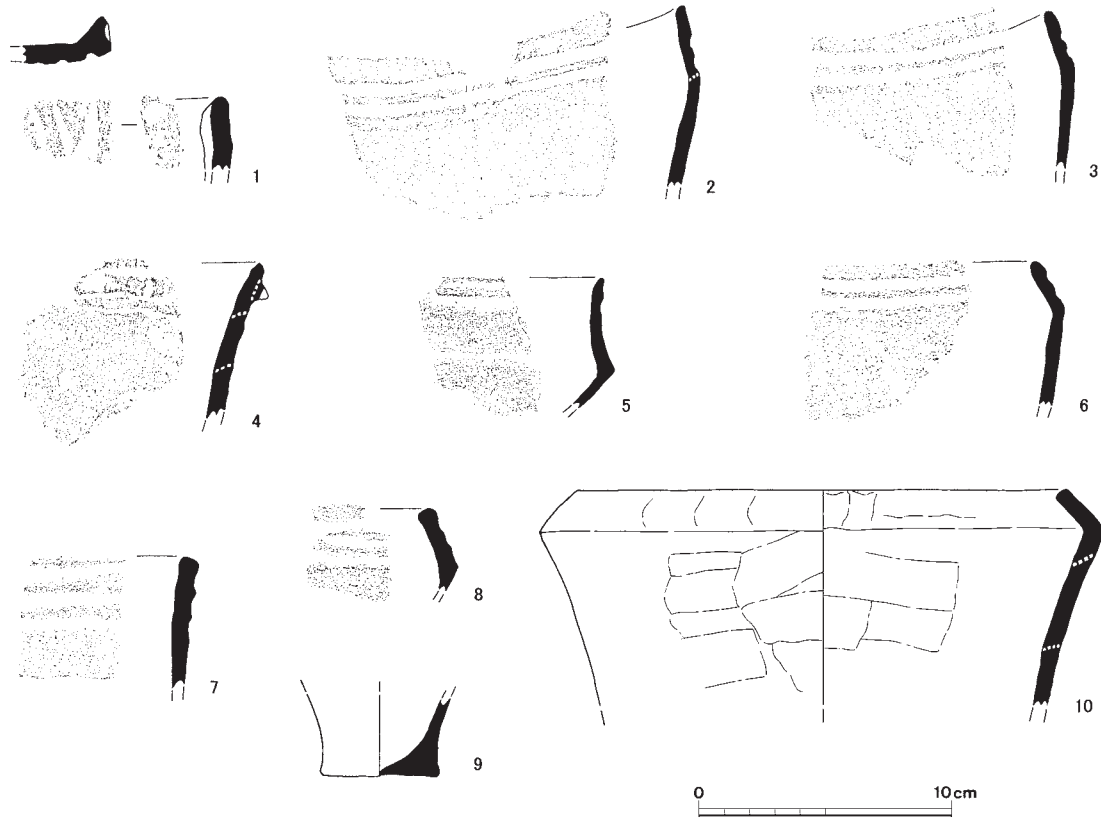
掘立柱建物跡 S B06 (第18図) 竪穴式住居跡 S H05の北方で検出した、円形柱穴が並ぶ掘立柱建物跡である。柱間は桁行約2.5mで、梁間の中間に柱を持つ、2×1間の建物跡に復元できる。柱穴から13世紀以降の土師器皿の細片が出土した。

### 3) 時期不明の遺構

土坑 S K03 (第18図) 竪穴式住居跡 S H02の東で検出した、0.8×1.0mの方形土坑で南部が窪み、深さ0.2mを測る。時期のわかる遺物は出土していない。(石尾政信)



第18図 土坑SK03・竪穴式住居跡SH05・掘立柱建物跡SB06実測図



第19図 伊賀寺地区出土遺物実測図(1)

### 3. 出土遺物(第19～20図)

出土遺物は、灰褐色・紫暗褐色土の遺物包含層から少量の土師器・須恵器・平瓦などが出土したが、図化できるものはなかった。東部の断ち割りで黄褐色土および砂礫層から縄文土器が出土している。竪穴式住居跡S H05から弥生土器が出土している。以下に主な遺物について記述する。

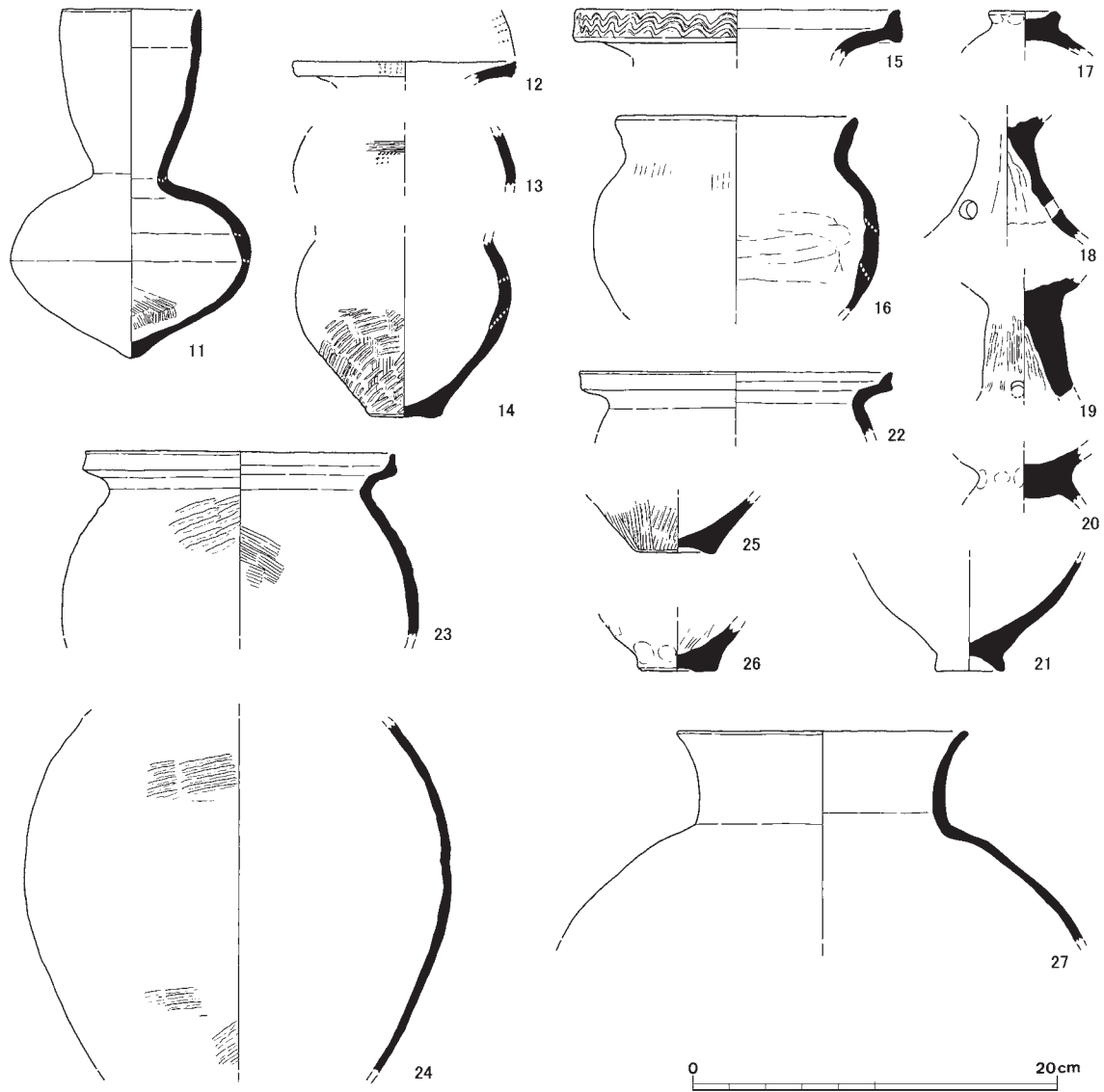
#### 1) 縄文土器(第19図)

1は断ち割り内から出土した北白川C式の深鉢口縁部である。2・6～8・10は断割りで出土した縄文時代後期の土器片で、元住吉山Ⅱ式～宮滝式の時期と考えられる。2・6・7・10は生駒山西麓産と考えられる特徴を持っている。3・5は弥生時代の竪穴式住居跡S H05埋土中から出土した元住吉山Ⅱ式～宮滝式の時期の土器片である。いずれも生駒山西麓産土器の特徴を持つ。4は遺構精査中に検出した縄文時代晩期突帯文土器口縁部である。胎土にはチャートや頁岩、砂岩の円磨度の高い砂粒が含まれ、後期の土器と胎土が異なる。9は断ち割り部から出土した深鉢底部である。

(大本朋弥)

#### 2) 竪穴式住居跡S H05出土遺物(第20図)

11は長頸壺で、算盤玉状の体部に逆「ハ」字形に広がる口縁部が付くものである。器壁表面は摩滅のため不明である。内面は淡灰褐色、外面は淡黄橙色を呈す。口径7.4cm、体部径13cm、高さ19cmを測る。12は壺の口縁端部である。端部をわずかに拡張し、外・内面に3列の刺突がみられる。淡橙色を呈す。15も壺の口縁端部である。端部を上方に拡張し、外面に波状文が施される。暗い黄橙色を呈す。口径17.4cmを測る。13は甕の体部である。14も甕の体部である。外面に



第20図 伊賀寺地区出土遺物実測図(2)

タタキ痕がみられる。底径3.5cmを測る。16も甕である。外面の口縁部は暗い黄橙色、体部は黒灰色を呈す。口径12.8cmを測る。22は、口縁端部を上方につまみ上げる形態の甕である。暗い橙色を呈す。口径16.8cmを測る。23も口縁端部を上方につまみ上げる形態の甕である。体部外面にタタキ痕、内面にハケによるナデが残る。暗い黄橙色を呈す。口径16.8cmを測る。24は23とよく似た甕の体部である。17は蓋のツマミである。18~20は高杯の脚部である。25・26は甕の底部である。21は壺の底部である。体部の外面にタタキ痕が残る。内面が灰黄褐色、外面が暗い黄橙色・灰黄褐色を呈す。体部径23.1cmを測る。これらは住居跡の下層や床面直上から出土した。弥生時代終末期のものである。27は直立ぎみの口縁部で端部が外反する。調整は器壁表面が摩滅のため不明である。口径16cmを測る。住居跡が、ある程度埋没した後の上層から出土した。古墳時代中期のものである。

#### 4. 小結



今回の調査では、弥生時代終末期の竪穴式住居跡および中世の掘立柱建物跡を検出したが、長岡京期の遺構は無かった。長岡京期の遺構は施工されなかったか、中世以降に削平された可能性が高い。東部で右京第943次調査地を含む南北方向の断ち割りを行ったところ、住居跡・柱穴が掘りこまれた黄褐色土から若干の縄文土器、その下層の礫層から縄文時代後期の土器が出土した。このことから、この地表では縄文時代中期・後期の遺構が検出されている低位段丘の土砂が再堆積した場所に、竪穴式住居跡などが作られていることが判明した。(石尾政信)

### (3) 長岡京跡右京第947次調査(7ANOTI-2・樽井地区)

#### 1. 調査概要(第15・16図)

今回の調査地は、長岡京市下海印寺樽井に所在し、標高26.5mを測る段丘の崖面から標高24.5mの氾濫源にかけての地形の変換点にあたる。

調査によって小泉川水系による開削と堆積の状況を確認した。第4層の黄褐色粘質土(床土)からは、瓦器椀や土師器皿などが出土しており、下層に堆積した砂礫は、拳大から人頭大までの大きさで、流路によって古墳時代の遺物を含むもの、平安時代から中世までの遺物を含む層がある。

近世以降の井戸2基(S E 02・03)と、古墳時代以降の小泉川旧河道(N R 01)、縄文時代以降と考えられる同河道2条(N R 04・05)、縄文時代の伊賀寺遺跡が載る段丘の裾部を検出した。

近世井戸 S E 03(第16図) 掘形の直径1.4mを測り、深さ1.2mまでを確認した。上段が石組みで、下段は縦板組みの構造となっていた。

近世井戸 S E 02(第16図) 掘形の直径1.3~2.1m、深さ1.9mを測る。最下層で直径約10cmの丸太材を使用した木枠が一辺約90cmの方形に組み立てられていたが、縦材はこの井戸を廃棄する段階で抜き取られており遺存していなかった。埋め土内より須恵器、天目茶碗が出土した。

旧河道 N R 01(第16・21・22図) 全体の規模は明かでないが第21図の第5~19層、第22図の第6~11層を埋土とする旧河道である。検出面の標高24.5m、川底の標高23.2mを測る。6~10層の堆積は幅約10mを測り、第6~8層中より須恵器壺、平安時代の無釉陶器、瓦器椀等が出土した。また、13~16層の堆積は幅約6.0mを測り、第15層中より須恵器円面硯、緑釉陶器椀、第16層中より古墳時代の須恵器杯身等が出土した。

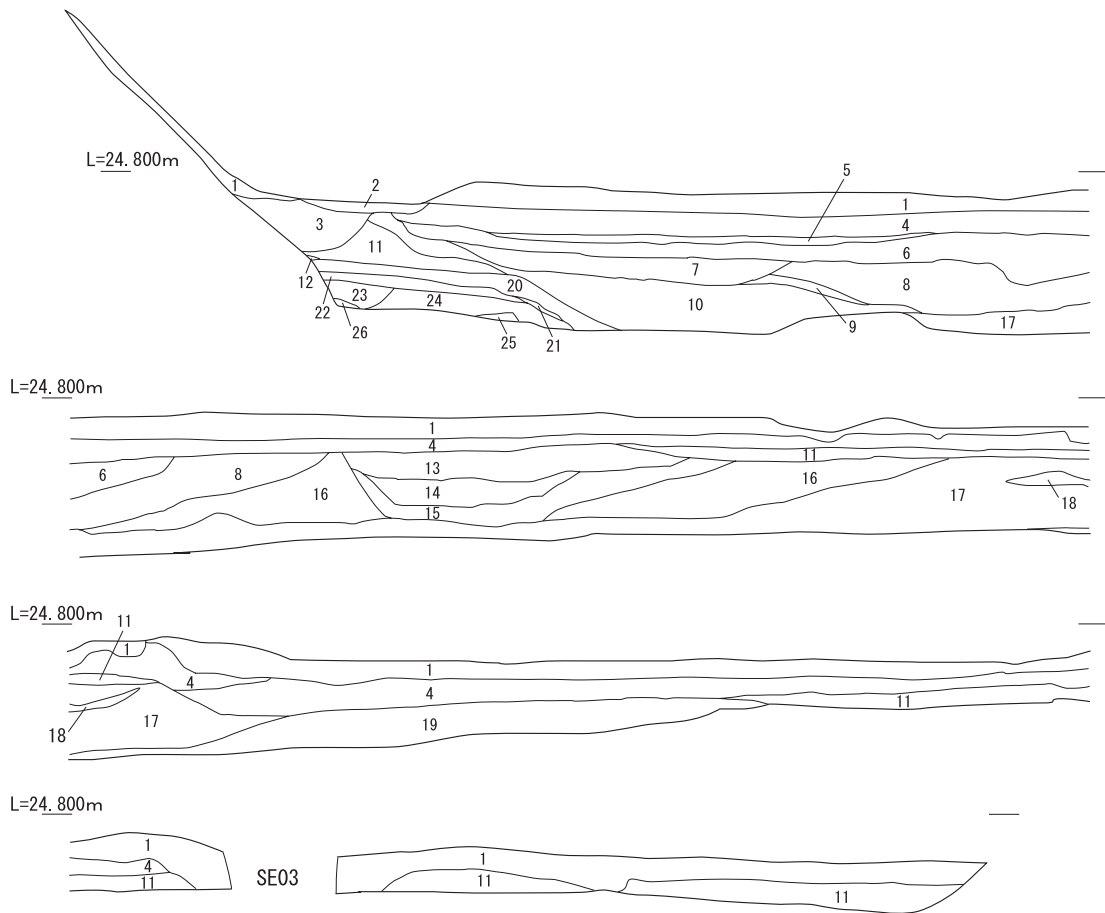
旧河道 N R 04・05(第16・22図) 北側断面の最下層の第12層が流路内堆積土と判断される旧河道で、調査時にもこの層から湧水がみられた。北西から南東に方向をもっている。旧河道 N R 04が幅約1.6m、深さ約20cmを測り、旧河道 N R 05は幅約1.7m、深さ約14cmを測る。第9層を取り除いた段階で第12層の暗黄褐色砂層を検出し、この砂層中より縄文土器が出土した。

#### 2. 出土遺物(第23図)

1・2・4は旧河道NR05からの出土、3は旧河道NR04からの出土である。

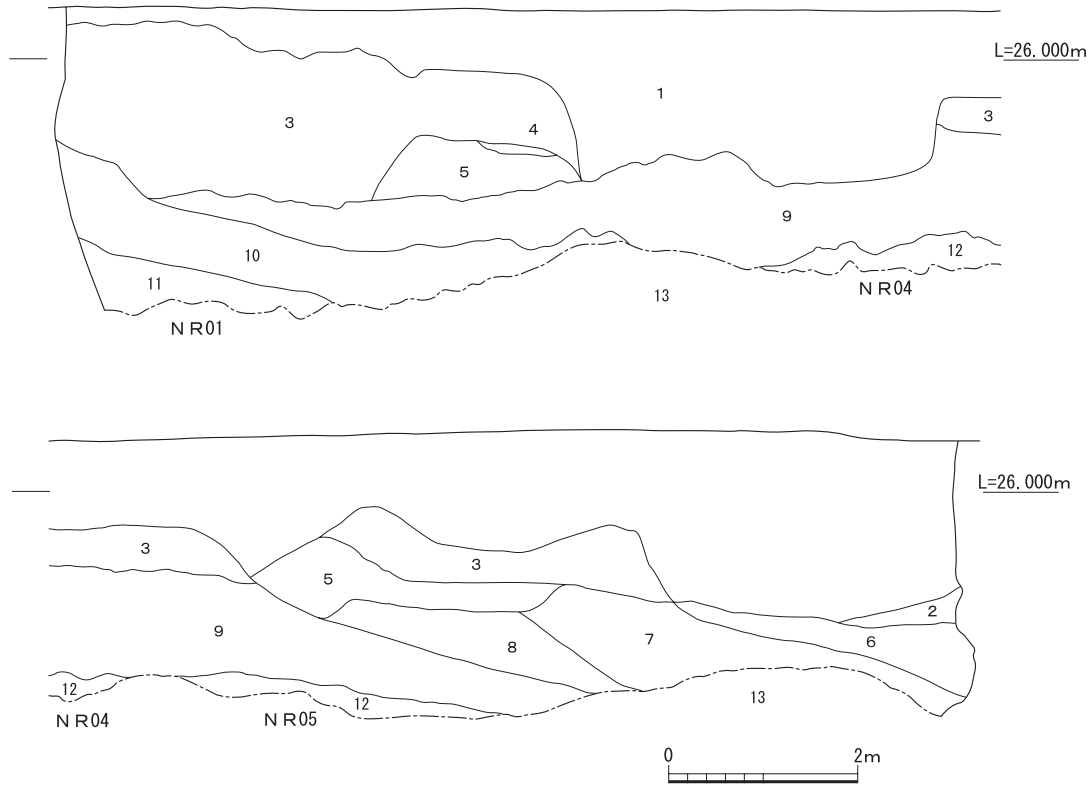
1は縄文土器深鉢の口縁部で、端部と横帯にLRの縄文を施し、内面はナデ調整。器面は外面がにぶい橙色、内面が明褐色を呈する。胎土には1～2mmの石英、長石を多く含んでいる。中期末の所産である。2は鉢の体部片である。外面二枚貝による条痕を施し、内面ナデ調整。器面は外面が黒色、内面が灰黄褐色を呈する。胎土にはごく細かい砂粒を含む。凹線文期の所産である。3は鉢の体部片である。外面にLRの縄文を施し、内面はナデ調整。器面は外面が橙色、内面が明赤褐色を呈する。胎土には1～2mmの石英、長石を含んでいる。中期末の所産である。

東壁断面図



- |                       |                      |                    |
|-----------------------|----------------------|--------------------|
| 1. 暗褐色粘質土（耕作土）        | 11. 暗黄褐色粘質土          | 19. 黄褐色砂礫（φ 1～3cm） |
| 2. 黒色粘質土              | 12. 褐色砂層             | 20. 暗黄褐色砂層         |
| 3. 黒灰色砂礫混粘質土          | 13. 黄褐色粘質土           | 21. 暗青灰色粘土層礫混じり    |
| 4. 黄褐色粘質土（床土）         | 14. 黄褐色粘質土           | 22. 明黄褐色砂層         |
| 5. 灰褐色砂礫（φ 3～10cm）    | 礫混じり（φ 10～20cm）      | 23. 濁褐色砂層          |
| 6. 暗黄褐色粘質砂礫（φ 5～30cm） | 15. 黄褐色粘質土           | 24. 灰黄褐色砂層         |
| 7. 灰褐色砂礫（φ 5～20cm）    | 砂礫（φ 10～30cm）        | 25. 黒色砂層（マンガン）     |
| 8. 暗褐色砂礫（φ 3～10cm）    | 16. 暗灰色砂礫（φ 10～30cm） | 26. 明黄褐色砂層         |
| 9. 暗灰色砂層              | 17. 黒灰色砂礫（φ 5～20cm）  |                    |
| 10. 黒灰色砂礫（φ 1～3cm）    | 18. 黒灰色砂層            |                    |

第21図 樽井地区（東壁）土層断面図

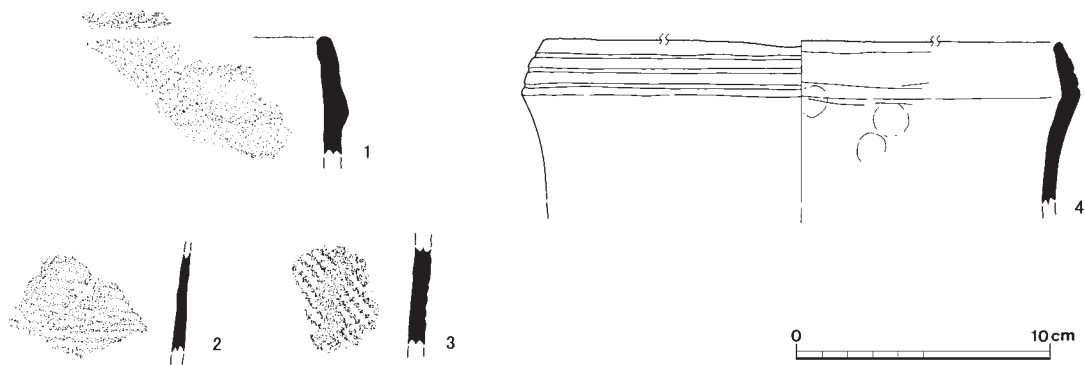


- |                        |                       |                      |
|------------------------|-----------------------|----------------------|
| 1. 黒灰色砂礫混じり粘質土         | 5. 黄褐色粘質砂礫 (φ 5～30cm) | 9. 灰褐色砂礫 (φ 5～20cm)  |
| 2. 黒灰色礫混じり粘質土          | 6. 灰褐色砂礫 (φ 5～20cm)   | 10. 暗褐色砂礫 (φ 3～10cm) |
| 3. 暗黄褐色粘質砂礫 (φ 5～30cm) | 7. 灰褐色砂礫 (φ 5～20cm)   | 11. 暗褐色砂層            |
| 4. 黒褐色粘質土              | 8. 灰褐色砂礫 (φ 5～20cm)   | 12. 暗黄褐色砂層 (縄文土器出土)  |
|                        |                       | 13. 明黄褐色砂層           |

第22図 樽井地区(北壁)土層断面図

4は深鉢の口縁部で、口径20.2cm、残存高6.3cmを測る。横帯に凹線3条を施し、下半と内面はナデ調整。器面は外面が灰褐色、内面がにぶい橙色を呈する。胎土には1mm前後の石英、長石を含んでいる。元住吉山I式期の所産である。

### 3. 小結

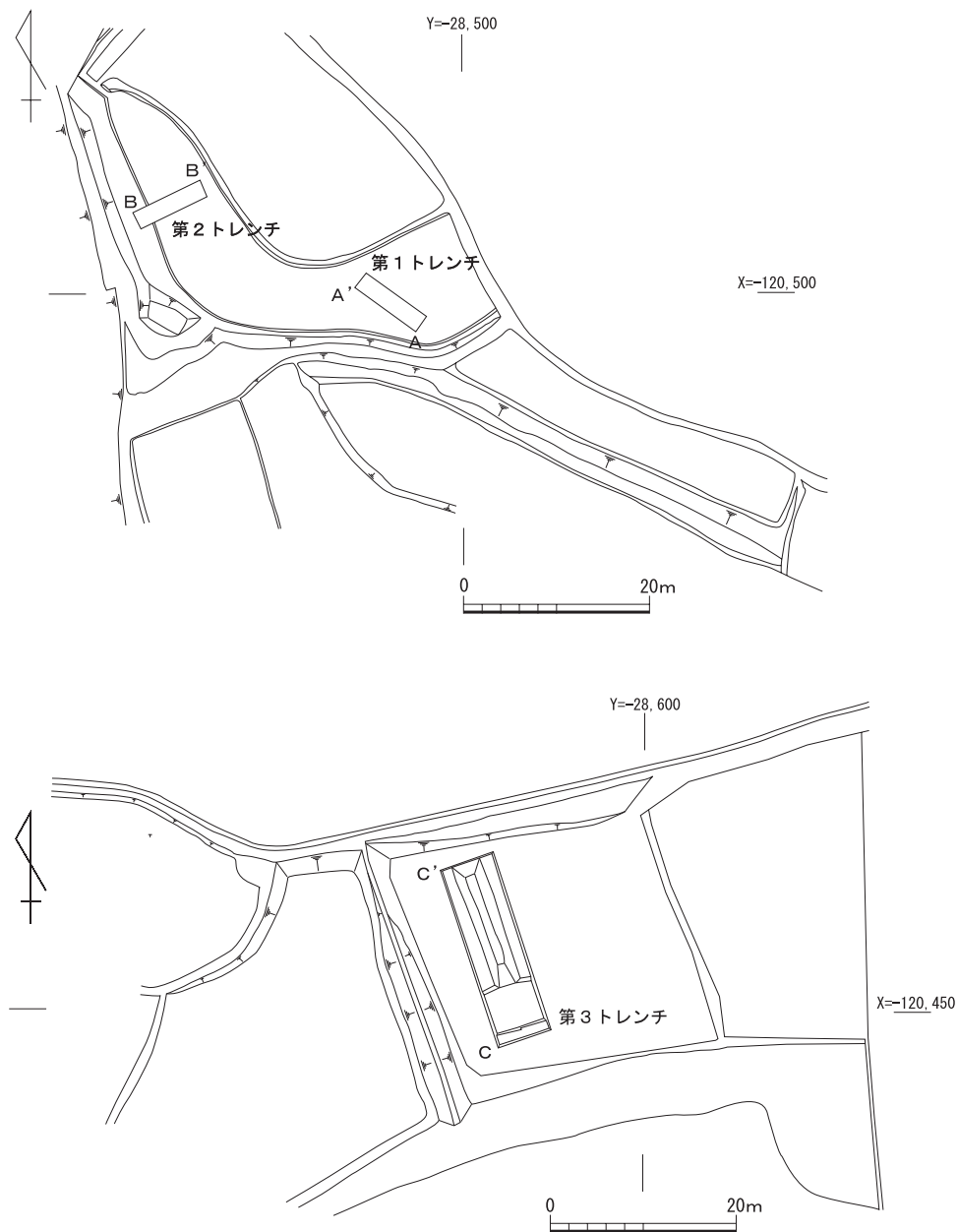


第23図 樽井地区出土遺物実測図

河岸段丘上面では、縄文時代中期末から後期にかけての集落遺跡の広がりが明らかになりつつあるが、段丘の裾部で同時期の流路跡を確認したことは、当時の集落の立地、景観を復原する上で貴重な資料を得たと考えられる。(戸原和人)

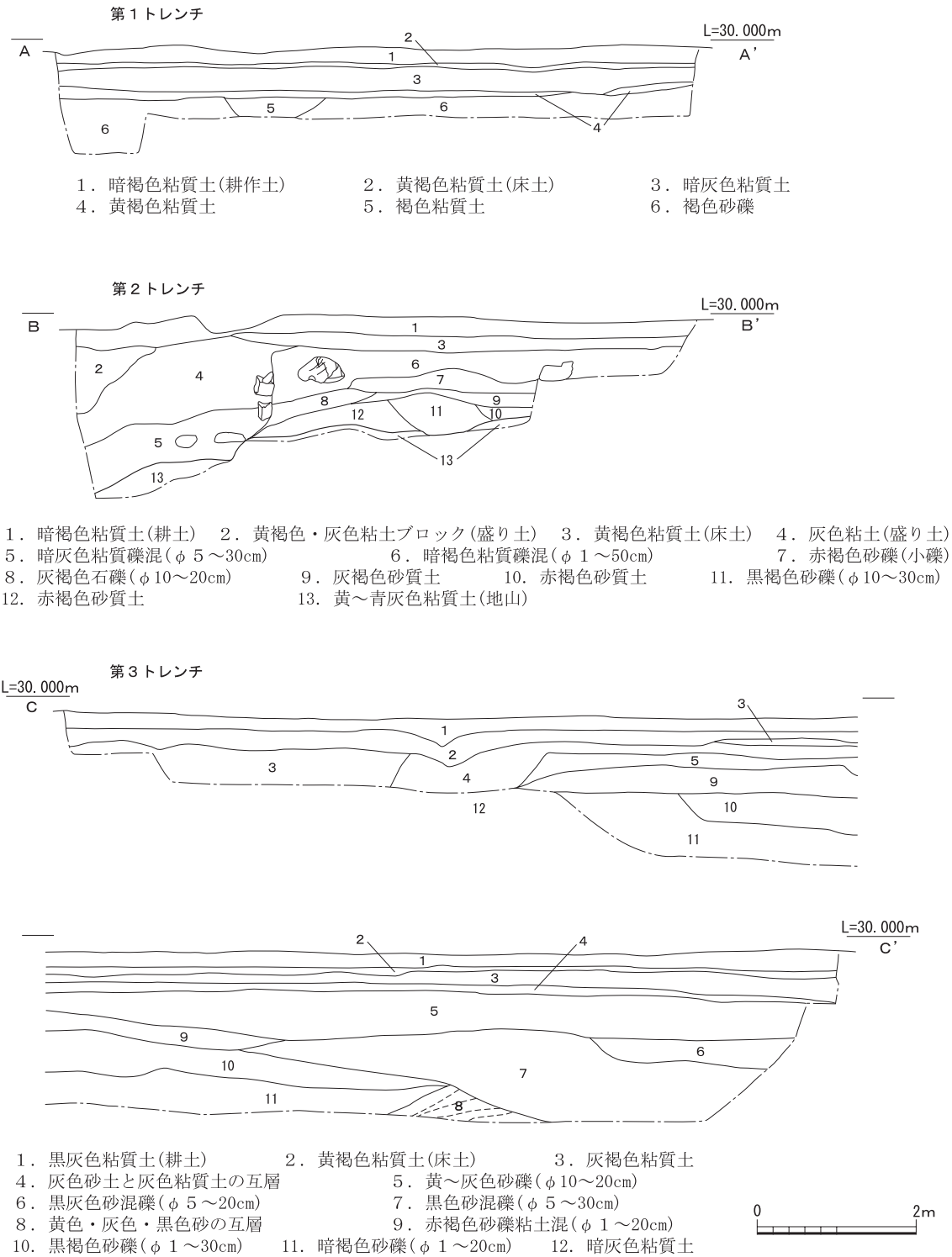
#### (4)長岡京跡右京第947次調査(7ANOOD-7・下内田地区)・伊賀寺遺跡

##### 1. はじめに



第24図 下内田地区トレンチ配置図





第25図 下内田地区土層断面図

調査地は、長岡京市下海印寺下内田に所在し、小泉川旧流路に架かる川向橋を挟んで東に2か所(第1・2トレンチ)、西に1か所(第3トレンチ)の調査トレンチを設けた。調査は、第1・2トレンチを先行して手掘り掘削を開始し、その後、第3トレンチの重機による掘削作業を行った。

2. 調査概要(第24・25図)

第1・2トレンチは、低位の段丘上面に位置しており、標高29.9mで畑として土地利用されていた。南の段丘下面では、水田として土地利用されている。1・2トレンチでは、耕作土の下に整地土として入れられた第3層黄褐色の粘質土、第4層灰色粘土層中には須恵器や土師器片が包含されており、その下面では拳大から人頭大の礫を含む灰褐色の砂礫が河川性の堆積をしている。さらに下層では、第13層黄～青灰色粘質土となる。砂礫層内には少量の遺物を含むが、下層の粘土層では、遺物は出土していない。第2トレンチでは、南への落ち込みの地形を確認し、第8層の上面で古墳時代の須恵器杯身・杯蓋が出土した。

第3トレンチは水田として土地利用されていた。耕作土・床土以下は旧小泉川の河道の堆積を示している。今回の調査トレンチ内では、西側に一時期の川の肩部があり、第10～12層をベースとし、西側に向かって河道が下がっていく状況を確認した。整地のために入れられた黄褐色粘質土の床土内より白磁・須恵器等が出土している。礫層から遺物は出土していない。

### 3. 小結

第2トレンチの第8層の上面で古墳時代の須恵器杯身・杯蓋が出土したことにより、調査地周辺に何らかの古墳時代の遺構が存在するものと考えられる。

(戸原和人)

## (5)長岡京跡右京第947次調査(7ANOHR-10・方丸地区、 7ANOBZ-2・菩提寺地区、7ANPSG-2・駿河田地区)・下海印寺遺跡

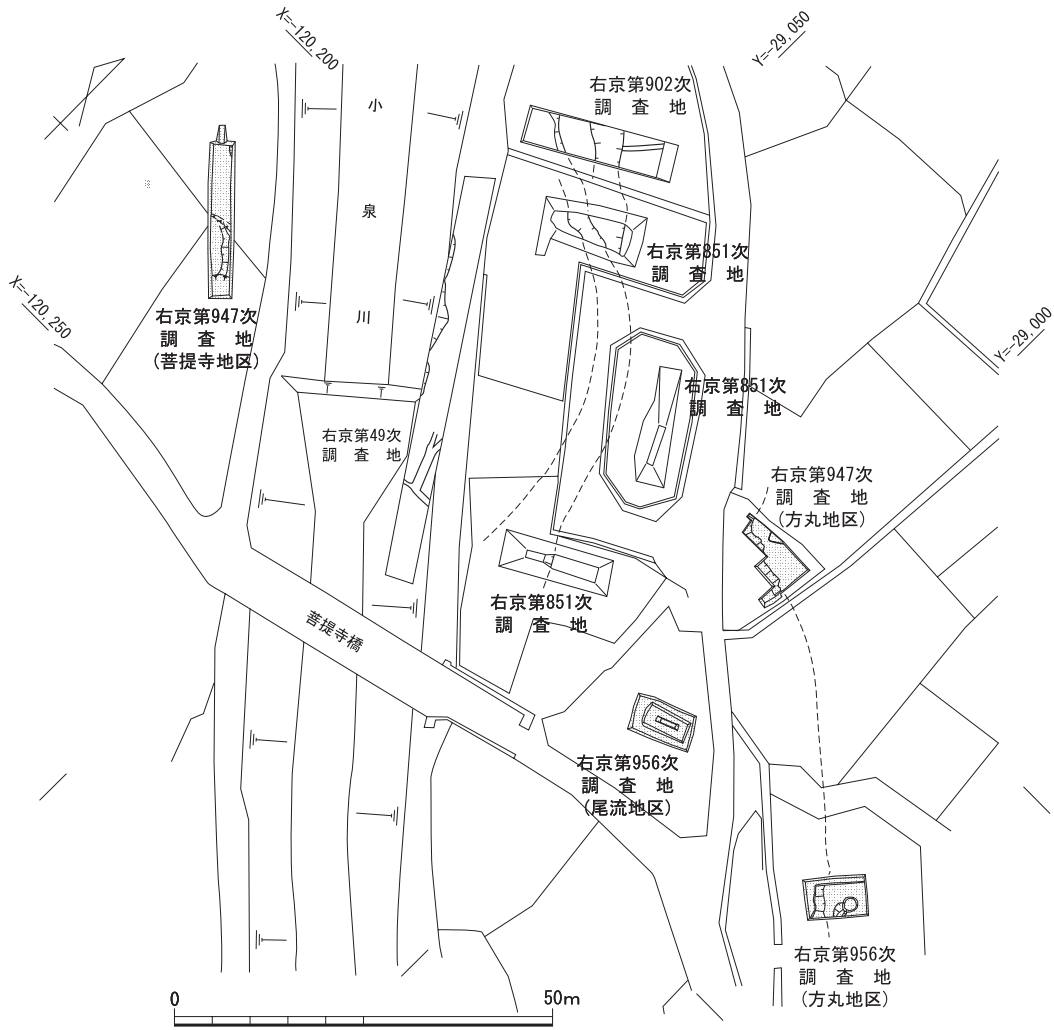
1. はじめに 今回の調査地は、小泉川左岸の方丸地区(7ANOHR-10)と、右岸の菩提寺地区(7ANOBZ-2)、右岸の駿河田地区(7ANPSG-2)である。方丸・尾流地区は、長岡京跡の西四坊大路と七条条間小路の交差点付近にあたる。菩提寺・駿河田地区は、長岡京城から外れる。

### 2. 調査概要

#### 1)方丸地区(7ANOHR-10)

##### (1)調査の概要(第27・28図)

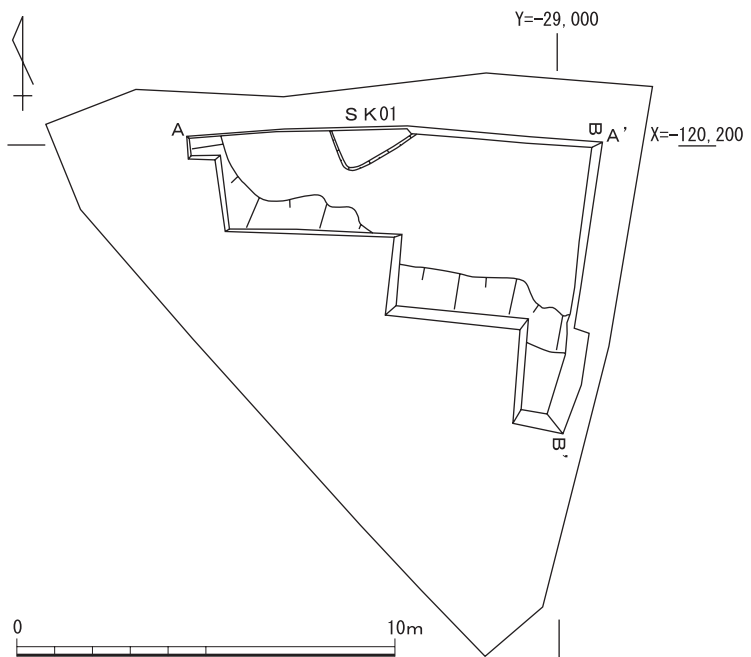
今回の調査地から北東部の高台では、数回にわたって調査が実施されてきた。縄文時代早期から中世にかけてのさまざまな遺構・遺物が見つかっている。今回の調査地付近でも、昭和56～60年度にかけて試掘調査が実施された。今回の調査地は、試掘坑にかかった状態で5m四方のトレンチを設定し掘削した。北壁から西壁にかけて落ち込みがみられ、試掘坑と思われた。この試掘坑西側と南側にわずかな落ち込みがみられたことから、西側と南側に部分拡張を行った。その結果、土坑1基と南側に下がる地形を検出した。



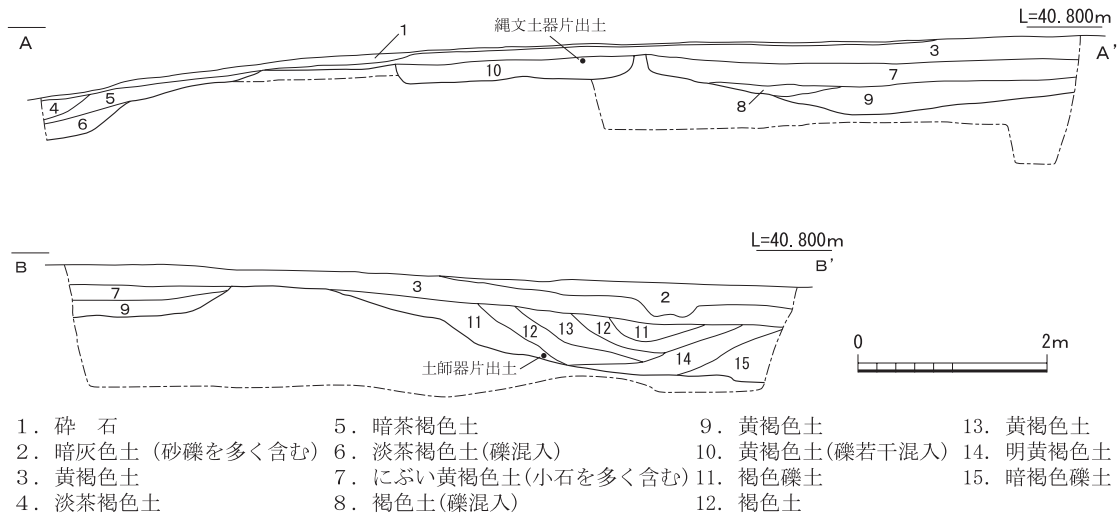
第26図 方丸・尾流・菩提寺地区トレンチ配置図

土坑S K01(第27図) 北壁にかかると検出した。0.6×2.1m以上、深さ0.2mを測る。若干礫を混入する黄褐色土を埋土とし、その上層から縄文土器片が出土した。

傾斜面(第27図) 南方に下がる地形を検出した。褐色礫土・褐色土・黄褐色土が互層に堆積し、一時期で埋まった状況を示す。褐色礫土下層から土師器片が数点出土し、その年代観より中世に埋まったものと思われ



第27図 方丸地区平面図



第28図 方丸地区土層断面図

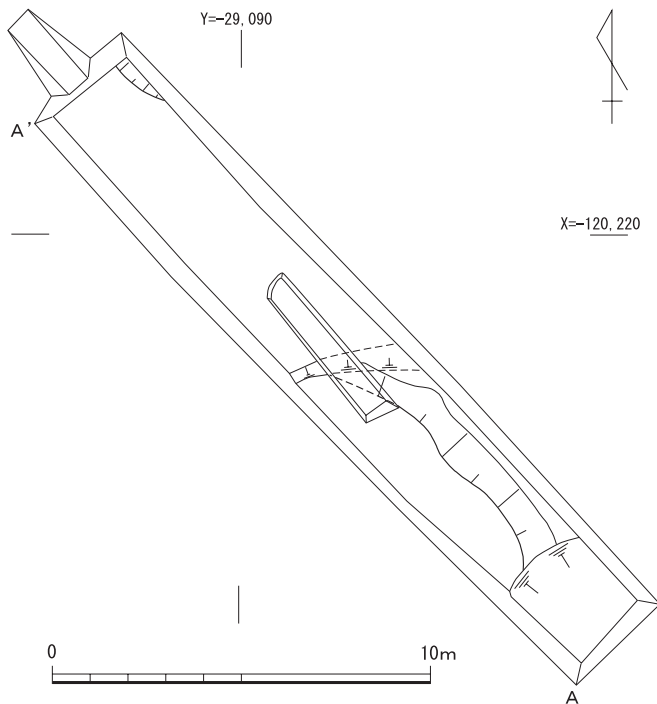
た。

(2) 出土遺物

今回の調査地から出土した縄文土器片や土師器片は、図示できるものでなかった。

(3) 小結

調査の結果、縄文時代の土坑1基を検出した。調査地外に続くため、全容については不明である。また、トレンチ南側で南へ下がる傾斜面を検出した。縄文時代早期から中世にかけての遺構が存在する高台の縁辺部にあたると思われる。長岡京跡に関連する遺構は検出できなかった。



第29図 菩提寺地区平面図

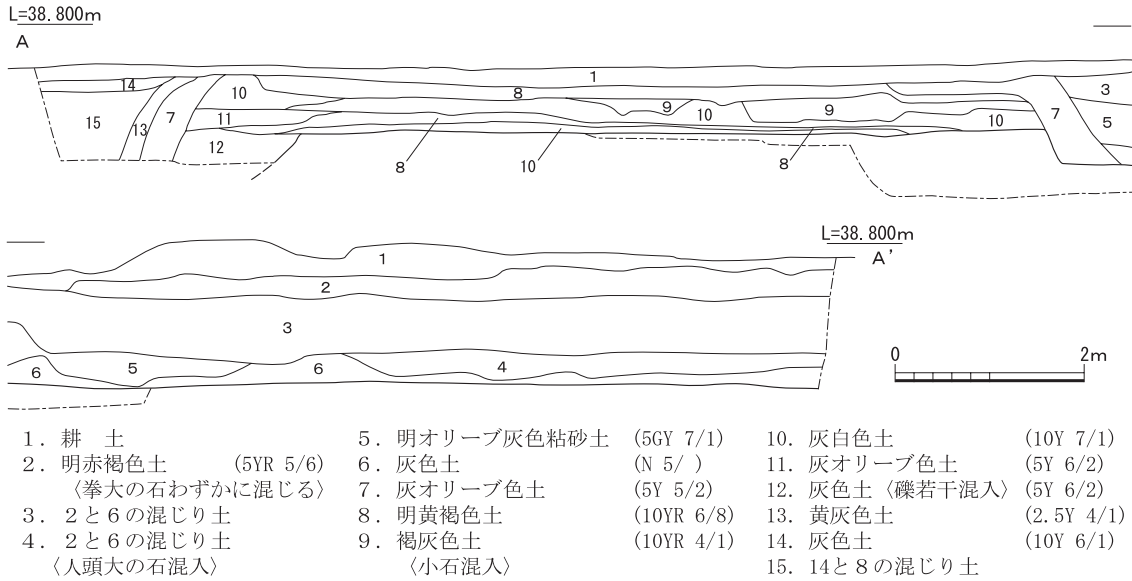
1) 菩提寺地区 (7ANOBZ-2)

(1) 調査の概要 (第29・30図)

現在の小泉川に平行する形でトレンチを設定した。調査地北側の隣接地で、平成17年度に右京第851次調査を実施しており、古墳時代の流路跡を検出し、集落跡などの存在を想定している。

重機掘削後人力による精査を行った結果、トレンチ中央やや南西側で安定した地盤(明黄褐色土)を検出した。この地盤は、トレンチ北西側・南東側・小泉川側になく、それぞれの方向に地形が下がることがわかった。堆積状況から明黄褐色土から北東側に落ち込む地形が古く、旧小泉川への傾斜面の肩部と思われる。その後トレンチ北西側と





第30図 菩提寺地区土層断面図

南東側の落ち込みが設けられ、埋まっていた。北西側の落ち込みの底は平坦であり、最下層に明オリーブ灰色粘砂土や灰色土が堆積しており、湿地状態であったと考えられる。出土遺物がなく、時期は不明である。南東側については、人頭大の石やコンクリートなどが混入した攪乱であった。

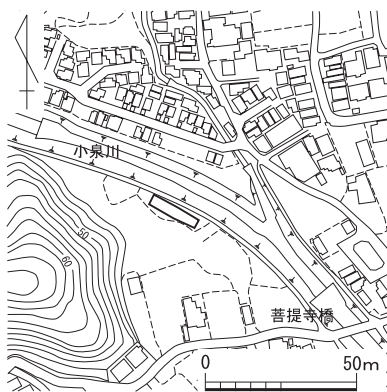
(2) 小結

今回の調査地は、小泉川と菩提寺川に挟まれたところの調査であった。そのためか、顕著な遺構は確認できなかった。また、右京第851次調査地と比べて1m強の標高差を有して、今回の調査地が低くなっていることから、後世の削平によって消失した可能性もある。

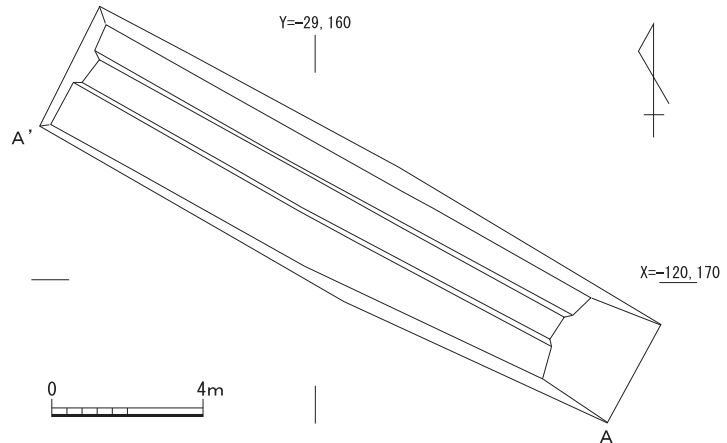
3) 駿河田地区 (7ANPSG-2)

(1) 調査の概要 (第31～33図)

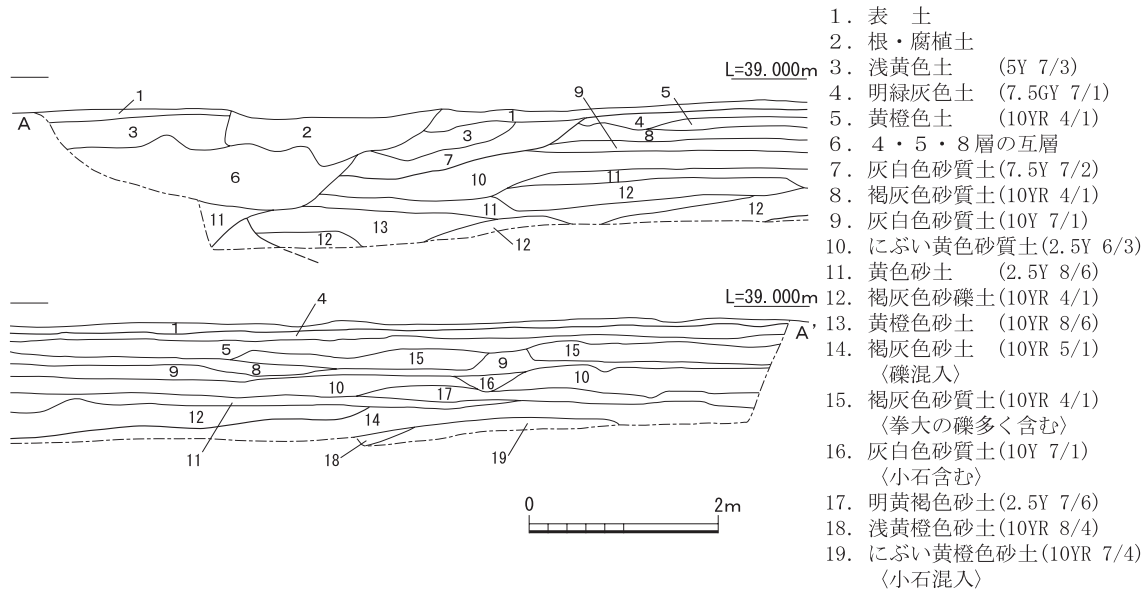
今回の調査地は、平成17年度に実施した右京第851次調査の菩提寺地区と駿河田右岸地区の間にあたる。駿河田右岸地区では、近世から現代の旧小泉川の堆積を確認している。今回はその隣



第31図 駿河田地区  
トレンチ配置図



第32図 駿河田地区平面図



第33図 駿河田地区土層断面図

接地にあたることから、同様の成果が想定できた。また、菩提寺地区では古墳時代の流路跡を検出していることから、その関連も窺えることが想定された。

現状の小泉川に平行する形でトレンチを設定した。トレンチ中央から北西側では砂質土・砂礫土・砂土が互層になって水平堆積しており、旧小泉川の河川内の堆積と考えられる。近世陶磁器の細片が1点出土している。

トレンチ南東端は根などで攪乱を受けていたが、上層からは、その互層を切る形で溝がみつかった。埋土は第3・7層の浅黄色土・灰白色砂質土である。下層からも緩やかに「U」字形にくぼむ流路跡がみられた。埋土は第11～13層の黄色砂土・褐灰色砂質土・黄橙色砂土である。黄色砂土は東側から流れ込む形で堆積していた。トレンチ南東側では水平堆積がみられないことから、右京第851次調査の駿河田右岸地区からこの付近までの間を旧小泉川は蛇行して流れていたと思われる。

(2)小結

旧小泉川の河川内の調査となった。出土遺物がないことから時期は不明である。(岡崎研一)

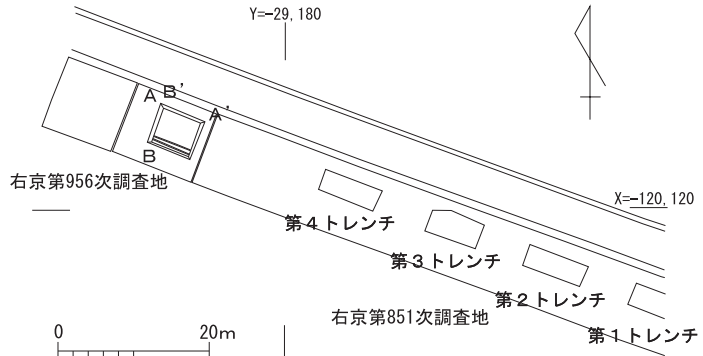
(6)長岡京跡右京第956次調査(7ANPSG-3・駿河田地区)・下海印寺遺跡

1. 調査概要(第34・35図)

調査地は長岡京市奥海印寺駿河田に所在し、昨年度におこなった右京第851次調査に引き続いて、宅地の移転が終了した地点を選び調査を実施した。

現地表面の標高は40.5mを測る。地表下0.5mまでが灰色砂礫やコンクリート基礎、0.9mまで

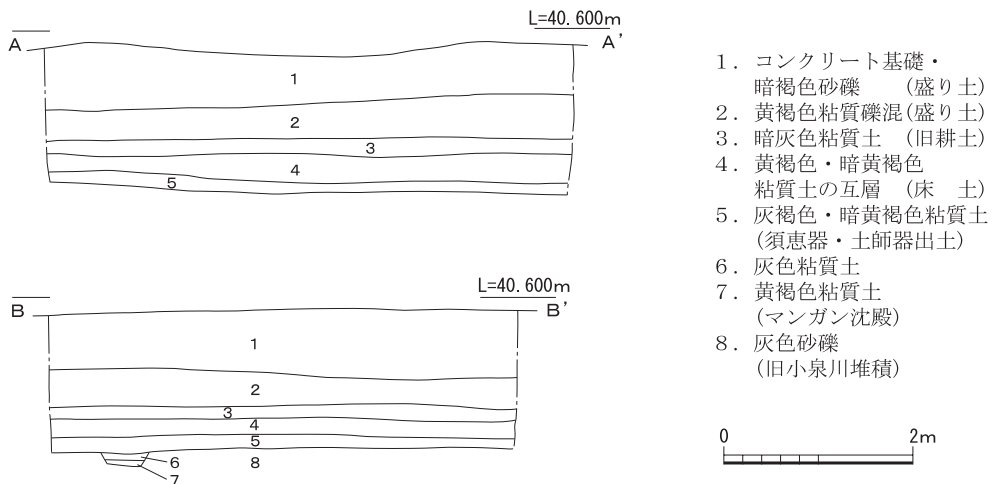
が褐色・青灰色粘質土による現代の盛り土である。以下、第3層の暗灰色粘質土(旧耕作土)、第4層の黄褐色粘質土の互層(床土)となり、地表下1.45mで旧小泉川水系の堆積である第8層の灰色砂礫となる。第5層の灰褐色・暗黄褐色粘質土中から須恵器・土師器等が出土したが、顕著な遺構は認められなかった。



第34図 駿河田地区トレンチ配置図

## 2. 小結

第5層中から少量の出土遺物が認められたものの本調査地の周辺では、小泉川水系の河川堆積が大部分を占め、集落等の土地利用については否定的な調査結果となった。(戸原和人)



第35図 駿河田地区土層断面図

### (7)長岡京跡右京第956次調査(7AN00R-7・尾流地区、7AN00R-11・方丸地区)・下海印寺遺跡

#### 1. はじめに

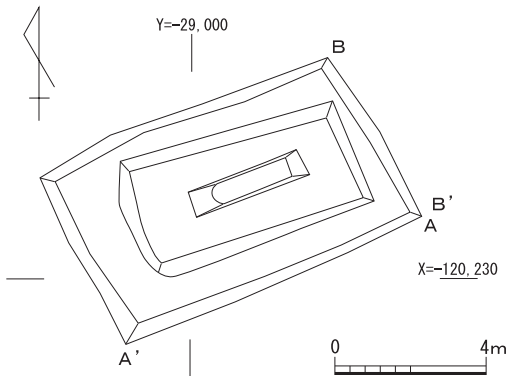
今回、実施した試掘調査地点は、平成20年度の右京第947次調査地の南側に位置する。調査地は、2か所の試掘トレンチを設定した。高台に設定したトレンチは方丸地区に、小泉川寄りに設定したトレンチは尾流地区にあたる。

2. 調査概要

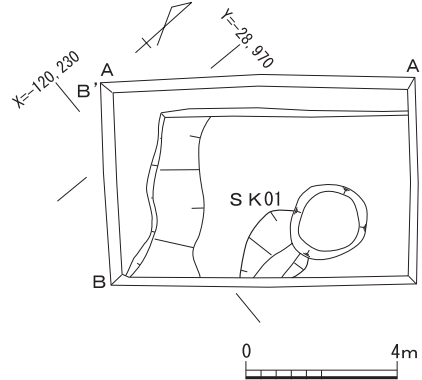
1) 尾流地区(7ANOOR-7)

(1) 調査の概要(第36・38図)

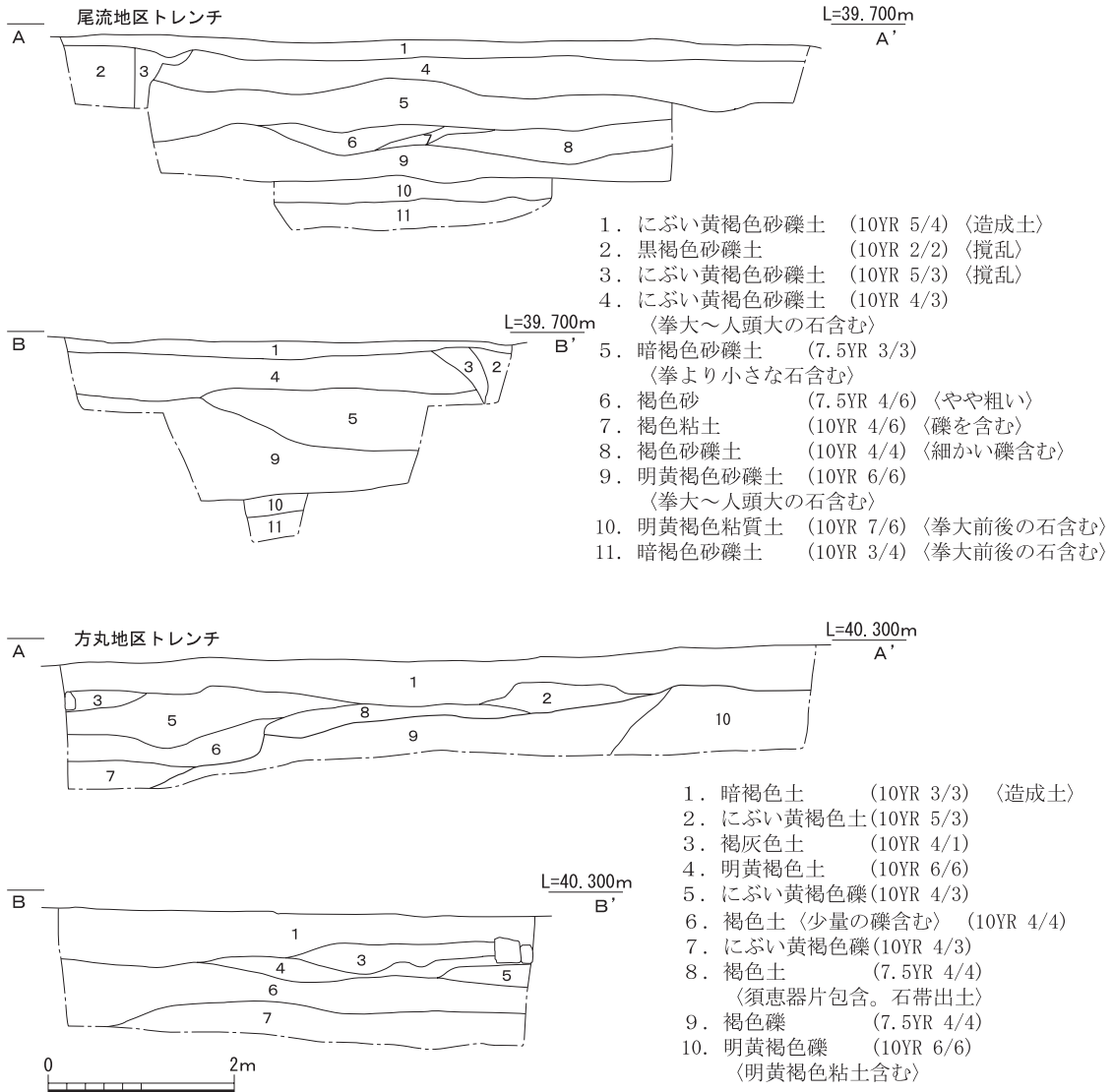
対象地内に40㎡のトレンチを設定した(第36図)。現地地表下約0.2~0.4mに堆積するにぶい黄褐



第36図 尾流地区平面図



第37図 方丸地区平面図

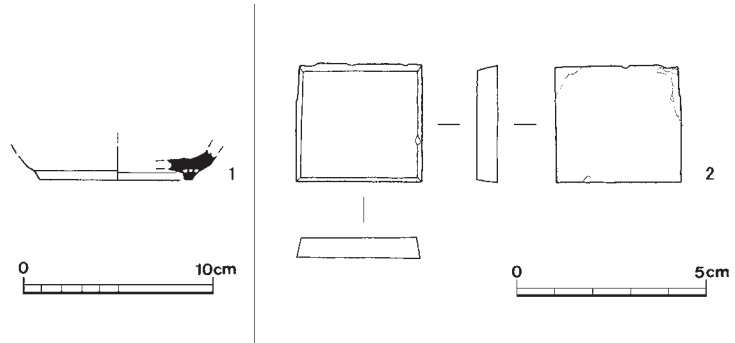


第38図 尾流・方丸地区土層断面図

色砂礫土下、2mの深さまで礫層の堆積のみで、遺構・遺物は検出できなかった。

(2) 小結

この付近は、後世に削平または地形の改変があったと考えられ、顕著な遺構は検出できなかった。



第39図 方丸地区出土遺物実測図

2) 方丸地区(7ANOHHR-11)

(1) 調査の概要(第37・38図)

尾流地区の試掘トレンチの東側で、40㎡の試掘トレンチを設定し調査を実施した(第37図)。検出遺構としては、第9層を掘り込む形で不定形な土坑を1基検出した。またトレンチの西側で、小泉川に向かって傾斜する地形を確認した。

**土坑SK01** トレンチの東側で不定形な土坑の一部を検出し、埋土内から馬の骨が出土した。土坑の時期については、出土した土器片が小片であることや、遺構確認が目的の試掘調査であり、土坑の完掘を実施していないため、現時点では不明である。

(2) 出土遺物(第39図)

遺物は第8層から出土した。1は、緑釉陶器の底部片である。直径4.05cmを測る高台は、貼り付け高台である。2は、同じく第8層から出土した石製巡方の未製品である。断面は台形で、厚さは0.55cm、底部は最大で3.3×3.1cmを測る。

(3) 小結

方丸地区では段丘の平坦部で、平安時代と思われる土器や巡方が出土し、時期不明ではあるが馬骨が出土する不定形な土坑を検出した。これらのことから、方丸地区においては、遺構が遺存していることが確認できた。

今回の調査は、遺構確認を目的とした試掘調査のため、平面図や土層の堆積状況などの記録作成ののち、埋め戻しを行なった。(村田和弘)

(8) 長岡京跡右京第956次調査(7ANOSJ-3・西条地区)・下海印寺遺跡

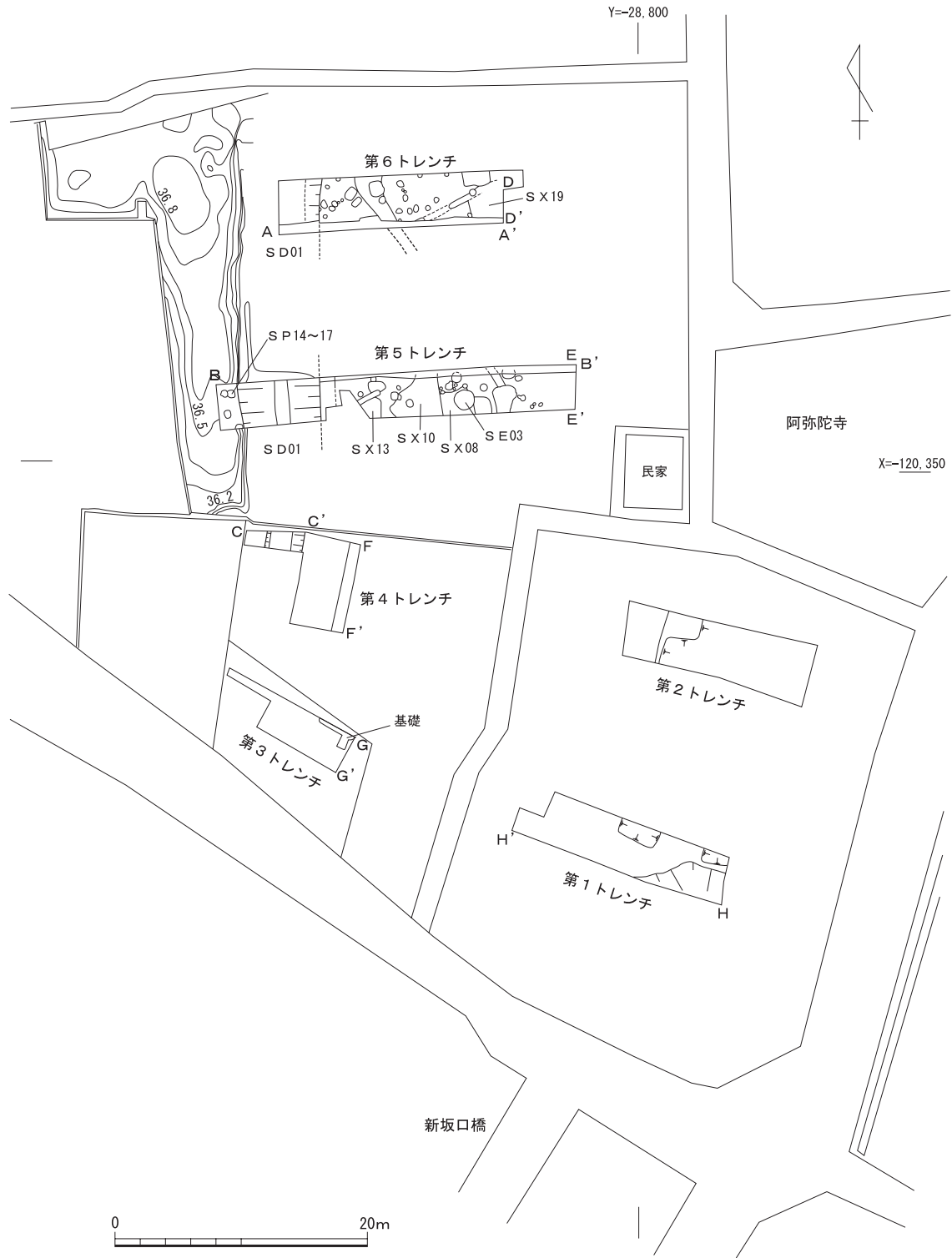
1. はじめに

調査対象地は、長岡京跡右京七条四坊十一・十二町と縄文時代から近世にかけての集落遺跡である下海印寺遺跡にかかる。東側隣接地には、縄文時代から近世にかけての伊賀寺遺跡が展開す



る。

当該地は、右京第957次調査(西条地区)の南東80m、右京第937次調査(上内田地区)の西隣の微高地にあたる。右京第957次調査では、古墳時代中期後半の溝や時期不明の竪穴式住居跡と思われる遺構が検出された。右京第937次調査では、弥生時代末から古墳時代初頭の流路跡と竪穴式住居跡を、古墳時代中期後半～後期にかけての土坑と流路跡を検出した。



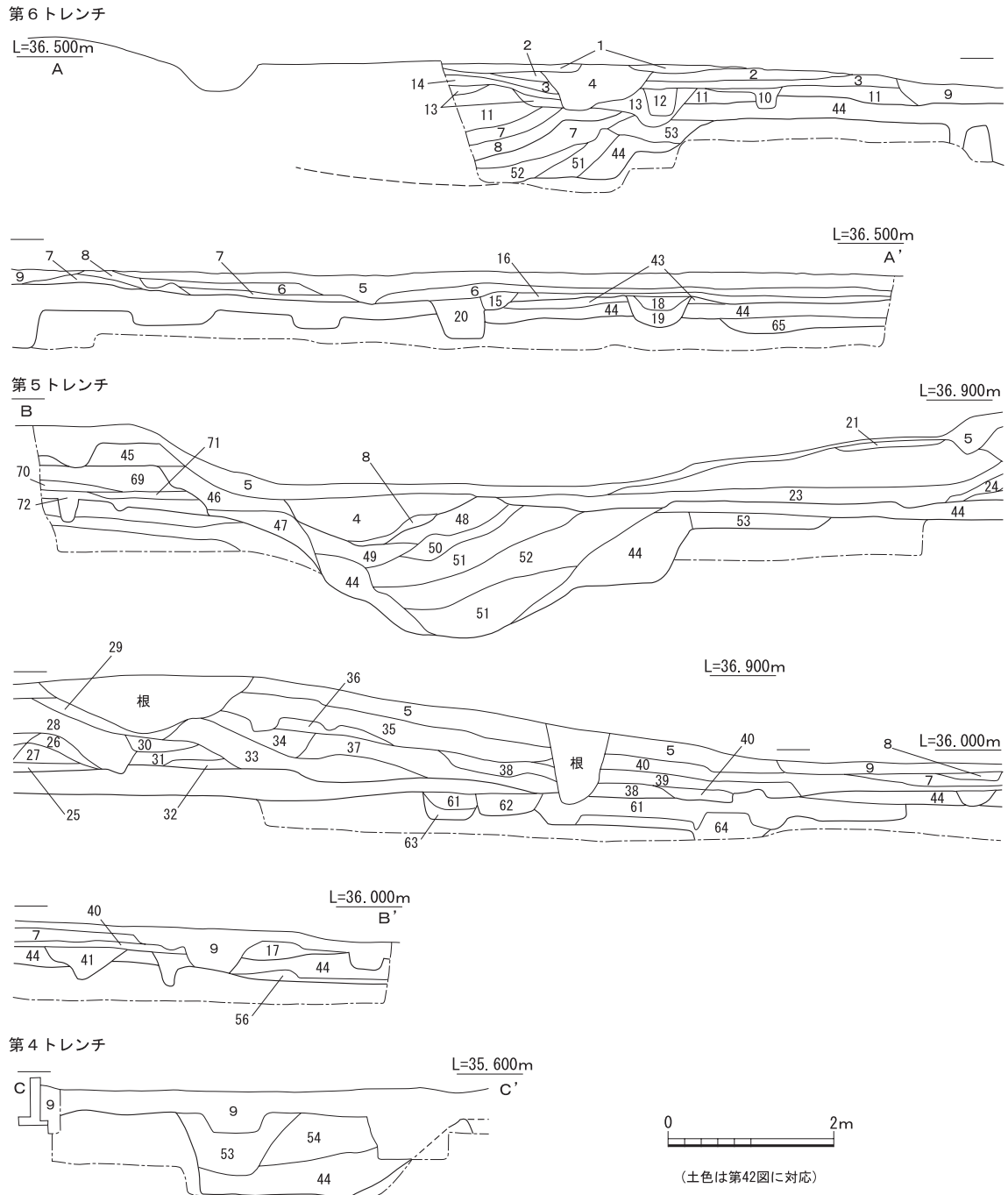
第40図 西条地区トレンチ配置図

対象地東側には、阿弥陀寺が存在する。創建時期については不明であるが、慶長10(1605)年の「京都所司代上竹赦免状」に寺名があり、天保10(1839)年に焼失・再建されている。

これら周辺の成果などから、微高地には弥生時代末から近世にかけての土器類が出土し、数時期にわたる集落遺構が存在すると考えられた。

## 2. 調査概要(第40~42図)

調査対象地は、北から南へ緩やかに傾斜しており、南側を小泉川が流れる。対象地中央には約



第41図 西条地区土層断面図(1)

1mの高まりを、西側には平面逆「L」字形の約0.7mの高まりを、幅5.5m、長さ32mと10mを認めた。前者については古墳の可能性も視野に入れて、後者についてはその範囲が一筆で括られていたことからその性格解明のために、古墳状隆起と逆「L」字形の高まり2か所にかかるようにトレンチを設定した(第5トレンチ)。また、周辺の様子を見るために、試掘トレンチをさらに5か所設定した(第1～4・6トレンチ)。今回の調査は、対象地内に複数の遺構面が存在する可能性が考えられたことから、断面観察と遺構検出に努め、面的な調査の必要性ならびにその範囲確認を重点的におこなった。調査を進めるにしたがって、遺構が広範囲に展開する様子が認められたことから、検出遺構については一部の遺構を除いて上面を検出するに留めた。また、出土遺物については、次年度以降の本調査にあわせて報告することとした。

**第1トレンチ** 対象地東側には右京第937次調査地があり、今回の調査地から2m強の高低差で低い位置が中世ならびに古墳時代の遺構面となることから、東方に下がる旧地形を確認するために南東部分に設定した。地表下0.5mでわずかに土器片を包含する黒褐色土が堆積しており、その下層で柱穴が数か所認められた。時期は不明である。その下層では、右京第937次調査地へと下がる堆積土(第66～68層)が認められた。掘削した最下層の暗褐色土から縄文時代の石鏃1点が流れ込んだ状況で出土した。

**第2トレンチ** 第1トレンチの北側に設定した。トレンチ西側に限られた範囲で安定した面が認められたが、大半は後世の攪乱であった。顕著な遺構は検出できなかった。

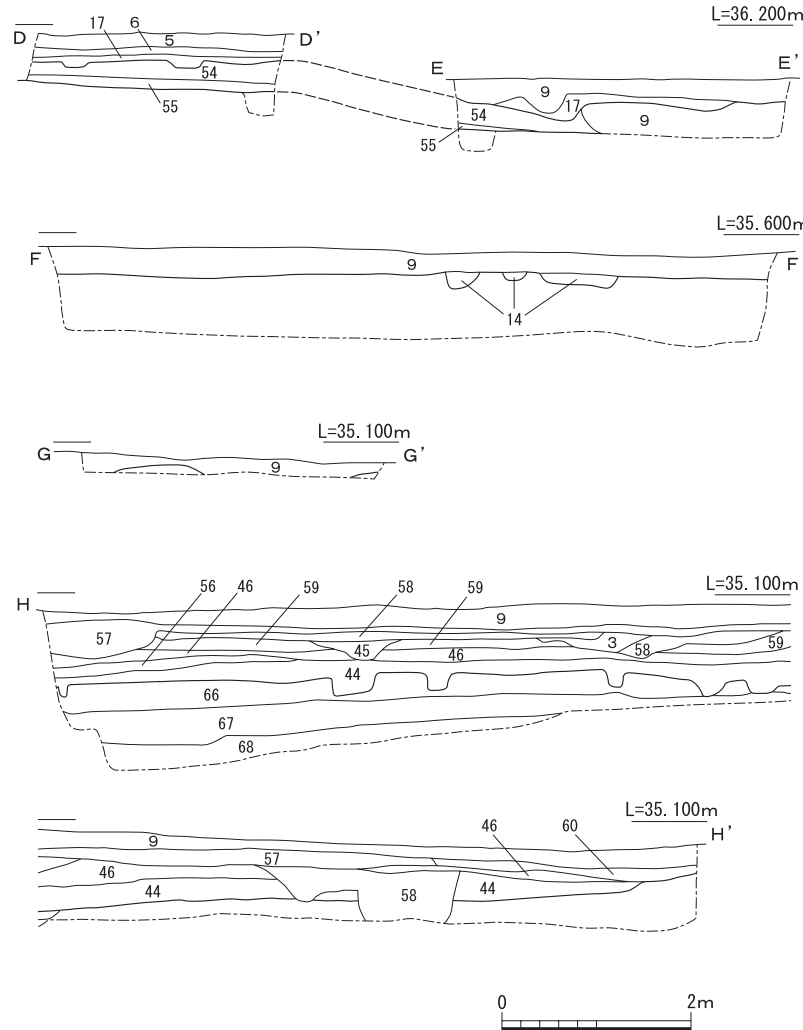
**第3トレンチ** 対象地南西隅に設定した。一部建物の基礎があり、その他は、黄褐色礫土の地山であった。この層は、大阪層群の上に堆積しており、遺物包含層や顕著な遺構が認められなかったことから、この付近は大きく削平を受けているものと判断した。

**第4トレンチ** 第3トレンチ北側に設定した。断面観察の結果、顕著な遺構が認められず、後世に大きく削平されたものとする。第5・6トレンチで確認した溝S D01が第4トレンチ付近まで続くかどうかを確認するために、トレンチ西方を一部拡張した。その結果、幅約3.4m、深さ約1.0mの溝を確認することができ、溝S D01はこの付近まで存在することがわかった。埋土は、小石～拳大の礫が混入する黒褐色土で、出土遺物はなかった。

**第5トレンチ** 調査開始前に現地表面で確認できた調査地中央付近の古墳状隆起と、対象地西側の平面逆「L」字形の高まりにかかる形で設定した。掘削した結果、古墳状隆起は旧宅地内の庭の築山であり、本来の地形は平坦であることがわかった。築山を除去したところ、遺構面は2面存在することがわかり、それぞれの遺構面から溝や土坑などを検出した。出土遺物から、上面は近世以降の遺構面、下面には弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期、奈良～平安時代、中世の遺構が存在することがわかった。トレンチ西端では南北方向の溝S D01が認められ、平行する形で逆「L」字形の高まりが認められた。一部この高まりを断ち割って試掘調査したところ、水平に盛られた土塁である可能性も考えられた。この盛り土は締まっており、この盛土下からは、一辺0.7m前後の隅丸方形の柱穴が4か所で確認できた。

溝S D01の規模を確認するため、トレンチにかかった部分を掘削したところ、幅約5.6m、深

さ約1.6mの断面「U」字形の大溝であることがわかった。断面を観察すると、上位に壁土・焼土が混入した明黄褐色土が「U」字形に堆積することから、阿弥陀寺焼失後の整地に因るものと考えられる。溝中位からは近世初頭の大甕が散乱した状況で出土した。最下層から出土遺物がないため開削時期については不明であるが、長期にわたって徐々に溝が埋まったことがわかった。また、最下層は拳大から人頭大の礫が堆積しており、シルト層が確認できなかったことから、常



【近世中頃以降の埋土】

1. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)
2. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y 4/2)
3. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/3)
4. にぶい褐色土 (7.5Y 5/3)  
〈拳大の礫混入〉
5. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)
6. にぶい黄色砂質土 (2.5Y 6/3)
7. 灰黄色土 (2.5Y 6/2)
8. 明黄褐色土 (2.5Y 7/6)  
〈壁土・焼土混入〉
9. 攪乱・整地土
10. 11混じり浅黄色土 (2.5Y 7/4)
11. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)  
〈やや砂質〉
12. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)  
〈礫混入〉
13. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)  
〈やや砂質〉
14. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)
15. 黄色土 (2.5Y 7/8)
16. 灰黄褐色土 (10YR 4/2)
17. 黄橙色土 (10YR 7/8)
18. 灰黄褐色土 (10YR 5/2)  
〈やや砂質〉
19. 黄橙色土 (10YR 8/6)
20. 褐灰色礫土 (10YR 4/1)
- 21~40. 築山の盛り土
41. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/6)  
〈礫混入〉
42. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/3)

【中世～近世中頃の埋土】

43. 褐灰色土 (10YR 6/1)  
〈小石混入〉
44. 黒褐色土 (7.5YR 3/2)  
〈小石混入〉
45. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)
46. にぶい褐色土 (7.5Y 5/3)
47. 暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)
48. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)  
〈礫多く混入〉
49. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)  
〈やや砂質〉
50. 暗灰黄色土 (2.5Y 5/2)  
〈礫混入〉
51. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)  
〈拳大～人頭大の石混入〉

52. 黄褐色砂礫土 (2.5Y 5/3)
53. 黒褐色土 (10YR 3/1)
54. 黒褐色土 (10YR 3/1)  
〈拳大の礫混入〉
55. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/6)  
〈礫混入〉
56. 黄橙色土 (10YR 7/8)

【中世以降の埋土】

57. 明黄褐色土 (10YR 6/6)
58. 黄褐色土 (2.5Y 5/4)
59. 黄褐色土 (2.5Y 5/3)
60. 黒褐色土 (10YR 2/2)
69. オリーブ褐色土 (2.5Y 4/3)
70. にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)  
〈やや砂質〉
71. にぶい黄色土 (2.5Y 6/4)
72. 黄褐色砂質土 (2.5Y 5/4)

【庄内期の埋土】

61. 黒褐色土 (2.5Y 3/1)
62. 黒褐色土 (7.5Y 3/1)
63. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
64. 褐色土 (10YR 4/4)

【古墳時代後期の埋土】

65. 褐灰色土 (7.5YR 4/1)  
〈炭混入〉

【弥生時代以前の埋土】

66. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)
67. にぶい黄褐色土 (10YR 5/3)
68. 暗褐色土 (10YR 3/4)

第42図 西条地区土層断面図(2)

に水が溜まっているという状況でないことが窺えた。

**第6トレンチ** 第5トレンチ北側に平行する形で設定した。断面観察から小石が混じる黒褐色土(包含層)の上面と下面の2面に遺構が存在することがわかった。トレンチ西端で溝S D01の一部が認められた。肩部付近から瓦器碗の破片(12世紀頃)が出土した。溝S D01出土遺物としては最も古いものであることから、中世に築かれた可能性がある。この溝は南北方向に一直線に掘削されていること、土塁状の高まりと平行すること、中世にさかのぼる可能性があることから、この溝は土塁に平行に築かれた堀である可能性が高いと考えられた。溝S D01を部分的に掘削したが、底面には至らなかった。この溝内では、数回にわたっての壁土・焼土の混入土の堆積が認められたことから、第5トレンチと同様に阿弥陀寺焼失後に整地された可能性がある。

トレンチ東側からは、古墳時代後期の土器を包含する土坑(S X19)も検出した。全容は不明であるが、平面が方形を呈した遺構の一画とも見て取れ、竪穴式住居跡の可能性も考えられる。

### 3. 小結

調査の結果、対象地北半分には少なくとも2面の遺構面が存在することが明らかとなった。上面には、焼土の検出により阿弥陀寺焼失・再建に伴う近世の遺構が、下面には、庄内併行期～古墳時代後期にかけての集落跡と中世の遺構が展開するものと思われた。特に溝S D01と平行する土塁状の高まりは中世城館の可能性が高い。乙訓地域では、方形に堀と土塁を巡らす中世城館が、開田城や今里城など数例みつかっている。西条地区にも同様の施設が存在すると思われた。検出状況から城館の中心施設は、溝S D01と土塁状遺構の西側に展開すると思われる。

また、今回の検出遺構に加えて、周辺の調査事例となる右京第852・957次調査の西条地区や右京第862・870・957次調査の尾流地区、右京第902・928次調査の上内田地区の各調査成果を考えると、今回の調査対象地である高台には庄内併行期、古墳時代中期から古墳時代後期、奈良～平安時代・中世の集落跡が重複して存在する可能性が高く、面的な調査に期待されるところである。

(岡崎研一)

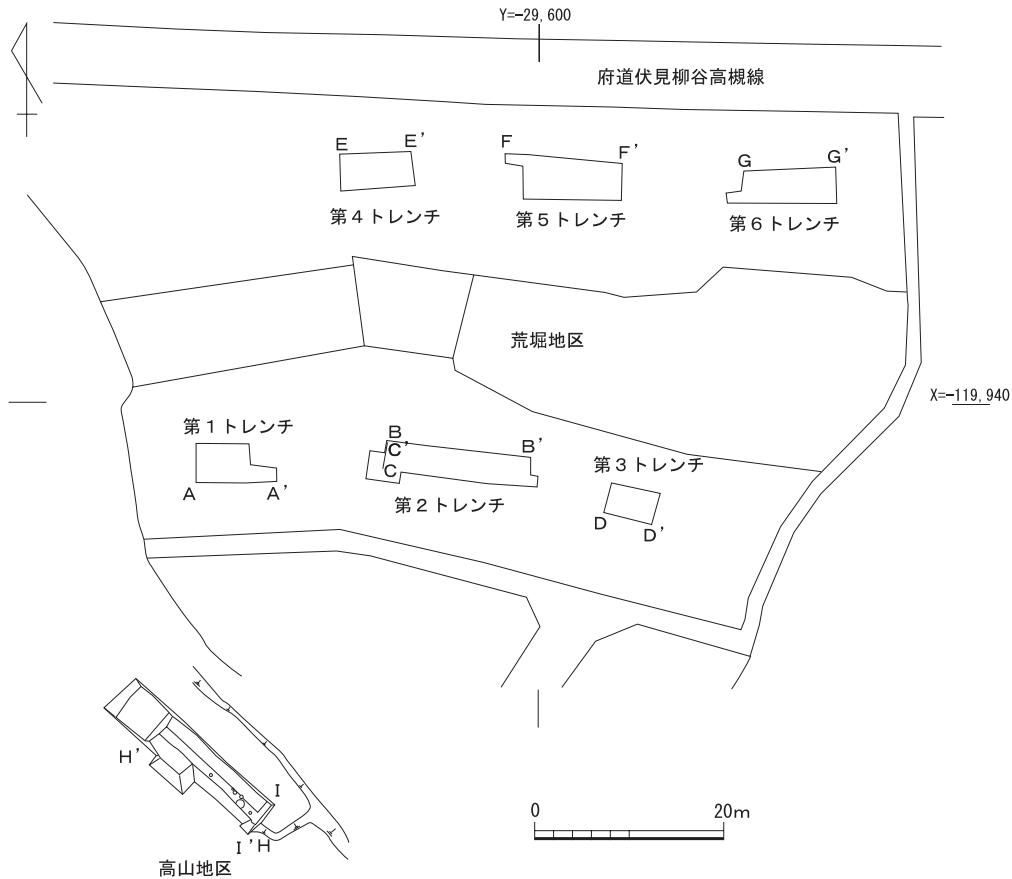
## (9)長岡京跡右京第956次調査(7ANPAR-3・荒堀地区、 7ANPTY-1・PSH-1・高山地区)・奥海印寺遺跡

### 1. はじめに

荒堀および高山地区は、主に縄文時代から江戸時代の複合遺跡である奥海印寺遺跡の南西端にあたっている。あたり一帯は起伏に富み、河川により形成された開析谷や段丘が卓越している。

周辺遺跡については奥海印寺遺跡のほか、奥海印城(推定)や海印寺跡(平安時代前期)、走田古墳群(古墳時代後期)などが知られている。さらに、この西山丘陵上の楊谷寺に至る旧参道脇で須





第43図 荒堀・高山地区トレンチ配置図

恵器が採集され、奈良・平安時代の窯跡(鈴谷窯)が所在しているとされる。こうした地勢にあることから、周辺に窯跡や古墳の存在が想定された。

荒堀地区は雛壇状の宅地跡地で、上下段に高低差のある調査地に6か所のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めた(第43図)。厚い盛土を除去したところで、上段の第2トレンチ、下段の第4・6トレンチの合計3か所から若干の遺構・遺物を確認することができた。その他のトレンチでは、厚い盛土の下は旧地形(丘陵)の粗礫層となり、遺構面も遺物もまったく認められなかった。

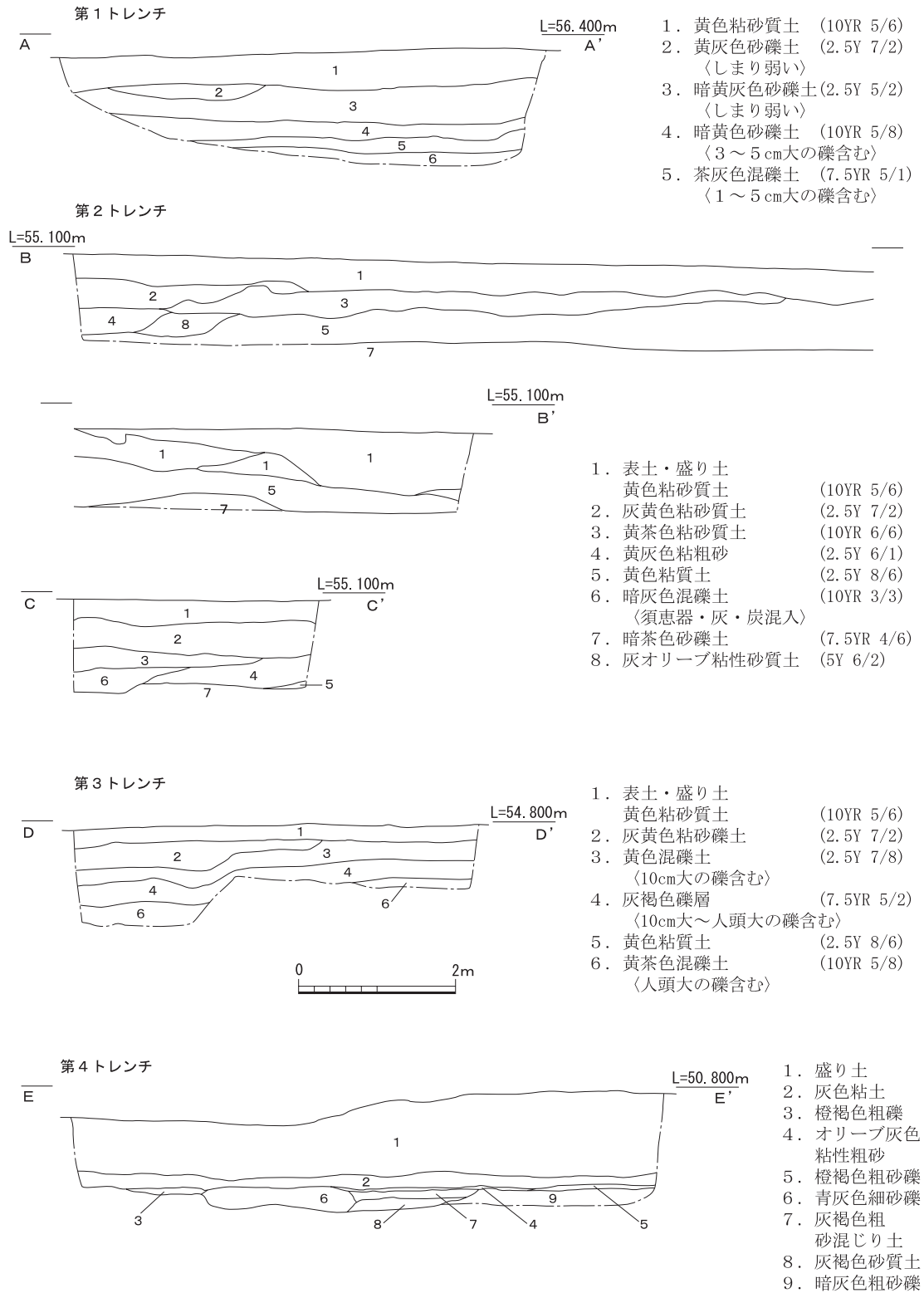
高山地区は、荒堀地区の北西部に近接し、宅地造成地の南側に隣接する丘陵斜面地に当たっている。現況は竹林であるため、調査範囲内の竹伐採作業から始めた。そして、窯跡の有無を確認するため、丘陵裾部に平行する細長いトレンチを設定した。竹林の厚い置き土を重機掘削で除去したのち、人力掘削にて遺構・遺物の確認に努めた。その結果、顕著な遺構は検出されなかったが、古墳時代後期の須恵器杯や土師器の破片を含む層を確認することができた。

## 2. 調査概要

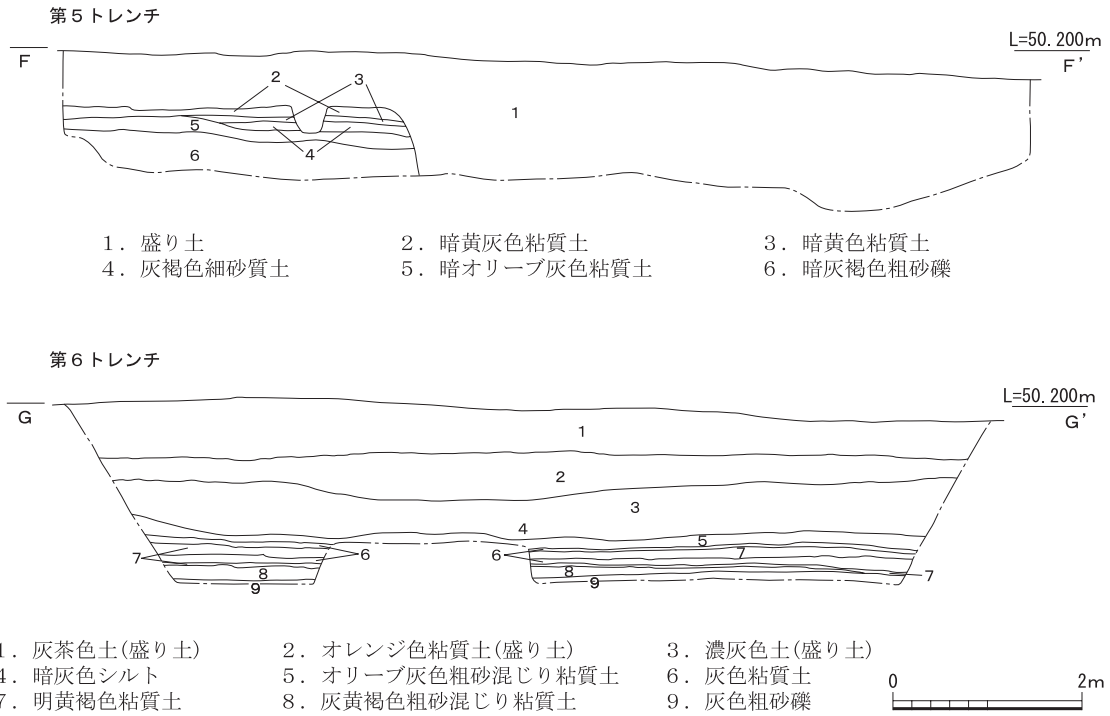
### 1) 荒堀地区(第43~46図)

#### (1) 調査の概要

集合団地や一戸建住宅の跡地で、調査地は上下段に大きく分かれる。およそ標高55m前後から



第44図 荒堀地区土層断面図(1)



第45図 荒堀地区土層断面図(2)

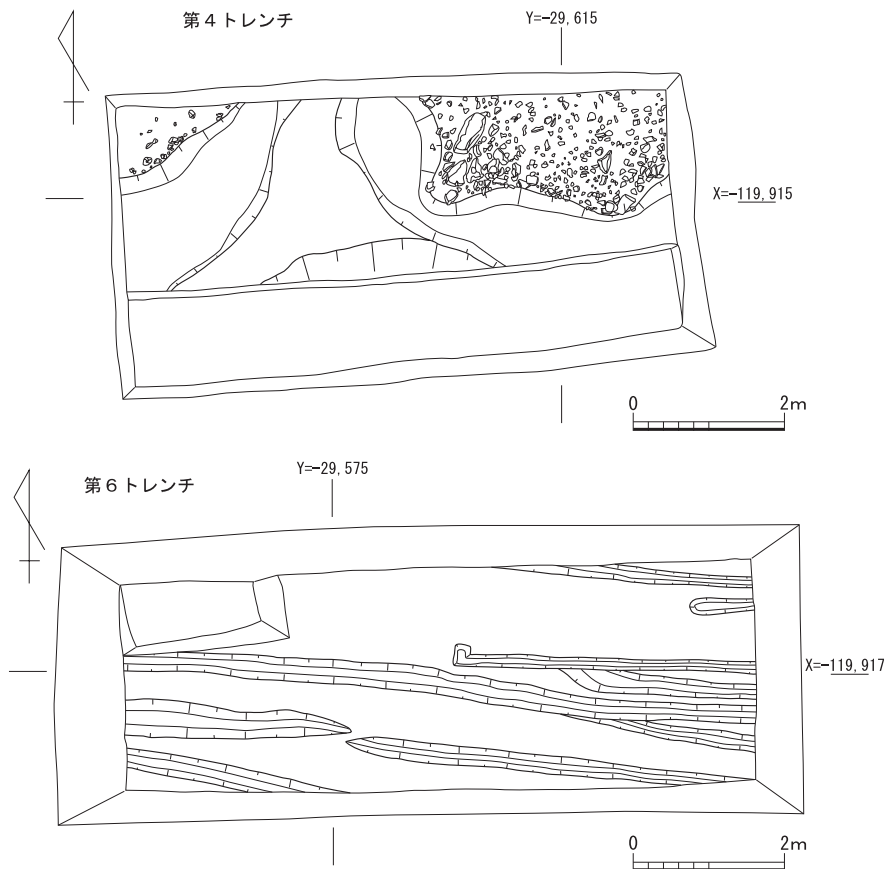
56mを測る上段部に第1～3トレンチを、標高約50mの下段部に第4～6トレンチを設定した。

第1トレンチ

5層の茶灰色混礫土で旧表土を確認したが、これより下層は丘陵を構成する地山の粗礫層となり、遺構・遺物とも確認できなかった。

第2トレンチ

7層の暗茶色砂礫土は旧表土面で、これより下層は第1トレンチと同様、粗礫層となり遺構・遺物



第46図 荒堀地区第4・6トレンチ平面図

は確認されなかった。また、南西隅部で、大きく掘削された掘り込みを確認した。3層および6層が埋め土で、ここより土師器または弥生土器の破片が出土したが、竹林の置き土に伴う掘り込みとみられ、古い包含層や遺構に伴うものではなかった。ただ、近隣に何らかの遺構の存在を考慮する必要はある。

第3トレンチ

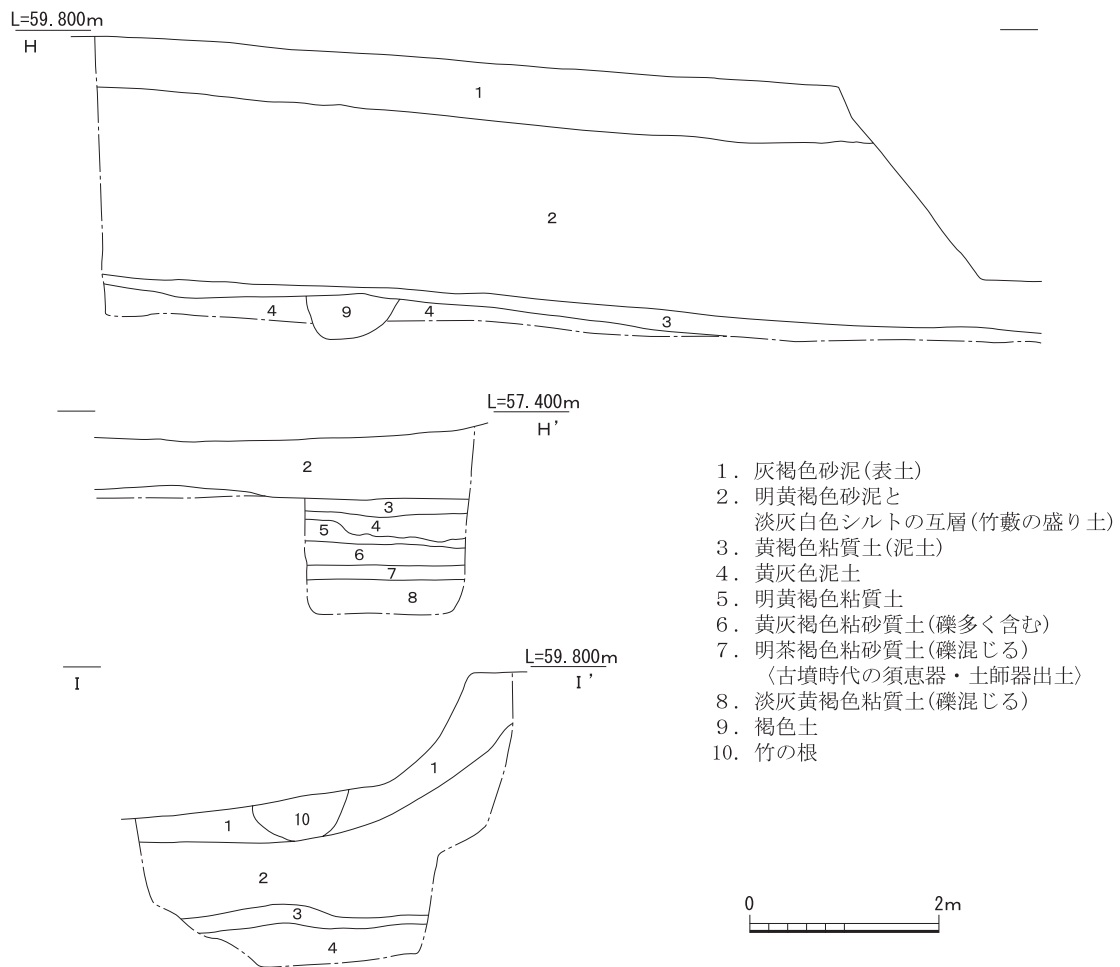
黄茶色混礫土の6層は地山で、それより上の堆積層は、置き土と判断される。遺構・遺物とも皆無であった。

第4トレンチ

長辺の北壁に沿って、礫面の広がりを検出した。礫面の分布は部分的で、礫面と礫面の間は2本の澱んだ溝(流路)になっていたとみられる。溝の肩部は不明瞭ながら微かな起伏として確認された。わずかに南に低くなっているが、流れはあまりなく澱んだ状況であったとみられる。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。

第5トレンチ

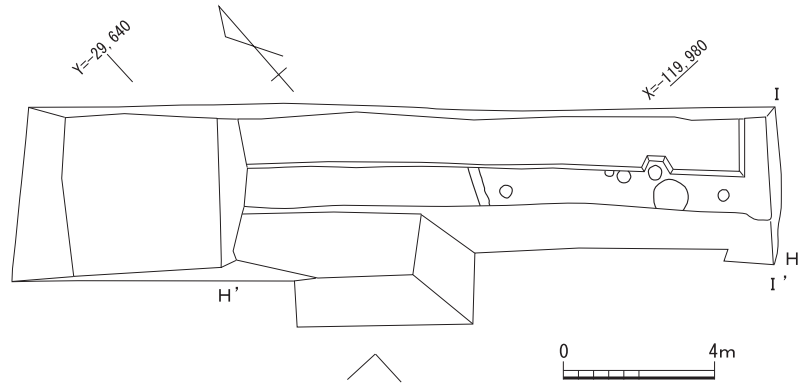
ほぼ全体に現代建物による深い攪乱で、地山面までの堆積層は西側の一部を除いてほとんどみられず、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。



第47図 高山地区土層断面図

## 第6トレンチ

第4層までは近・現代の盛土である。上位の7層上面で、9条の浅い溝を検出した。溝内より若干の須恵器小片が出土した。小片であるため時期不明である。耕作に伴う遺構とみられ、暗灰色粘質土を埋土とし、幅10～20cm、深さ数cmを測る。



第48図 高山地区トレンチ平面図

## 2) 高山地区(第47・48図)

(1) 調査の概要 調査はまず竹の伐採から始めた。伐採後、110㎡の細長い調査トレンチを設定した(第43・48図)。掘削は重機により表土および竹林栽培による客土を除去し、旧表土より下層を人力で掘削・精査した。厚い竹林客土(1.4～2.2m)を除去した面で、土坑および溝を検出したが、これらは竹林栽培にともなうもので、溝は排水用のものと考えられる。チャートなどの小礫を集めて組んで溝にしている。組まれた礫に混じって近世の土瓶の破片が出土した。

さらにトレンチ西端を深掘りしたところ、さらに80cmほど下層で、古墳時代後期の須恵器杯蓋および土師器の小片が出土した。出土した層位は第7層の明茶褐色粘砂質土である(第47図)。狭い範囲におけるトレンチの底面および土層断面の観察では、遺構の存在や広がりには捉えられないが、調査地より高所にあった古墳が壊され、それに関係する土器類が流れ込んだ可能性が高い。出土層位の観察・記録の後、埋め戻しを重機により行い、すべての作業を終了した。

## 3. 小結

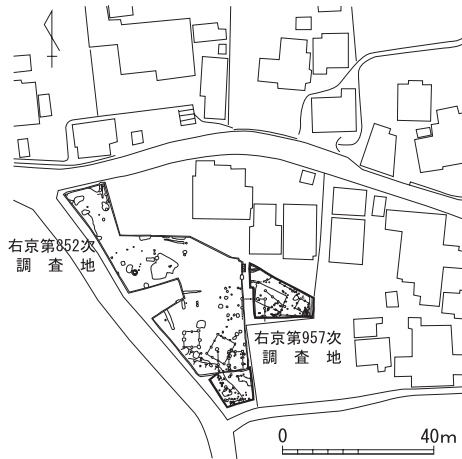
荒堀地区では、第2・4・5トレンチから若干の遺構・遺物を検出したが、周辺遺跡との関連が窺えるような顕著な成果は得られなかった。

高山地区は、厚い竹林客土の下層から古墳時代後期の須恵器の断片が出土し、当該期の遺物包含層を確認した。鈴谷窯のような奈良・平安時代の窯跡の痕跡はなかったが、古墳時代の須恵器が出土したことで、周辺丘陵部に古墳が存在している可能性が高まった。(黒坪一樹)

## (10) 長岡京跡右京第957次調査(7ANOSJ-4・西条地区)・下海印寺遺跡

### 1. はじめに





第49図 西条地区調査トレンチ配置図

調査対象地は、長岡京跡右京七条四坊十四町に相当し、京域西端にあたる所でもある。また、縄文時代から近世にかけての集落遺跡である下海印寺遺跡にかかる。

当該地は、右京第852次調査(西条地区)の東側と南側の隣接地で、微高地上にあたる。便宜上、東側を西条-1地区、南側を西条-2地区とした。検出した遺構名は、右京第852次調査にならい、次数を頭に付した。

右京第852次調査では、奈良から平安時代の掘立柱建物跡や柵列などを検出している。また、調査地南西隅からは西側に下がる自然地形(S X51)も確認しており、旧小泉川沿いの狭小な平地部(尾流地区)に続く。尾流地区では、右京第862・957次調査の2回の本調査が実施され、縄文時代後期と晩期の土坑をはじめ、弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴式住居跡や、古墳時代後期の竪穴式住居跡などが検出された。

## 2. 調査概要(第49図)

今回の調査地は、右京第852次調査地の隣接地であることから、この調査成果をもとに実施した。

### 1) 西条-1地区(第50~54図)

主に奈良から平安時代にかけての土器片を包含する黒褐色礫土下のにぶい黄褐色土(地山)を掘り込む形で、古墳時代から平安時代にかけての遺構を検出した。また調査地北西隅から、遺物包含層である黒褐色礫土を掘り込む形で東西方向の溝を検出した。トレンチ周囲の壁面を観察すると、同様の形で掘り込まれた柱穴も認められた。

**不明遺構 S X95702(第52図)** 調査地北西隅で検出した土坑である。埋土はにぶい黄橙色土である。掘削したところ、急に立ち上がる壁面と平坦な床面からなる。壁面外側の一部で赤色焼土を検出した。また壁面が直線的であることも考慮すると、竪穴式住居跡の可能性も考えられる。出土遺物はなかったが、古墳時代後期の溝(S D95703)が切り込む層位より下の層で検出したことから、古墳時代後期以前の遺構と考える。

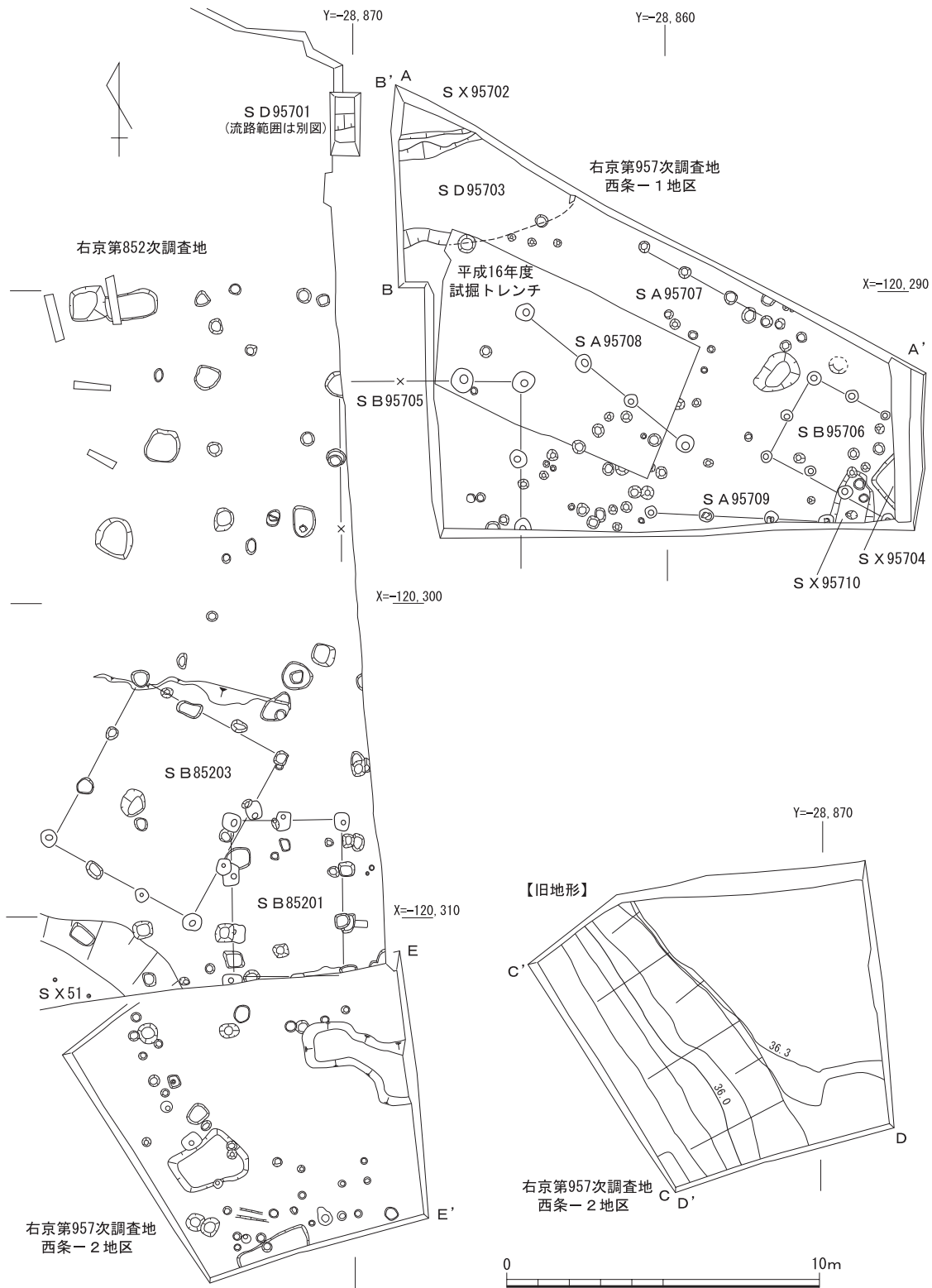
**不明遺構 S X95704(第52図)** 調査地東側で検出した土坑である。基礎に切られた形で検出した。急に立ち上がる壁面と平坦な床面からなる。埋土は、にぶい黄橙色土である。出土遺物はないが、不明遺構 S X95702と同様の竪穴式住居跡の可能性のあるものとする。

**不明遺構 S X95710(第52図)** 1.0×1.4mの範囲に黄褐色土を0.1mほど盛り、その一面に0.4×0.3mの落ち込み1か所と赤色焼土を検出した。赤色焼土は落ち込み斜面部にも認められたが、斜面部が固く焼けしまるというものではなかった。鍛冶関連遺物も認められず、その性格については不明である。

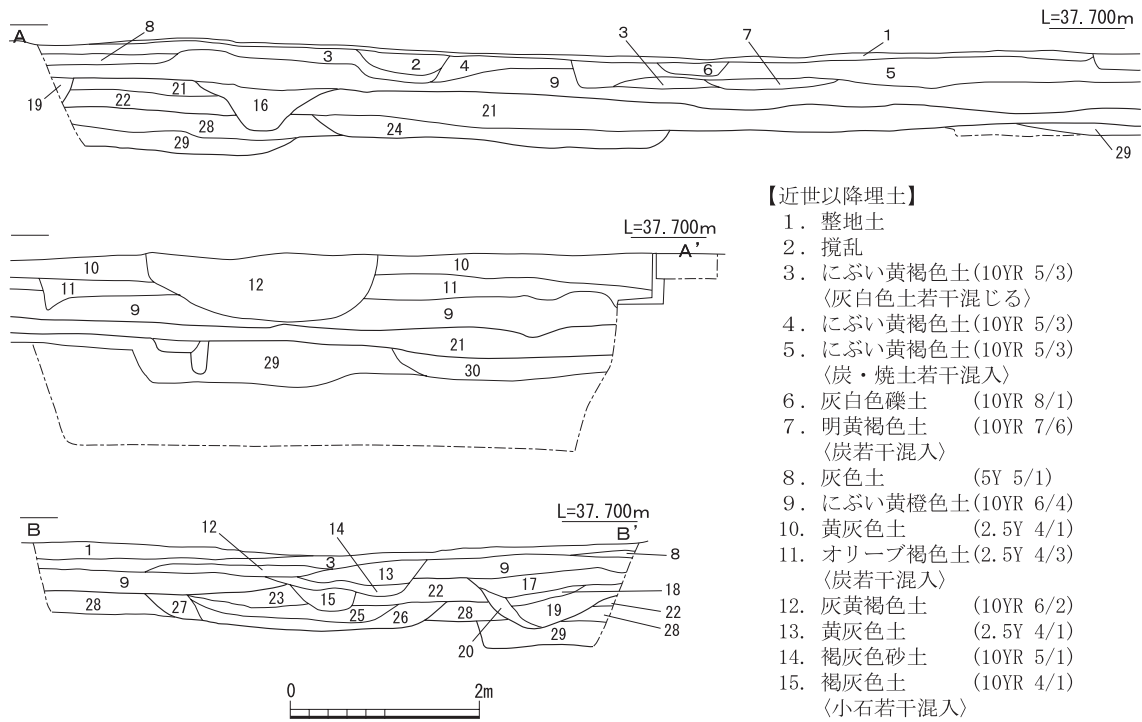
**溝 S D95703(第50図)** 調査地北西部で検出した溝である。幅約3.6m、深さ約0.3mを測り、弧状に巡る。わずかな出土遺物から、古墳時代後期の遺構と思われた。溝の性格については不明

である。西隣の右京第852次調査地では検出されていないので、急激に立ち上がり、土坑状を呈する可能性がある。

掘立柱建物跡 S B 95705 (第53図) 調査地南西部で検出した掘立柱建物跡で、右京第852次調査地に及ぶ。東西3間(6.2m)×南北2間(4.5m)以上、主軸方向は真北を向く。同方向の建物と



第50図 西条地区遺構配置図

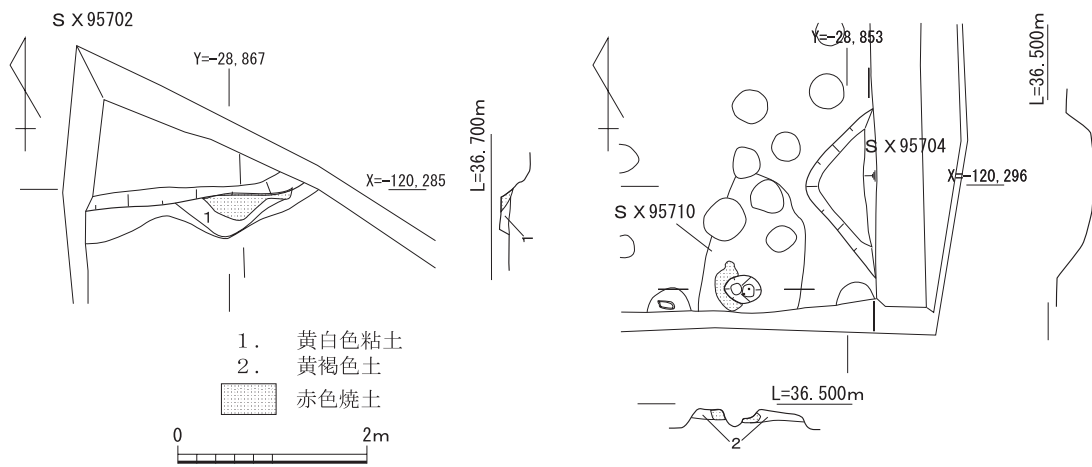


- 【近世以降埋土】
1. 整地土
  2. 攪乱
  3. にぶい黄褐色土(10YR 5/3)  
〈灰白色土若干混入〉
  4. にぶい黄褐色土(10YR 5/3)
  5. にぶい黄褐色土(10YR 5/3)  
〈炭・焼土若干混入〉
  6. 灰白色礫土 (10YR 8/1)
  7. 明黄褐色土 (10YR 7/6)  
〈炭若干混入〉
  8. 灰色土 (5Y 5/1)
  9. にぶい黄褐色土(10YR 6/4)
  10. 黄灰色土 (2.5Y 4/1)
  11. オリーブ褐色土(2.5Y 4/3)  
〈炭若干混入〉
  12. 灰黄褐色土 (10YR 6/2)
  13. 黄灰色土 (2.5Y 4/1)
  14. 褐灰色砂土 (10YR 5/1)
  15. 褐灰色土 (10YR 4/1)  
〈小石若干混入〉

- 【中世埋土】
16. 灰黄褐色土 (10YR 4/2)
  17. にぶい黄褐色土(10YR 4/3)  
〈小石多く含む〉
  18. にぶい黄褐色砂土(10YR 6/3)
  19. 灰黄褐色土 (10YR 5/2)
  20. 灰黄褐色砂質土 (10YR 5/2)  
〈瓦器椀・土師器皿出土〉
- 【奈良～平安時代埋土】
21. 黒褐色礫土 〈土器片混入〉 (10YR 3/2)
  22. にぶい黄褐色土 (10YR 6/3)
  23. にぶい黄褐色土 〈小石含む〉 (10YR 6/4)

- 【古墳時代埋土】
24. 黒褐色土 〈小石多く含む〉 (10YR 3/2)
  25. 暗褐色土 (10YR 3/4)
  26. 暗褐色砂質土 (10YR 3/4)
  27. 黒褐色土 (10YR 3/1)
  28. にぶい黄褐色土 (10YR 5/4)
  29. にぶい黄褐色土 (10YR 6/4)
  30. 黒褐色砂質土 (10YR 3/2)

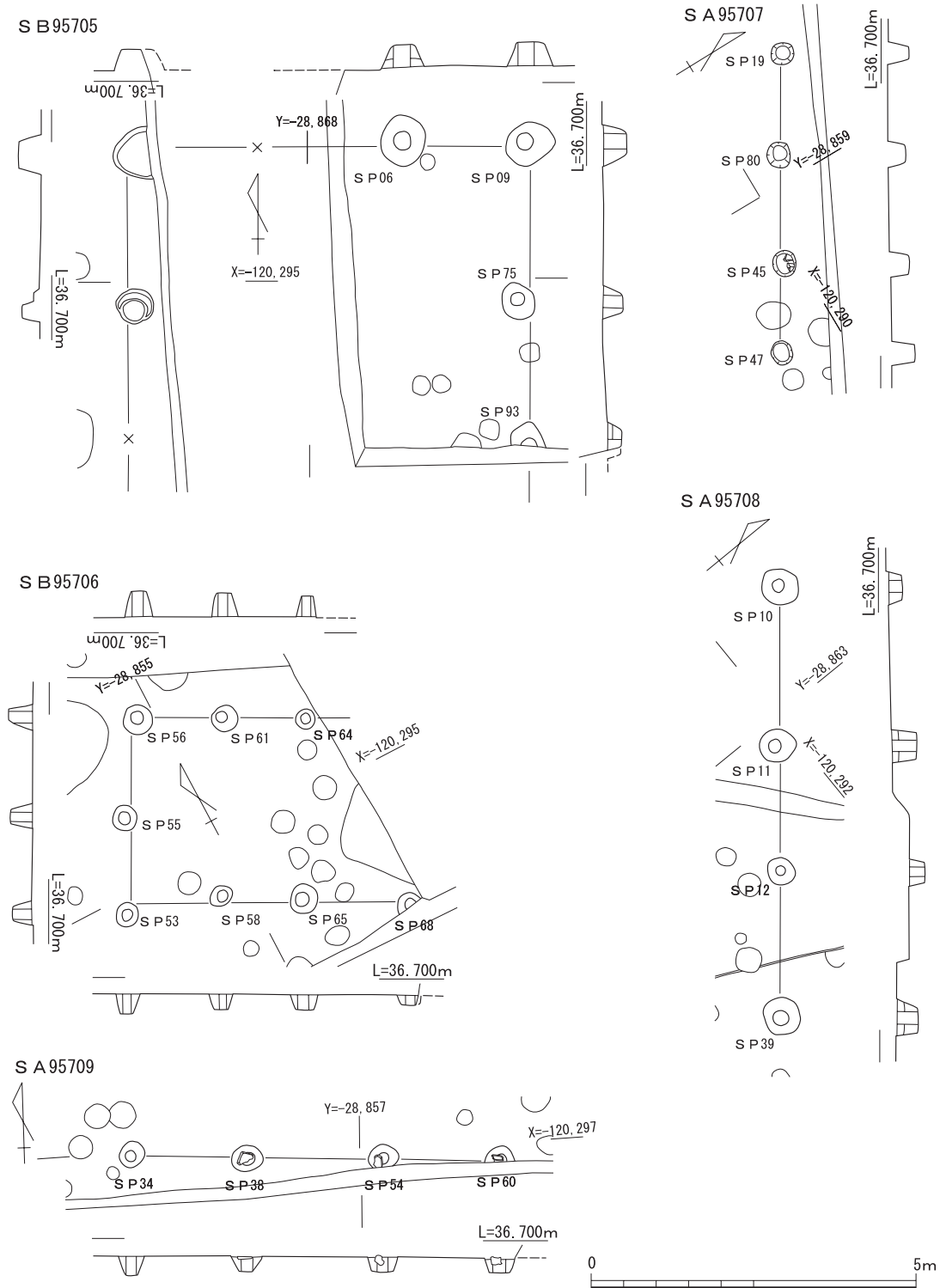
第51図 西条-1地区土層断面図



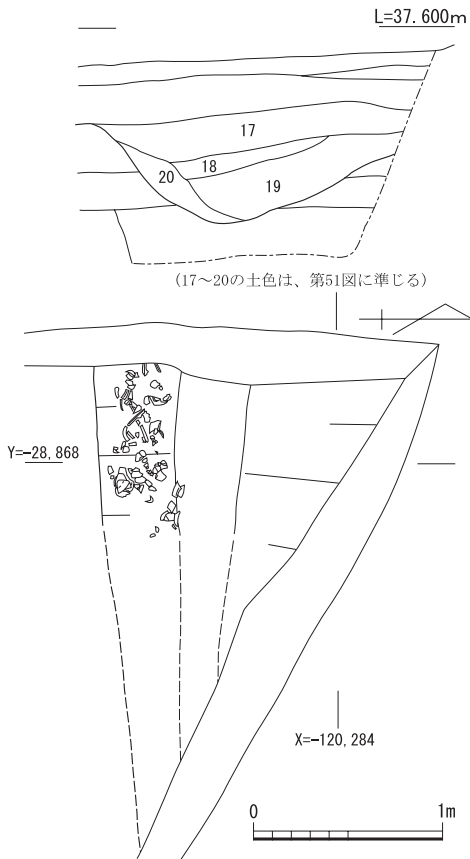
第52図 西条-1地区不明遺構 S X 95702・95704・95710実測図

としては、右京第852次調査地で検出した掘立柱建物跡 S B 85201がある。柱穴は、径0.5~0.7mを測り、深さは0.3~0.5mである。時期のわかる遺物が出土しなかったため、時期不明である。

掘立柱建物跡 S B 95706 (第53図) 調査地東側で検出した掘立柱建物跡である。東西3間(4.3m)×南北2間(2.8m)、N62°Wと大きく西側に傾く。柱穴 S P 64から須恵器杯蓋(第56図6)が出土しており、古墳時代後期の建物跡と思われる。柱穴は、径0.3~0.5mを測り、深さは約0.4m



第53図 西条-1地区掘立柱建物跡・柵列実測図



第54図 西条-1地区溝SD95701実測図

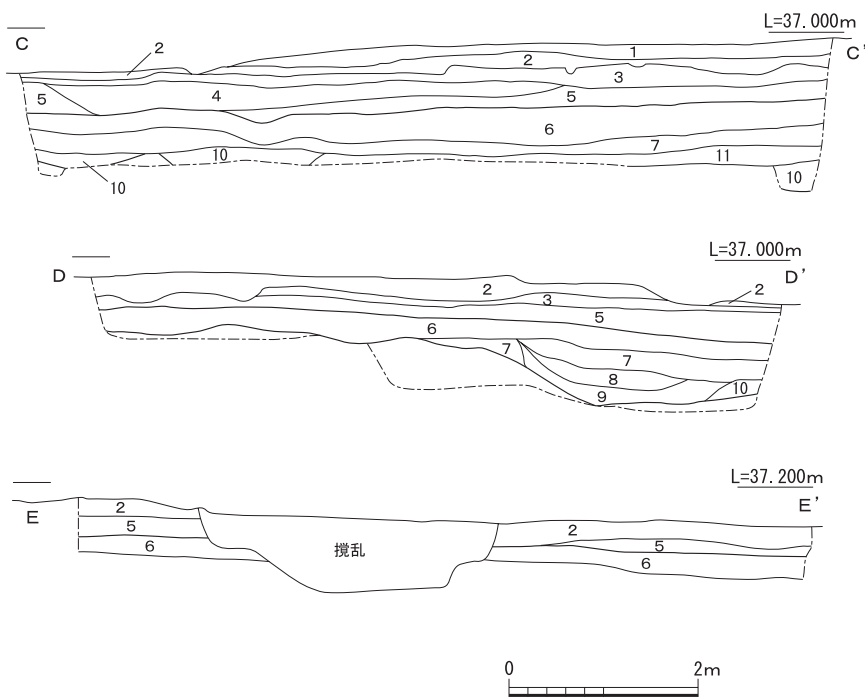
である。

柵列 S A 95707 (第53図) 調査地中央北側で検出した。N57°Wと大きく西側に傾き、掘立柱建物跡 S B 95706とほぼ同方向を向く。柱穴は、径0.3~0.4mを測り、深さは約0.3mである。確認長約4.5mを測る。出土遺物がなく、時期不明である。

柵列 S A 95708 (第53図) 調査地中央で検出した。N50°Wと大きく西側に傾く。柱穴は、径0.4~0.6mを測り、深さは0.2~0.4mである。確認長約6.5mを測る。出土遺物がなく、時期不明である。

柵列 S A 95709 (第53図) 調査地中央南側で検出した柵列である。柱穴は、径0.3~0.5mを測り、深さは0.2~0.3mである。確認長約5.7m、N87°Wを向く。調査地南側に展開する可能性もあることから、掘立柱建物跡の一面を確認した可能性もある。

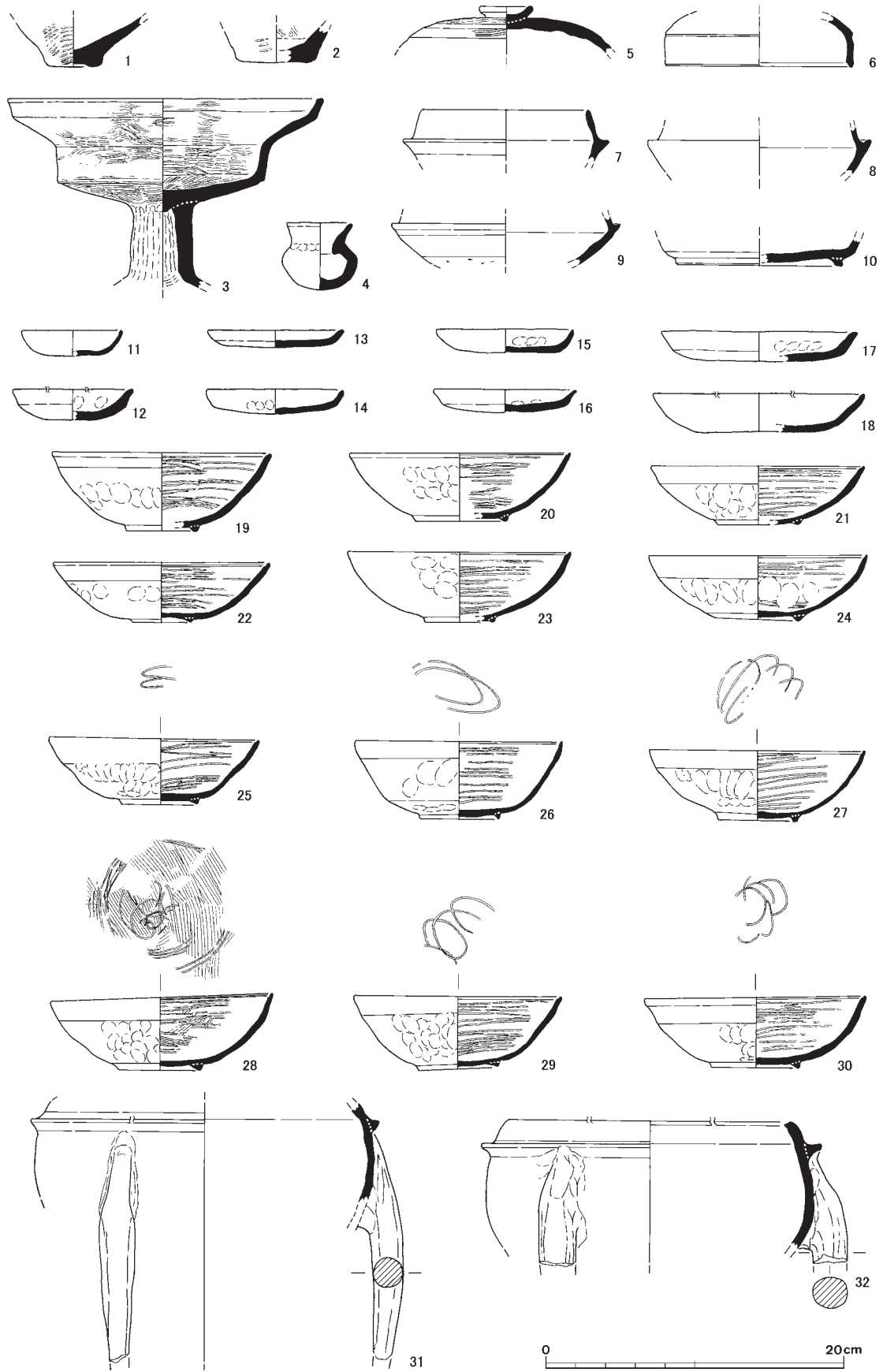
溝 S D 95701 (第54図) 推定幅1.7m、深さ約0.5m、断面「U」字形の溝である。N88°Wとほぼ真東西方向の溝である。南側斜面にそって堆積した灰黄褐色砂質



1. 灰オリーブ色土 (5Y 4/2)
2. 灰色土 (5Y 5/1) (西条-1地区の8と同層)
3. 灰色砂質土 (5Y 5/1) (炭混入)
4. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) (拳大の礫多量に含む)
5. にぶい黄褐色土 (10YR 5/6) (炭・焼土若干混入) (西条-1地区の9と同層)
6. 黒褐色土 (10YR 3/2) (土器片が混入) (西条-1地区の21と同層)
7. にぶい褐色砂礫土 (7.5YR 6/3)
8. 褐色砂質土 (7.5YR 4/3)
9. 褐色灰色土 (10YR 4/1)
10. 褐色灰色土 (7.5YR 4/1) (若干礫混入) (風倒木痕か)
11. にぶい黄橙色土 (10YR 6/4)

第55図 西条-2地区土層断面図





第56図 西条地区出土遺物実測図

土に混入した状況で、瓦器・土師器などが多量に出土した。右京第852次調査地の北東隅に延びる位置にあるが、同調査報告では、この遺構についての記載はない。

## 2) 西条-2地区(第55図)

西条-1地区での遺物包含層である黒褐色礫土が、西条-2地区では礫の混入が見られなくなり、黒褐色土となる。この層の上面に中世以降の遺構が存在するものと想定して精査した。その下の層であるにぶい褐色砂礫土を掘り込む形で古墳時代から平安時代の遺構が存在すると考え、精査した。その結果、柱穴や土坑などを検出したが、遺構の性格を明らかにすることはできなかった。右京第852次調査で検出した掘立柱建物跡 S B85201は今回の調査地内に延びないことがわかった。また、右京第852次調査で検出した旧小泉川へと下る旧地形の傾斜面(S X51)の続きが認められた。にぶい褐色砂礫土の中から、弥生時代末の高杯が1点(第56図3)出土したことから、旧小泉川への旧地形は弥生時代末以前の地形であると考えられる。

## 3. 出土遺物(第56図)

西条-1地区の出土遺物は1・2・4～32で、西条-2地区出土遺物は3である。1・2は、遺物包含層(黒褐色礫土)出土遺物で、4・5・7・9は溝 S D95703出土、6は柱穴 S P64出土、8・10は土坑出土、11～32は溝 S D95701出土である。

1・2は、弥生土器壺か甕の底部である。外面タタキを施し、1の内面はナデ仕上げ、2はハケ調整する。3は、庄内併行期の高杯である。杯部は横方向のミガキを内外面に密に施す。脚部は、縦方向のミガキを施す。4は、ミニチュアの壺である。5は、須恵器有蓋高杯の蓋である。天井部外面にはヘラ削り後櫛描き沈線を施す。輪状のつまみを付す。6は須恵器杯蓋である。7～9は須恵器杯身である。5～9は、古墳時代中期後半～後期にかけてのものである。10は須恵器杯である。輪状高台を貼り付け、平安時代のものである。11～18は土師器皿である。口径13cm前後と7～10cmのものがある。19～30は瓦器椀である。内面は暗文が粗く施され、外面は指圧痕が残る。28は、内面に粗いハケ調整が施され、その後に暗文を施す。外面に暗文が残らず、逆三角形の低い高台が貼り付くことから、12世紀後半頃と考える。31・32は瓦質の三足羽釜である。

## 4. 小結

右京第852次調査の成果などから、今回の調査で確認した黒褐色礫土が遺物包含層であると考え、掘削を行ったが、包含層上面から掘り込む遺構(S D95701)の存在が認められ、右京第956次西条地区の調査成果を考え合わせると、今回の調査地付近から阿弥陀寺付近にかけての高台には遺構面が2面存在することがわかった。

中世の溝 S D95701は真東西方向を向いており、出土した遺物は南側からの流れ込みによるものであることから、区画溝的なものとする。下層遺構では掘立柱建物跡や柵列に伴って不明遺構 S X95702・95704を検出したが、検出状況から、これらは竪穴式住居跡の可能性が高く、西条

地区の高台には広範囲に集落が存在するものと思われる。

(岡崎研一)

(11)長岡京跡右京第957次調査(7AN00R-8・尾流地区)  
・下海印寺遺跡・西山田遺跡

1. はじめに

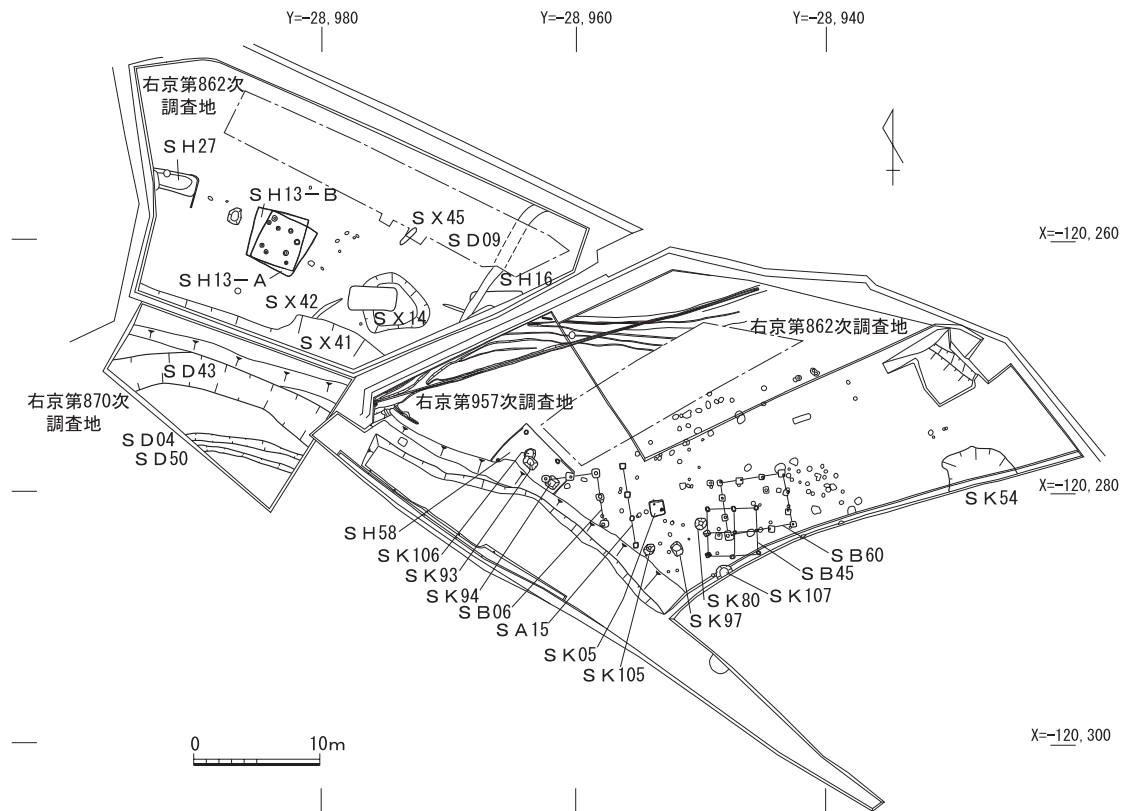
今回の調査地は、長岡京跡の条坊復原によると、右京七条四坊および西四坊大路に想定される位置にある。また、縄文時代から中世にいたる集落遺跡として知られている下海印寺遺跡の範囲にも含まれている。

調査は、小泉川に面する河岸段丘上及び一段低い水田部で実施し、縄文時代から近世に至る時期の遺構・遺物を検出した。

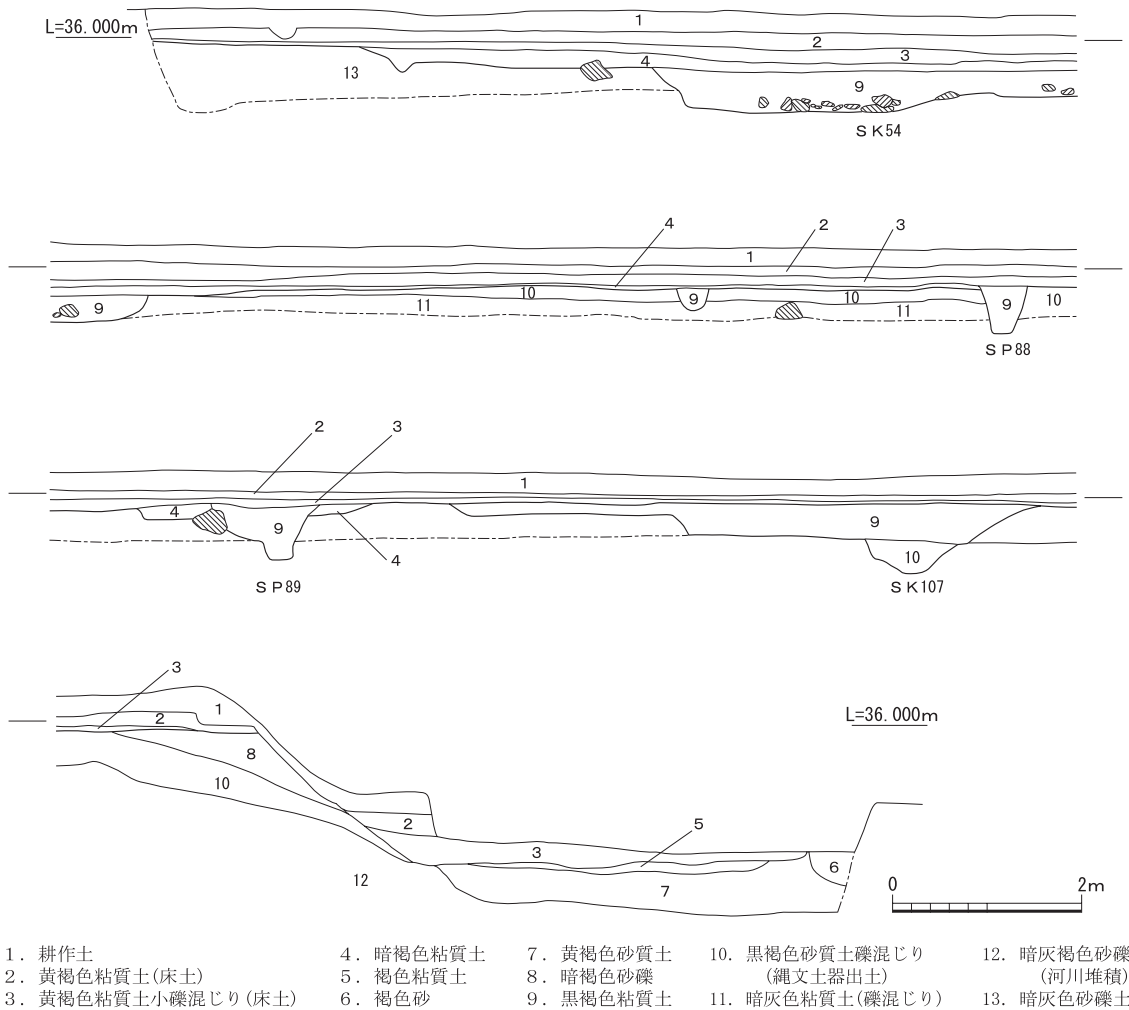


2. 調査概要(第57・58図)

第57図 尾流地区調査トレンチ配置図



第58図 尾流地区遺構配置図



第59図 尾流地区土層断面図

### 1) 縄文時代

調査地の中で、河岸段丘上の南端部付近では、縄文土器片を含む暗褐色の砂質土層が部分的に認められた。この範囲の中で後期の土坑4基と晩期の土坑1基を検出した。

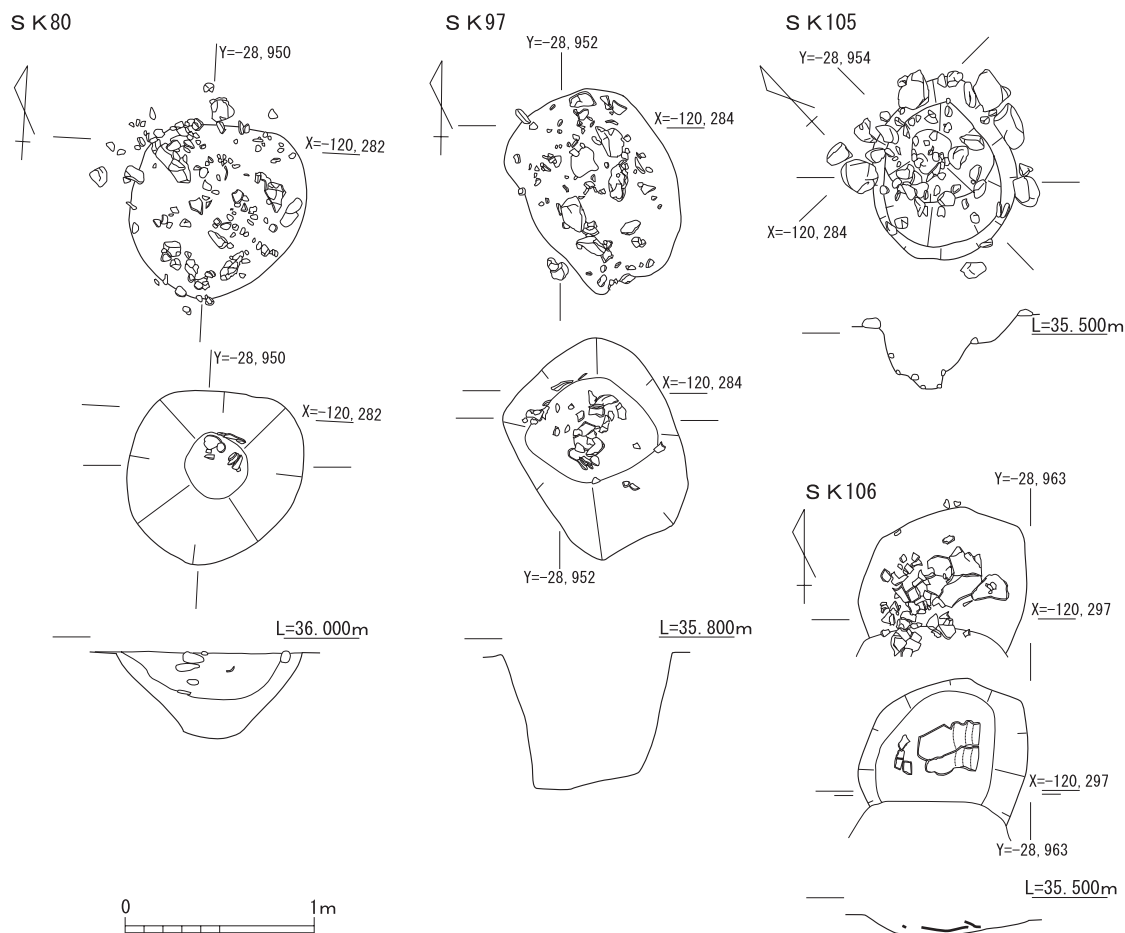
**土坑 S K 80 (第60図)** 調査地の中央で検出した。長軸0.92m、短軸0.91mの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.44mを測る。縄文時代後期と考えられる。

**土坑 S K 97 (第60図)** 土坑 S K 80の南西で検出した。長辺1.05m、短辺0.8mの平面規模で、検出面からの深さ0.7mを測る。土器を立てた状態で検出した。縄文時代後期と考えられる。

**土坑 S K 105 (第60図)** 土坑 S K 97の西で検出した。長辺0.52m、短辺0.43mの平面規模で、検出面からの深さ0.4mを測る。縄文時代後期と考えられる。

**土坑 S K 107** 土坑 S K 97の東で検出した。長辺1.9m、短辺0.67mの平面規模で調査地の南側に広がっている。縄文時代後期と考えられる。

**土坑 S K 106 (第60図)** 調査地西よりで検出した弥生時代の竪穴式住居跡 S H 58の床面下層から検出した。長軸1.32m、短軸0.85mの楕円形を呈し、検出面からの深さ0.1mを測る。深鉢を横位に埋めた状況で検出した。縄文時代晩期と考えられる。



第60図 尾流地区土坑S K 80・97・105・106実測図

## 2) 弥生末～古墳時代

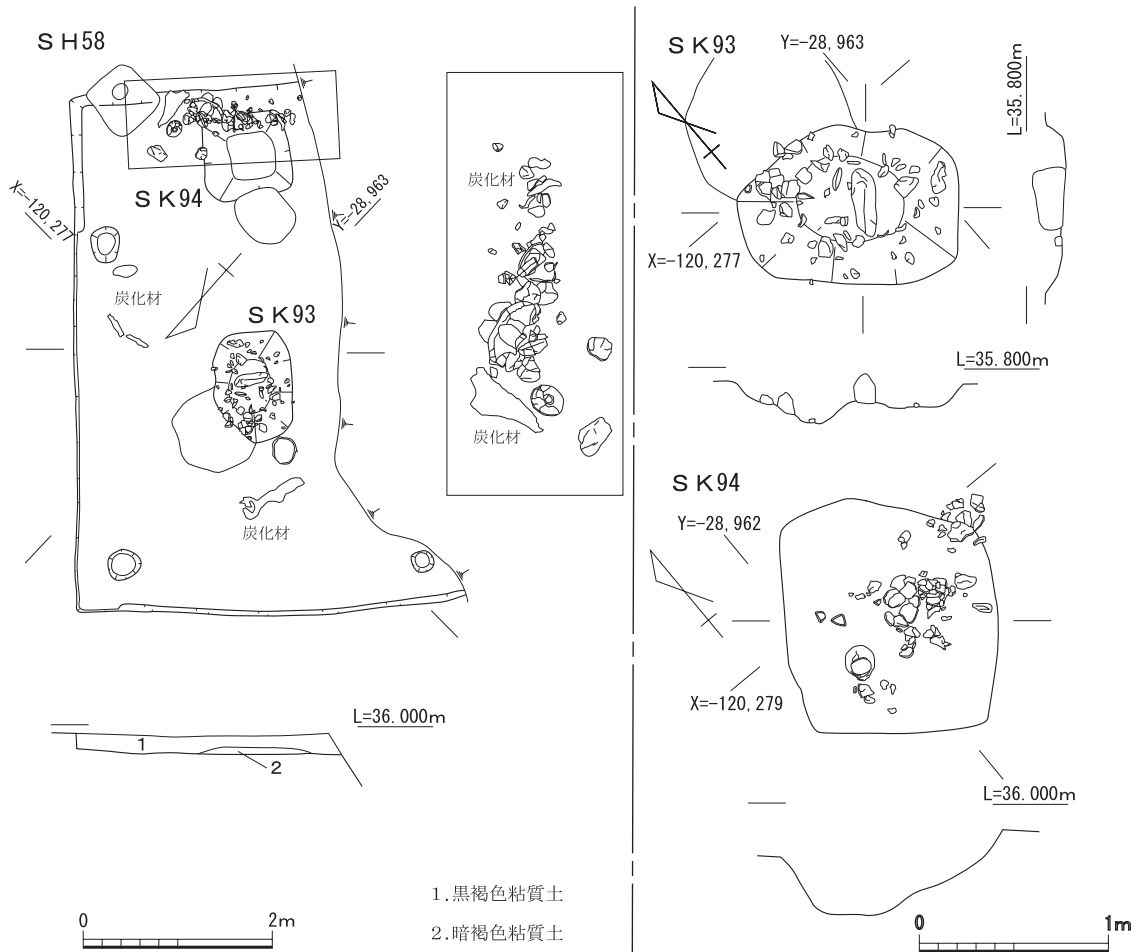
竪穴住居跡1基とその住居内の炉跡・貯蔵穴、周辺部で土坑1基、ピット群などを検出した。

**竪穴式住居跡S H 58** (第61図) 調査地の西よりで検出した。南半を小泉川の氾濫によって削られている。弥生時代終わり頃のもので、一辺の長さ約5mの方形の住居と考えられる。床面からは、炭化した木材片や赤く焼けた土器とともに、これらに覆いかぶさるような状態で土の塊が出土した。炉跡S K 93の南では崖面の上で砥石が出土している。これらの検出状況から、屋根構造の上には土が載っていたと考えられ、火災にあった段階で火を受けて倒壊したと考えられる。住居内からは中央に平面方形の炉跡S K 93と、南東よりで平面方形の貯蔵穴S K 94を検出した。また、住居跡東半部の埋土中から、幅4mm、長さ11.5mmの水晶原石1点が出土した。

**炉跡S K 93** (第61図) 平面1.15×0.8m、深さ20cmを測る。炉の中央部に長軸37cm、幅12cm、高さ17cmの石を仕切りのように立てている。炉内の石は焼けており、底には炭が残っていた。

**貯蔵穴S K 94** (第61図) 平面0.95×0.85m、深さ35cmを測る。貯蔵穴の南東辺の上、壁溝との間に20cm幅の床面があり、複数の壺が置かれた状態から倒れて割れた状況で出土した。貯蔵穴の中からは、甕が立位で置かれた状態で出土し、その上に前述の壺の破片が流れ込んでいた。

また、北西辺に2基と北東辺で1基の柱穴、周壁溝の一部を検出した。柱穴の直径は25～30cm、深さ10cmを測り、周壁溝の幅は4～8cm、深さ3～5cmを測る。



第61図 尾流地区竪穴式住居跡 S H58・土坑 S K93・94実測図

土坑 S K54 調査地の東南よりで検出した。東西 5 m、南北 3 m の平面規模で、調査地の南側に広がっている。土坑内からは弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器等が出土した。このほかに滑石製の白玉 1 点が出土した。表面淡緑灰色を呈す。直径 3.5mm、長さ 3.2mm を測り、1 mm の穿孔を施す。

### 3) 奈良時代

掘立柱建物跡 3 棟、土坑 1 基を検出した。これらの遺構はそれぞれの辺が平行していることから、同じ時期のものと考えられる。その方位は真北から約 10 度西に傾いている。

掘立柱建物跡 S B06 (第62図上) 南半を小泉川の氾濫によって削られているため、全体の規模は不明であるが、東西 4 m の 2 間、南北 4.07 m の 2 間を検出した。柱の掘形は平面方形を呈し、柱穴 S P07 が東西 65 cm、南北 55 cm で、深さ 20 cm を測り、柱の直径 18 cm を測る。柱穴 S P08 は東西 65 cm、南北 64 cm で、深さ 20 cm を測り、柱の直径 17 cm を測る。柱穴 S P08 は東西 65 cm、南北 64 cm で、深さ 20 cm を測り、柱の直径 17 cm を測る。柱穴 S P09 は東西 62 cm、南北 72 cm で、深さ 20 cm を測り、柱の直径 25 cm を測る。柱穴 S P10 は東西 58 cm、南北 52 cm で、深さ 20 cm を測り、柱の直径 27 cm を測る。柱穴 S P11 は東西 70 cm、南北 56 cm で、深さ 20 cm を測り、柱の直径 24 cm を測る。柱間の寸法は東西の柱穴 S P07・08・09 がそれぞれ 2.0 m、南北の柱穴 S P09・10 が 1.87 m、

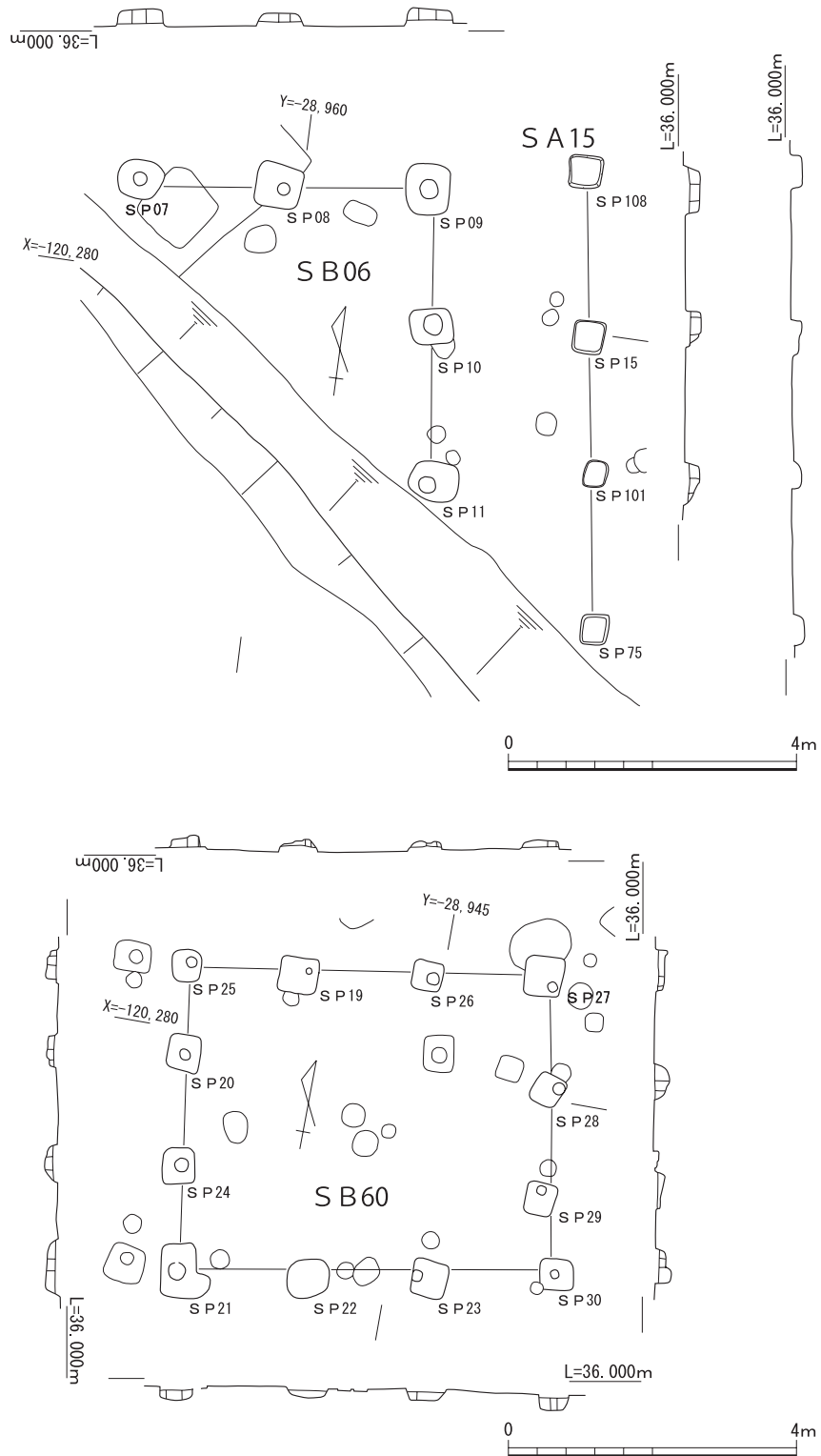


柱穴 S P 10・11が2.2mを測る。

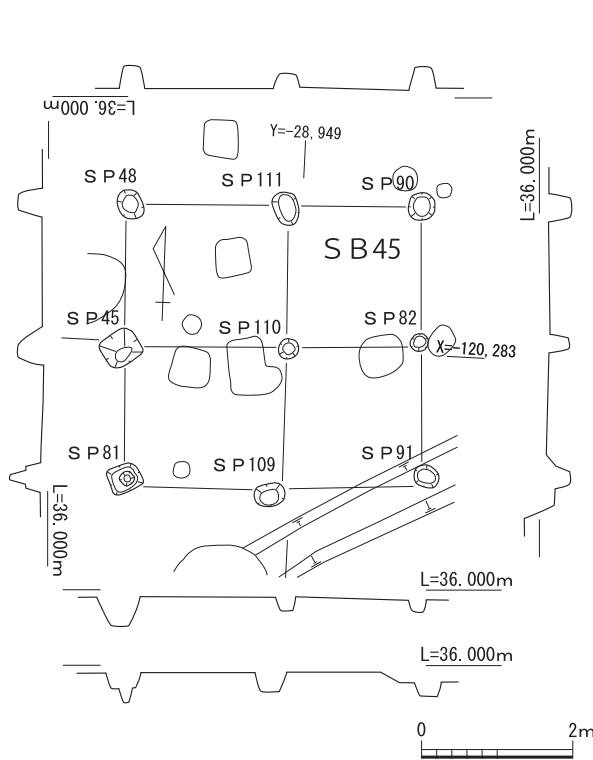
柵列 S A 15 (第62図上) 掘立柱建物跡 S B 06の東で南北に4基、3間分の柱穴を検出した。柱の掘形は、柱穴 S P 108が東西・南北ともに47cmで深さ15cmを測る。柱穴 S P 15は東西22cm、南北23cmで、検出した深さは20cmを測る。柱穴 S P 101は東西33cm、南北40cm深さ15cmを測る。柱穴 S P 75は、東西38cm、南北42cmで深さ15cmを測る。柱間の寸法は掘形の中心で測ると、柱穴 S P 108・15が2.25m、柱穴 S P 15・101が1.9m、柱穴 S P 101・75が2.15mと不揃いである。

掘立柱建物跡 S B 60 (第62図下) 掘立柱建物跡 S B 06の東で検出した東西5.2mの3間、南北4.3mの3間で東西に長い建物である。柱の掘形は掘立柱建物跡 S B 06より小さい規模で平面方形を呈している。一辺が40~75cm、深さ20~30cmを測り、柱の直径は15~20cmを測る。柱間の寸法は不揃いで、東西が平均1.73m、南北で平均1.43mとなる。

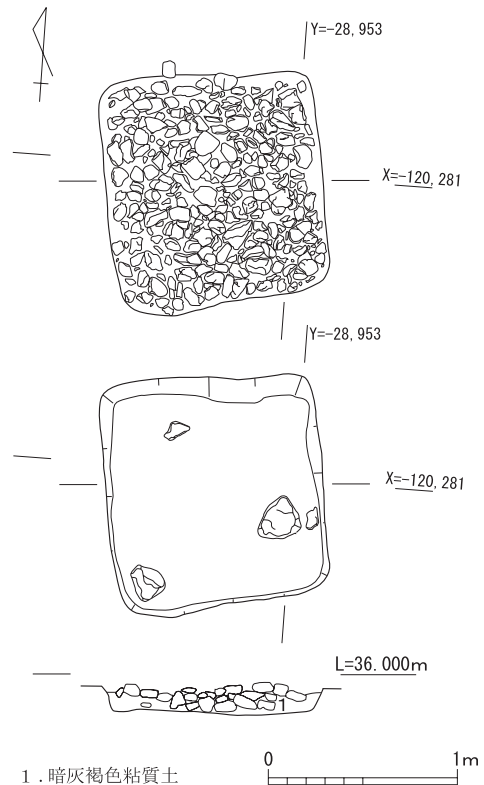
掘立柱建物跡 S B 45 (第63図) 掘立柱建物跡 S B 60と重複して検出した東西4.0mの3間、南北3.63mの2間で東西に長い総柱建物で



第62図 尾流地区掘立柱建物跡 S B 06・60、柵列 S A 15実測図



第63図 尾流地区掘立柱建物跡 S B 45実測図



第64図 尾流地区土坑 S K 05実測図

ある。柱の掘形は S P 45・81を除き平面円形で、直径が20～40cmを測り、深さ30～50cmを測る。方位は、他の建物が約10度西に傾いているに比して真北から約1.5度西とほぼ真北に近い。柱間の

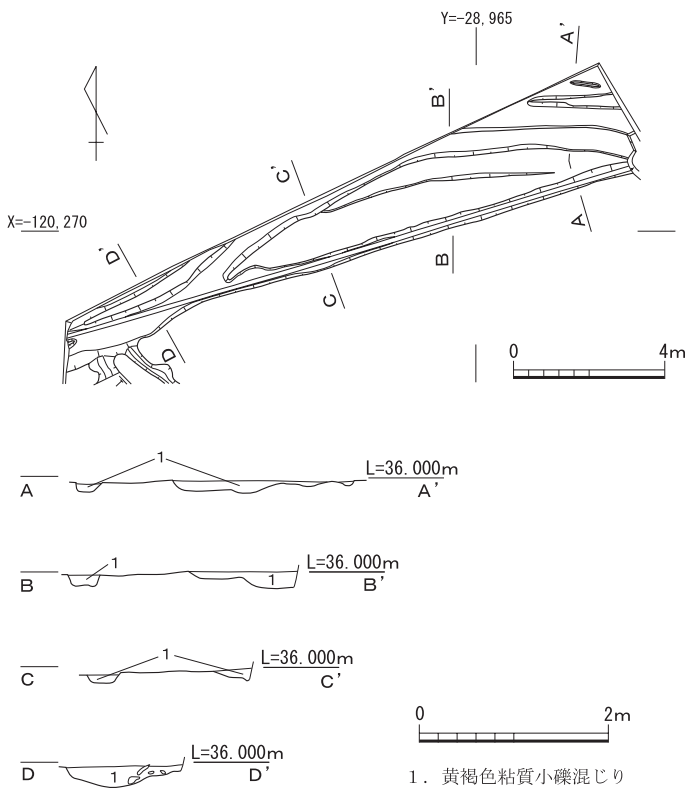
の寸法は不揃いで、東西が平均2.0m、南北で平均1.8mとなる。

土坑 S K 05 (第64図) 調査地の中央部で検出した東西約1.15m、南北約1.2m、深さ0.15mを測る方形の土坑である。中には直径3cmから10cmの円礫が全面に敷き詰められていた。遺物は出土しなかった。

#### 4) 近世 (第65図)

耕作に伴う溝・暗渠を検出した。調査地の北よりで検出した溝群は、北側の道路に平行しており、現在の水田地割りが出来る前の用排水路と考えられる。

(戸原和人)



第65図 尾流地区中・近世溝群実測図



第66図 尾流地区出土遺物実測図(1)



第67図 尾流地区出土遺物実測図(2)

3. 出土遺物(第66～70図)

今回の調査では、縄文時代の土坑、弥生時代の住居跡、古墳時代の土坑、奈良時代の掘立柱建物跡など各時代の遺構から遺物が出土した。以下、時代ごとに主な遺物について記述する。

1) 縄文時代(第66～68図)

本調査では土坑および包含層より縄文時代後期初頭を中心として比較的まとまって縄文土器が出土した。しかし、表面が磨滅しているものも少なくない。このため、縄文原体が判別可能なものを中心に記述した。

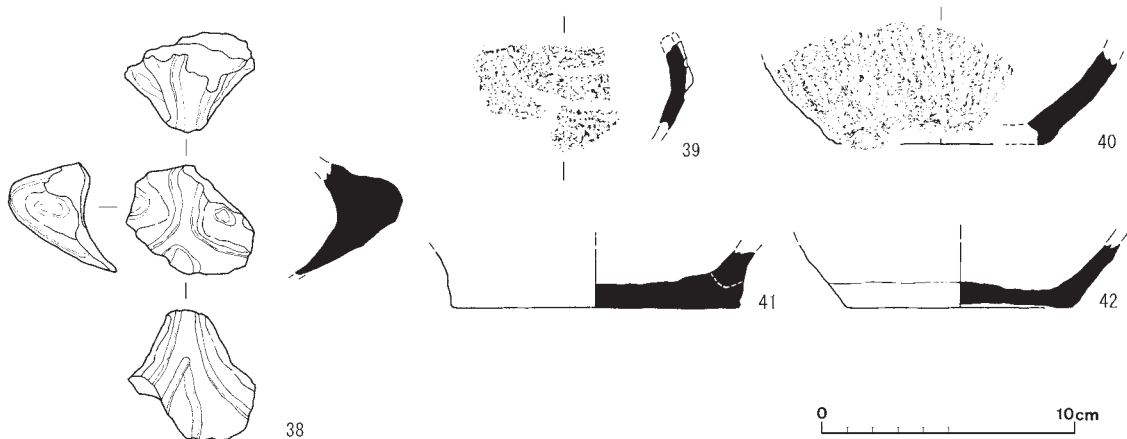
土坑S K 80出土土器(1～15) 大部分は小片であり、全体の文様意匠は復原しえないが、総じて後期初頭の所産であると考えられる。1～3・7は口縁部である。1はRLの磨消縄文意匠を施す平口縁土器である。4・8～13は有文胴部である。11のみ磨消縄文意匠を施す。14は無文の胴部である。15は底径11.0cmを測る平底土器である。

土坑S K 97出土土器(16～28) 16は平縁の無文土器で後期初頭に属するものと思われる。17は平口縁のRLの磨消縄文土器である。中津式と考えられる。後期初頭の所産であると思われる。18は平縁の沈線文土器である。19は磨消縄文を施す深鉢の胴部である。20・22は同一個体と思われる。北白川C式の大波状口縁深鉢の系譜を引く富士山型の波状口縁土器で、退化した口縁部文様帯を有する。中津式通有の磨消縄文意匠とはやや異なり、未完成といってもよいもので、型式学的に古い要素を備えている。21はRLの「J」字の磨消縄文を有する平口縁土器である。23は粗いナデ調整の平縁無文土器である。24～28は平底深鉢である。24は底径7.0cmを測る。25は底径11.4cmを測る。26は約10.0cm、27は約10.0cmを測る。28は底径11.0cmを測る、外底面には木葉圧痕が見られる。

土坑S K 105出土土器(30) 30は沈線区画内に刺突を施す胴部片で、中津式と考えられる。

土坑S K 106出土土器(29) 29はキャリパー状の器形を呈する無文土器で、口縁部は横位、胴部は縦位にRLの撚糸文を施す。また、一部条痕がみられ、里木Ⅱ式と考えられる。S K 106より単独で出土した。

柱穴出土遺物 掘立柱建物跡S B 60北東隅(S P 27)から2m東の柱穴から石鏃1点が出土し



第68図 尾流地区出土遺物実測図(3)

た。凹基式の二等辺三角形の形をした打製石鏃で、打撃痕が深く入り、縄文期の可能性がある。基部の幅1.1cm、長さ2.6cmを測る。

包含層出土土器(31~42) 31・32・35は沈線文を有する波状口縁土器である。35は口縁端部にも沈線文を有する。後期初頭に属し、中津式と考える。34・37は磨消縄文意匠を施す波状口縁土器である。36はRLの磨消縄文土器で穿孔を行う。37は波頂部にキザミを有し、LRの縄文を用いる。38は双耳壺の突起部分である。沈線文を施し、両側面は指頭による押圧がみられる。中津式か。39は粘土隆帯に沿って沈線が施される深鉢である。口縁付近で内湾する器形から中津式のものと考えられる。40は縦位のRL燃糸文が施されており、破断面は擬口縁状を呈する。里木Ⅱ式と考えられる。41・42は平底深鉢である。41は底径約9.0cm、42は底径約9.0cmを測る。(大本朋弥)

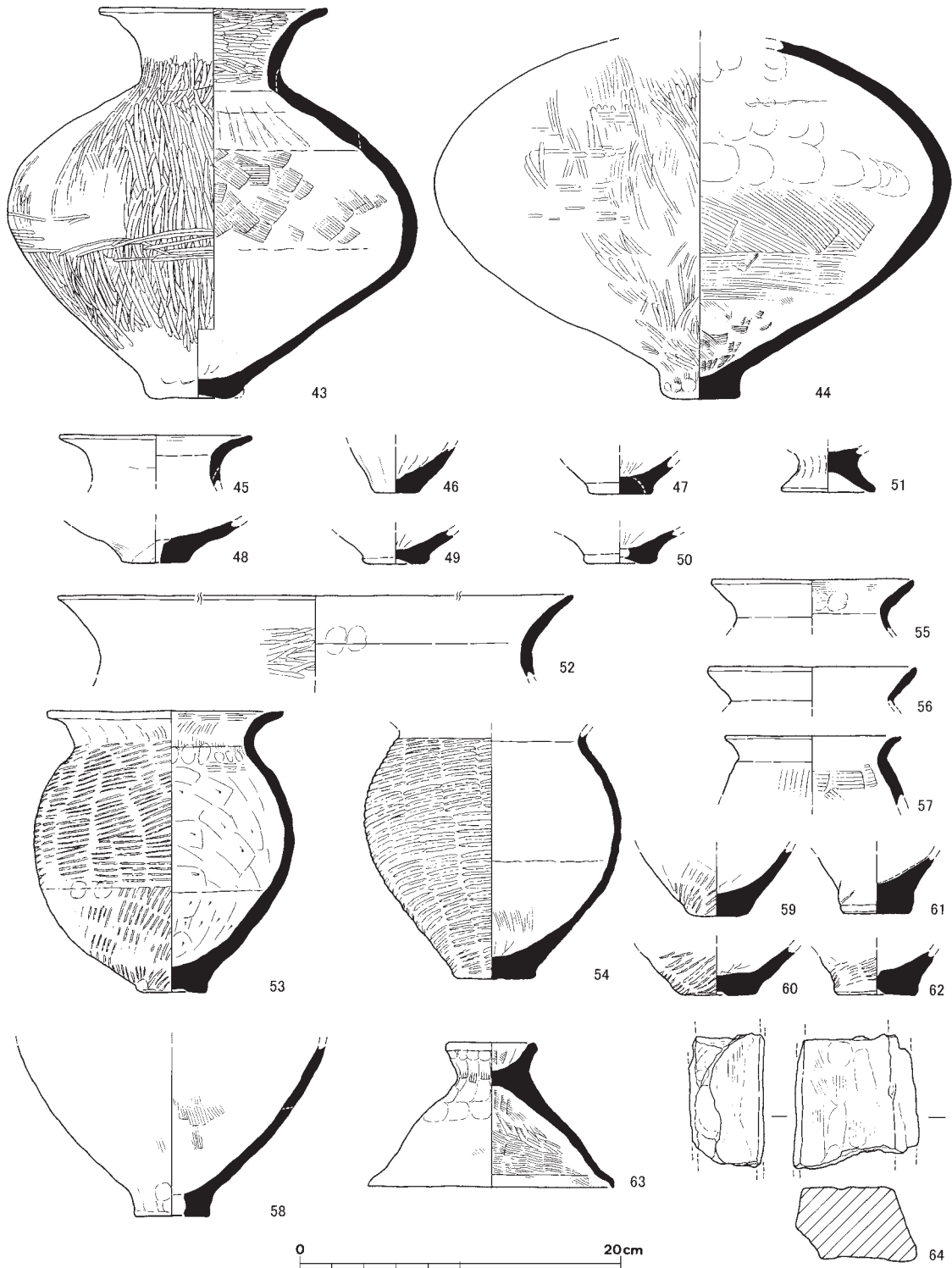
## 2) 弥生時代(第69図)

竪穴式住居跡 S H58出土土器(43~63) 43は広口壺でタマネギ形の体部にラッパ状に開く口縁部を有する。調整は、外面が縦方向のヘラミガキを、胴部で横方向のミガキを施す。体部内面はハケ状工具により斜め方向に搔き上げ、頸部に向かって絞り込みの跡をナデ調整している。器面に残るハケ原体の幅は2cmである。頸部から口縁にかけては丁寧な横方向のヘラミガキを施している。口径14cm、頸部径8.6cm、腹径25.5cm、底部径5.5cm、器高24.5cmを測る。44は頸部から上を欠損している。成形の技法、調整の手法ともに43同様である。腹径32.4cm、底部径3.7cm、残存高22.5cmを測る。45は口頸部のみである。口径12cm、頸部径7.9cm、残存高3.2cmを測る。底部には、大きく平ながら立ち上がるもの48~50と、細く開くもの46・47がある。また、ドーナツ状に中央部が凹むもの49・50がある。46は底部径2.6cm、残存高2.9cmを測る。47は底部径4.0cm、残存高2.3cmを測る。48は底部径4.0cm、残存高3.4cmを測る。49は底部径3.4cm、残存高2.0cmを測る。50は底部径3.9cm、残存高1.7cmを測る。51は脚台で底部径5.7cm、残存高2.7cmを測る。

甕には外面ヘラミガキを施す52と、外面ハケ調整する55~58と、タタキを施す53・54、59~62がある。52は甕口縁部で頸部外面に横方向のヘラミガキを施し、内面はナデ調整している。口径31.9cm、頸部径27.0cm、残存高4.9cmを測る。55は口径12.5cm、頸部径9.0cm、残存高3.1cmを測る。56は口径12.9cm、頸部径10.5cm、残存高2.4cmを測る。57は口径10.8cm、頸部径9.3cm、残存高4.3cmを測る。58は内外面にハケ調整を施す。底部径4.4cm、残存高10.6cmを測る。53は完形品で、体部外面の下半部は斜め方向のタタキを施し、上半部では横方向のタタキを施しており分割成形の可能性もある。内面は頸部下半までケズリを施している。口径14.5cm、頸部径11.2cm、腹径16.3cm、底部径4.3cm、器高17.5cmを測る。54は頸部から上を欠損している。体部外面は斜め方向のタタキを施し、内面はハケ調整の後ナデを施している。頸部径11.6cm、腹径16.0cm、底部径5.0cm、残存高15.3cmを測る。59は底部径3.0cm、残存高4.1cmを測る。60は底部径4.8cm、残存高3.0cmを測る。61は底部径3.5cm、残存高4.4cmを測る。62は底部径5.0cm、残存高2.5cmを測る。63は蓋で上縁径5.3cm、頸部径4.5cm、口径15.2cm、器高9.0cmを測る。

竪穴式住居跡 S H58出土石器 64は砂岩質の砥石である。残存長8.0cm、高さ4.6cmを測る。



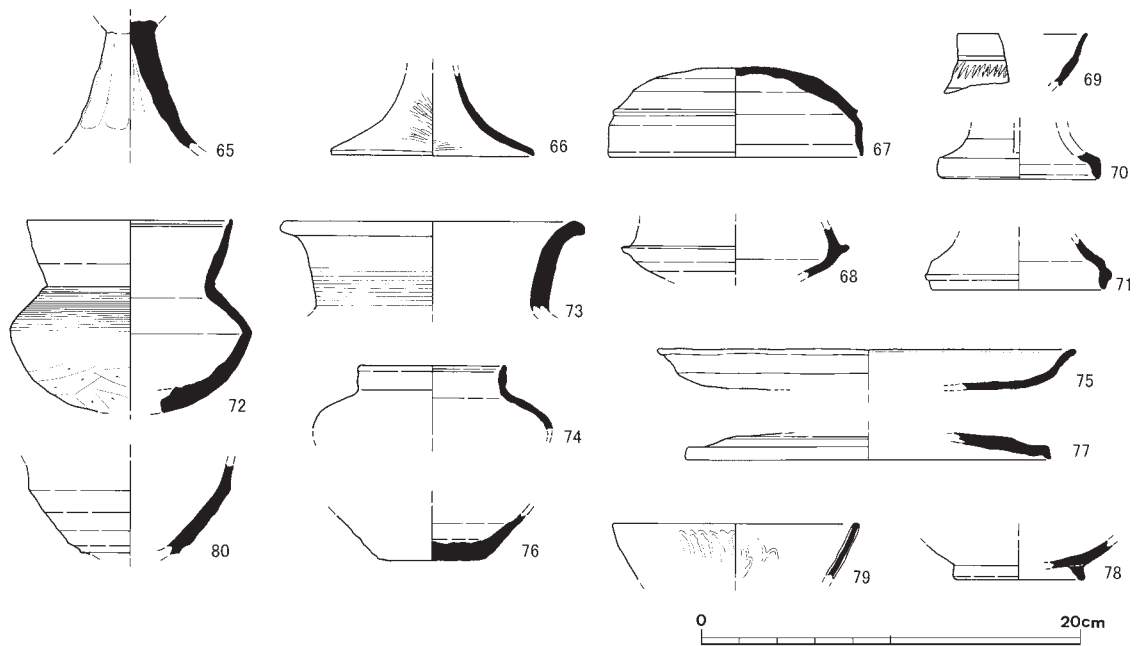


第69図 尾流地区出土遺物実測図(4)

2面が使用のため平滑になっている。

3) 古墳時代(第70図)

この時代の土師器は、柱穴内出土の高杯脚65・66の2点がある。須恵器は、土坑S K54出土の杯蓋67、杯身68、無蓋高杯69、高杯脚70、丸底壺72、広口壺73とピット出土の高杯脚71、包含層



第70図 尾流地区出土遺物実測図(5)

出土の短頸壺74などがある。

67は口径13.3cm、器高4.7cmを測る。68・69は小片である。70は脚柱部に透孔の穿孔をもち、底部径8.2cm、残存高2.55cmを測る。71は底部径9.0cm、残存高2.7cmを測る。72は口径10.7cm、器高10.2cmを測る。73は口径8.0cm、残存高4.7cmを測る。74は口径7.4cm、残存高3.4cmを測る。

#### 4) 奈良時代(第70図)

掘立柱建物跡S B60の柱穴S P21より土師器皿75、須恵器底部76、包含層中より須恵器杯蓋77などが出土している。75は口径26.0cm、器高2.1cmを測る。内外面ともナデ調整による。76は底部径5.5cm、残存高2.4cmを測る。77は宝珠つまみ部を欠くが口径19.2cm、残存高1.4cmを測る。

その他の遺物として包含層中、近世溝中より緑釉陶器碗78、青磁碗79、天目茶碗80等が出土している。78は軟質で灰白色の胎土に明るい緑釉を施している。底部径6.8cm、残存高2.1cmを測る。79は近世溝中より出土した龍泉窯系の鎬蓮弁の破片である。口径12.8cm、残存高3.0cmを測る。80はS P07の上面で出土した。口縁・高台部ともに欠損している。

#### 4. 小結

今回の調査では、長岡京に関する遺構は確認できなかったが、縄文時代、弥生時代、奈良時代と各時代の遺構や遺物を確認することができた。

縄文時代の土坑の検出は、下海印寺遺跡の集落が現在の小泉川の付近まで広がっていることが明らかとなった。弥生時代の住居、奈良時代の建物跡の存在は、それぞれの時代の集落の広がりを考える上での大きな手がかりと言える。(戸原和人)

#### 3. まとめ

第二外環状線道路予定地は、小泉川の氾濫原から段丘にかけて存在している。そのため、試掘調査によって、河川による削平の有無を確かめることが1つの大きな目的となった。そのため、平成20年度の発掘調査も前年度に引き続き、試掘調査と、試掘調査によって遺構の広がりや認められた地域の面的調査の2つの性格の調査を実施した。

試掘調査である樽井地区(7ANOTI-2)、下内田地区(7ANOOD-7)、菩提寺地区(7ANOBZ-2)、駿河田地区(7ANPSG-2・3)、尾流・方丸地区(7ANOOR-7)、荒堀地区(7ANPAR-3)では、遺物をわずかに含む河川跡や自然地形などの一定の知見を得ることができた地区もあるが、明確な遺構は検出できなかった。

同じく試掘調査である方丸地区(7ANOHR-10・11)、高山地区(7ANPTY-1、7ANPSH-1)、西条地区(7ANOSJ-3)の調査では、良好な遺構面や遺物を検出することができた。

方丸地区の右京第947次調査(7ANOHR-10)では、縄文時代の土坑や中世の遺物を含む落ち込みの一部を検出することができた。右京第956次調査(7ANOHR-11)では獣骨を含む土坑を検出するとともに、律令期の貴族の装束に用いられた黒色の石材を用いた巡方の未成品が出土した。装着時に必要な糸を通す穴は作り出されておらず、表面の研磨も途中段階のものである。この地域は京外に当たることから、周辺に石帯を作る工房があった可能性も指摘できる。

高山地区(7ANPTY-1、7ANPSH-1)の発掘調査では、2m以上の竹林の盛土の下から遺構包含層を確認することができた。古墳時代の須恵器・土師器片が丘陵斜面に分布することから、周辺に古墳が存在する可能性が指摘できる。

西条地区(7ANOSJ-3)は現在の集落の一部が移転した跡地にあたり、微高地上に存在する。幅5.6mの近世から中世の遺物を含む溝や弥生時代末、古墳時代後期の遺構などを検出し、部分的に遺構面が上下2枚あることも確認できた。

平成20年度以前の周辺地域の調査結果を受けておこなわれた面的な調査は、上内田地区(7ANOKD-8)、伊賀寺地区(7ANOOD-7)、西条地区(7ANOSJ-4)で実施した。

上内田地区(7ANOKD-8)では弥生時代末から始まる流路跡と古墳時代の土坑群を検出することができた。

伊賀寺地区(7ANOOD-7)では、弥生時代末のベット状遺構を持つ大型の竪穴式住居跡を検出した。また、地層確認の断割りによって、調査区の遺構検出面が縄文時代後期以後に形成されたことがわかった。

西条地区(7ANOSJ-4)は平成17年度の右京第957次調査地に隣接する調査区で、古墳時代後期、平安時代末の遺構を検出することができた。

今回の調査によって考古学的な知見だけではなく、地形発達史を復原することも可能となった。地形と遺構の立地関係など多くの基礎的資料を得ることができた。西条地区、高山地区などは今後の第二外環状道路関連の発掘調査によってさらに遺跡の性格が明らかになってくるものと考えられる。

(中川和哉)

《引用・参考文献》

- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 岩松保ほか「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡報告書」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 岩松保ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 高野陽子「長岡京跡右京第541次・脇山遺跡発掘調査概要(7ANSTE-18)」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 長岡京市史編さん委員会編『長岡京市史』資料編1 長岡京市役所 1996
- 中川和哉「算用田遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 中川和哉ほか『京都府遺跡調査報告書(下植野南遺跡)』第25冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999
- 中川和哉・高野陽子ほか「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 中川和哉・戸原和人「京都第二外環状道路関係遺跡平成18年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第126冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008
- 藤井整・石井清司ほか『京都府遺跡調査報告書(下植野南遺跡Ⅱ)』第35冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004
- 増田孝彦「長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009

# 圖 版



(1) 上内田地区遠景 (北東上空から)



(2) 上内田地区全景 (上空から、右が北)





(1)上内田 - 1 地区土坑 SK1009 ~ 1015 近景(南西から)



(2)上内田 - 2 地区溝 S D 2001 ~ 2004 近景(南西から)



(1) 上内田 - 1 地区  
素掘り溝群近景(東から)



(2) 上内田 - 1 地区  
素掘り溝群近景(南から)



(3) 上内田 - 1 地区  
溝 SD1001(C - C')  
堆積状況(西北西から)



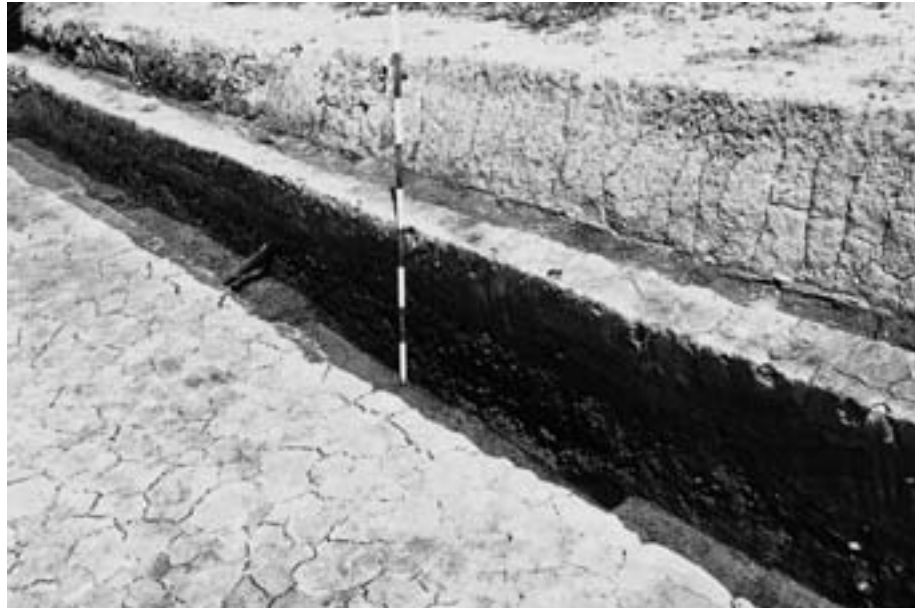
(1) 上内田 - 1 地区  
溝 SD1001 (B - B')  
堆積状況 (南西から)



(2) 上内田 - 1 地区  
溝 SD1001 (A - A')  
堆積状況 (南東から)



(3) 上内田 - 1 地区  
石包丁出土状況 (東から)



(1) 上内田 - 2 地区  
溝 SD2001 (G - G')  
堆積状況 (南西から)



(2) 上内田 - 2 地区  
溝 SD2001 (G - G')  
堆積状況 (北西から)



(3) 上内田 - 2 地区  
溝 SD2001 (E - E')  
堆積状況 (北東から)





(1) 上内田 - 2 地区  
溝 SD2001 (E - E')  
堆積状況 (北東から)



(2) 上内田 - 2 地区  
溝 SD2002 ~ 2004・  
柱穴群近景 (東から)



(3) 上内田 - 2 地区  
柱穴群近景 (西から)



上内田地区出土遺物(1)







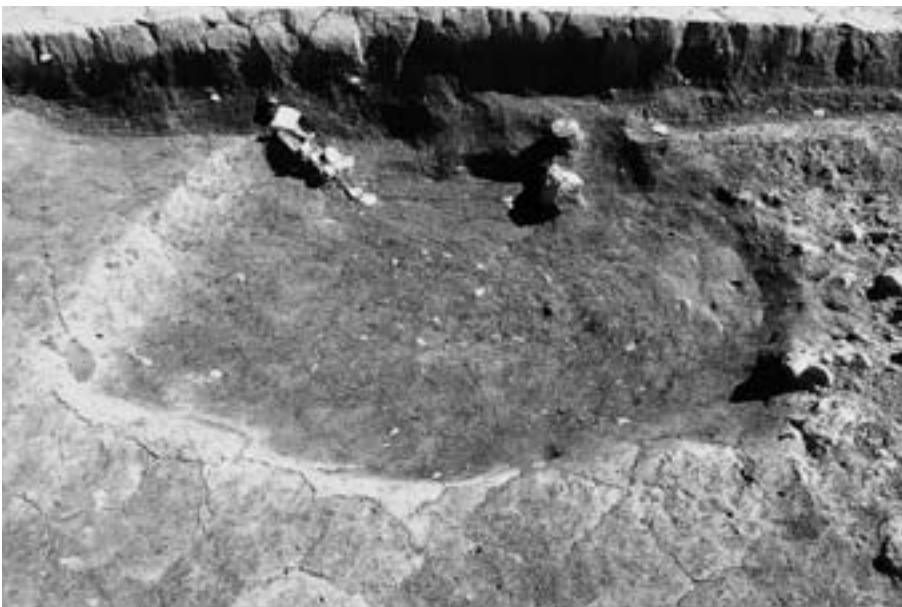
(1)伊賀寺地区調査地全景(南上空から)



(2)伊賀寺地区竪穴式住居跡SH05(左)・SH02(右)(上空から、上が南西)



(1) 伊賀寺地区  
竪穴式住居跡SH05近景  
(北東から)



(2) 伊賀寺地区  
竪穴式住居跡SH05袋状土坑  
土器出土状況(北西から)



(3) 伊賀寺地区  
竪穴式住居跡SH05袋状土坑  
完掘状況(北西から)

(1) 伊賀寺地区  
竪穴式住居跡SH05  
土器出土状況(北西から)



(2) 伊賀寺地区  
竪穴式住居跡SH05  
袋状土坑断面(北東から)



(3) 伊賀寺地区  
溝SD01近景(南から)





(1) 伊賀寺地区  
土坑SK03断面(南から)

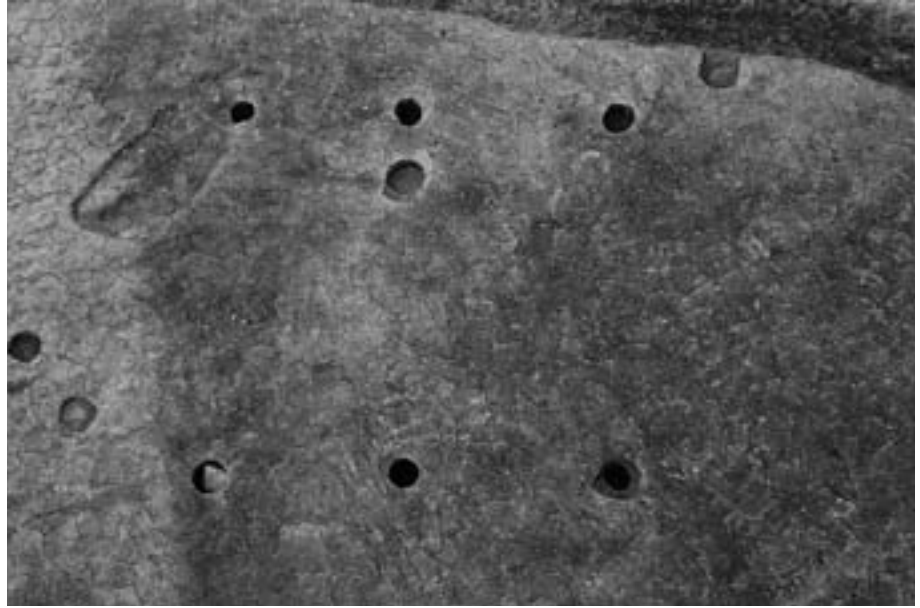


(2) 伊賀寺地区  
土坑SK03近景(東から)



(3) 伊賀寺地区  
竪穴式住居跡 S H02・  
土坑SK03近景(東から)





(1)伊賀寺地区  
掘立柱建物跡SB06(東から)



(2)伊賀寺地区  
トレンチ南壁断面・  
溝SD04近景(北から)



(3)伊賀寺地区  
トレンチ東部断ち割り断面  
(南から)





(1)伊賀寺地区出土遺物(1)



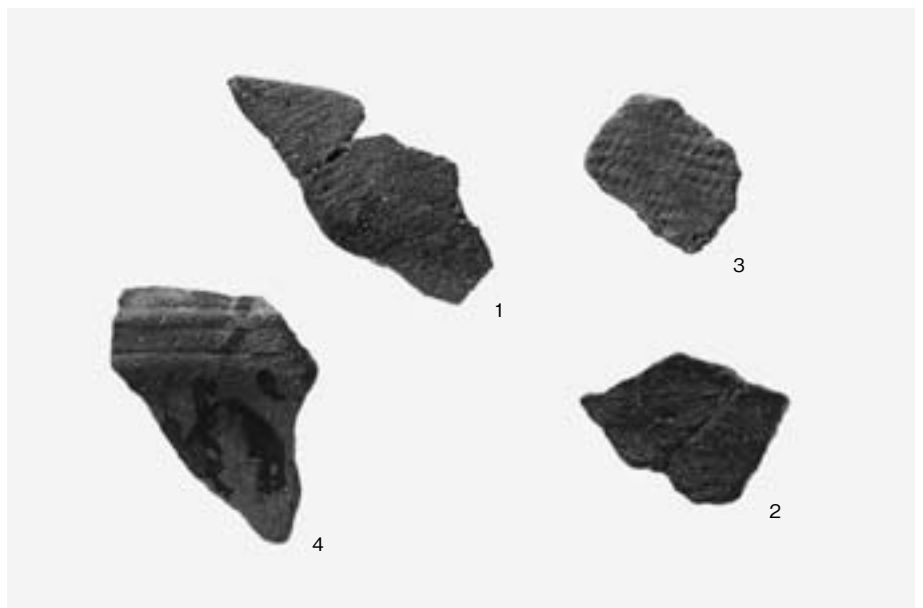
(2)伊賀寺地区出土遺物(2)



(1) 樽井地区全景(北西から)



(2) 樽井地区北壁断面(南から)



(3) 樽井地区出土遺物



(1) 下内田地区  
第 1 トレンチ近景(北西から)



(2) 下内田地区  
第 2 トレンチ近景(北東から)



(3) 下内田地区  
第 3 トレンチ近景(南から)



(1) 方丸地区調査地近景(南から)



(2) 方丸地区拡張後近景  
(南東から)



(3) 方丸地区南東部近景(西から)



(1) 菩提寺地区調査地近景  
(南東から)



(2) 菩提寺地区南東部近景  
(北東から)



(3) 駿河田地区調査地近景  
(北西から)





(1) 駿河田地区調査地全景  
(南東から)

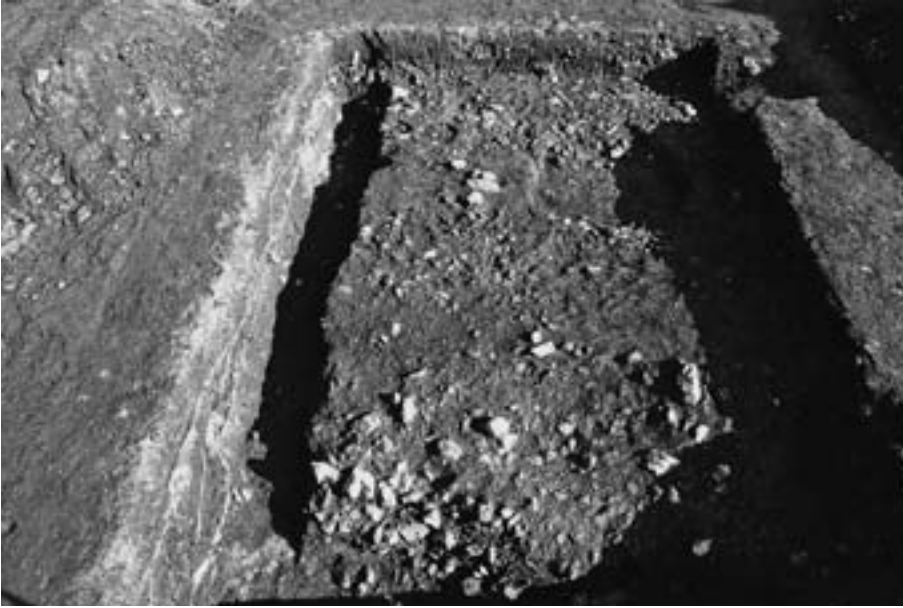


(2) 駿河田地区調査地近景  
(南西から)



(3) 駿河田地区断面(B-B')  
(南東から)





(1) 方丸地区調査地近景  
(南西から)



(2) 方丸地区断面(A - A')  
(東から)



(3) 方丸地区遺物出土状況  
(南東から)



(1) 方丸地区土坑 S K01 近景  
(南西から)



(2) 尾流地区調査地近景  
(北西から)



(3) 尾流地区断面(A - A')  
(北西から)



(1) 西条地区第5トレンチ・土塁状遺構全景(南東から)



(2) 西条地区第5トレンチ・溝S D01近景(南東から)



(1)西条地区第1トレンチ近景  
(西から)



(2)西条地区第1トレンチ南東部  
(北西から)



(3)西条地区第2トレンチ近景  
(西から)





(1) 西条地区第4トレンチ  
拡張部近景(南東から)



(2) 西条地区第5トレンチ  
東部近景(東から)



(3) 西条地区第5トレンチ  
溝S D01内遺物出土状況  
(南から)



(1)西条地区第6トレンチ近景  
(北西から)



(2)西条地区第6トレンチ  
溝S D01断面(北から)



(3)西条地区第6トレンチ近景  
(東から)





(1) 荒堀地区第1～3トレンチ  
全景(東から)



(2) 荒堀地区第2トレンチ近景  
(東から)



(3) 荒堀地区第2トレンチ  
拡張部南壁(北東から)



(1) 荒堀地区第4～6トレンチ  
全景(西から)



(2) 荒堀地区第4トレンチ近景  
(西から)



(3) 荒堀地区第4トレンチ  
池沼状遺構(南東から)



(1) 荒掘地区第6トレンチ近景  
(西から)



(2) 高山地区トレンチ全景  
(南東から)



(3) 高山地区トレンチ  
断ち割り断面(北から)



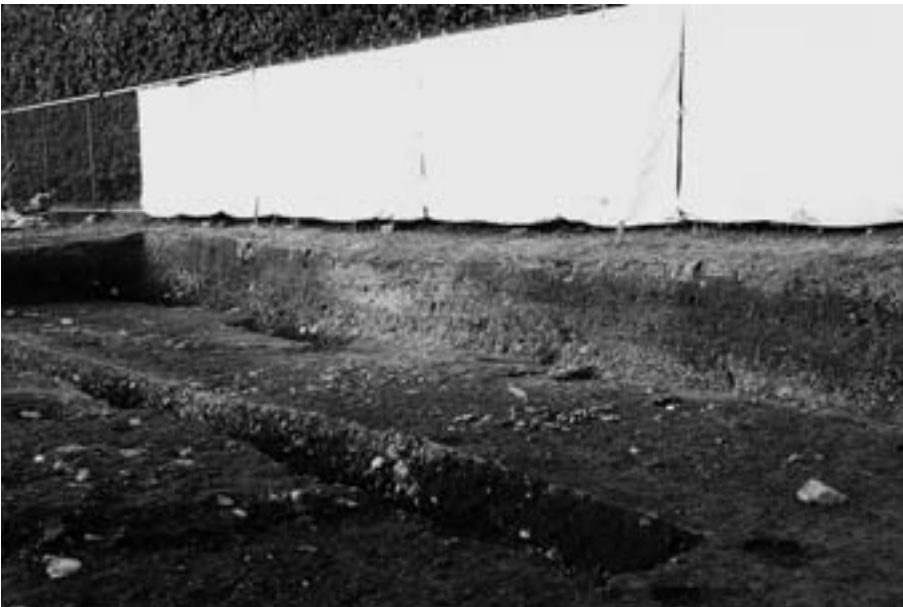
(1) 西条- 1 地区近景(西から)



(2) 西条- 2 地区近景(北東から)



(1) 西条- 1 地区西壁断面  
(東から)



(2) 西条- 1 地区調査地断面  
(A - A') (南東から)



(3) 西条- 1 地区調査地断面  
(B - B') (東から)





(1) 西条- 1 地区不明遺構  
SX95704近景(東から)



(2) 西条- 1 地区不明遺構  
SX95702近景(東から)



(3) 西条- 1 地区不明遺構  
SX95702焼土断ち割り  
(西から)





(1) 西条- 1 地区掘立柱建物跡  
SB95705近景(北から)



(2) 西条- 1 地区掘立柱建物跡  
SB95706近景(北西から)



(3) 西条- 1 地区柵列SA95709  
近景(西から)



(1) 西条- 1 地区溝SD95701  
断面・遺物出土状況(東から)

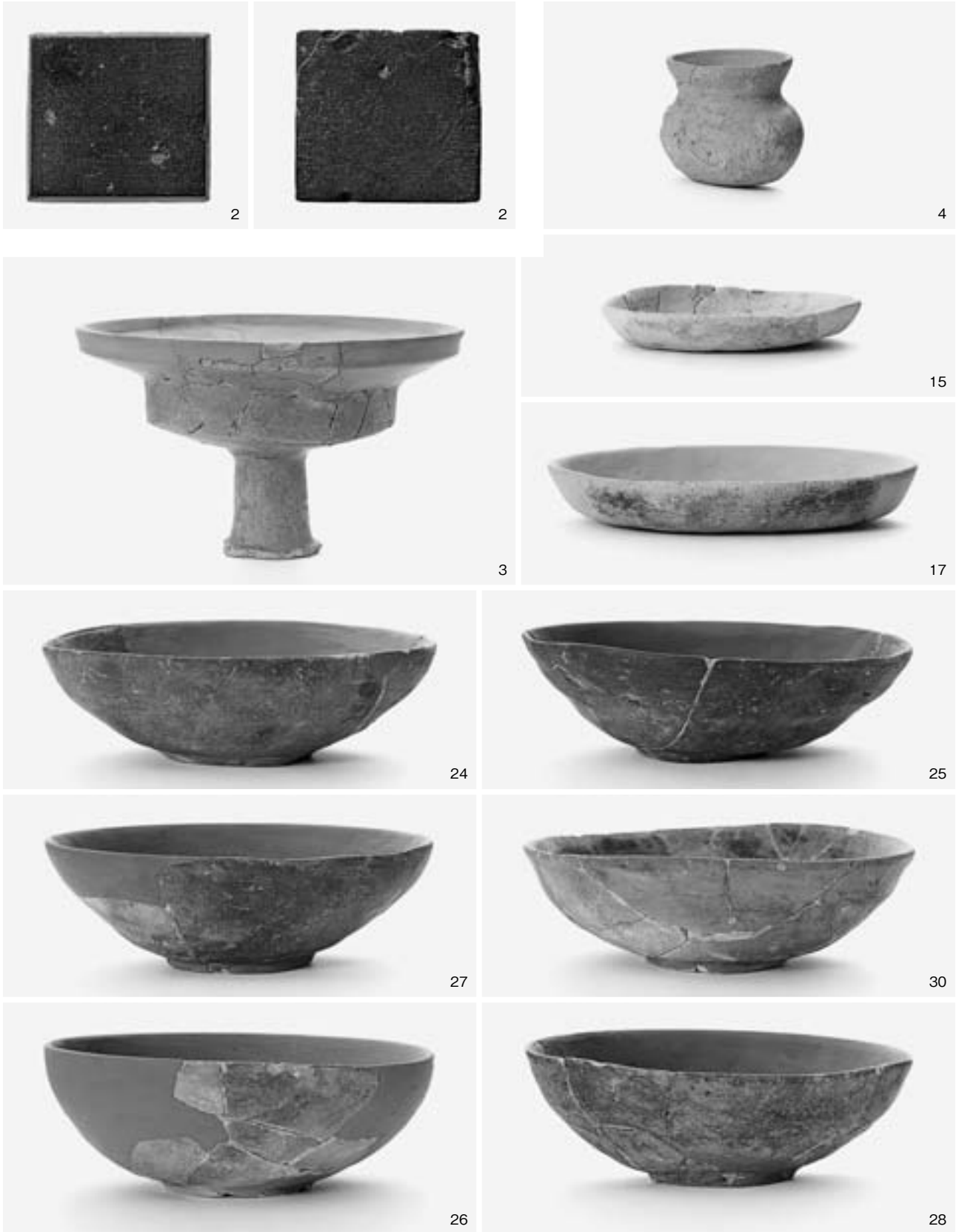


(2) 西条- 1 地区溝SD95701  
近景(東から)



(3) 西条- 2 地区遺物出土状況  
(東から)

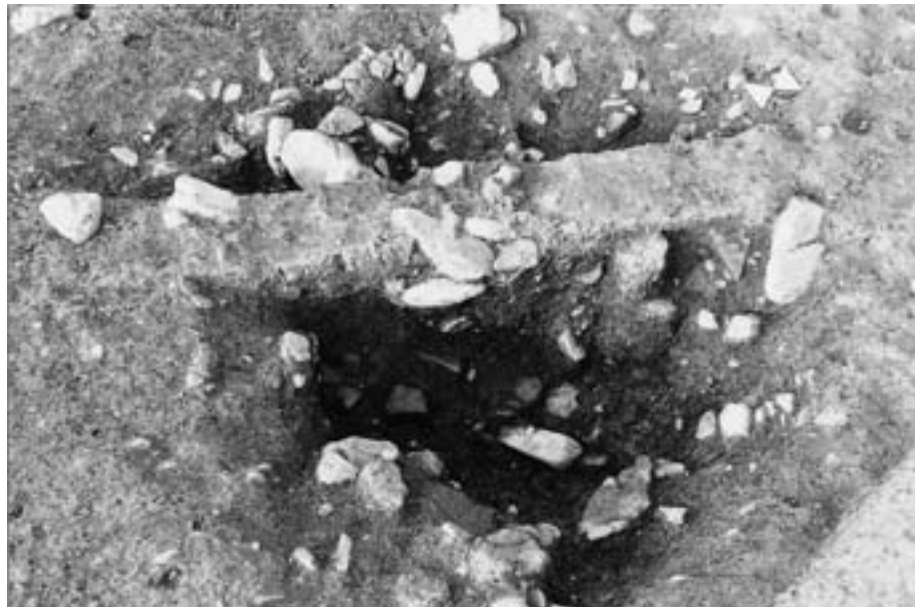
京都第二外環状道路関係遺跡 図版第34  
長岡京跡右京第956・957次・下海印寺遺跡



方丸地区・西条地区出土遺物(石製巡方のみ第956次方丸地区出土)



(1)尾流地区調査地西南部  
土坑SK97検出状況  
(北西から)



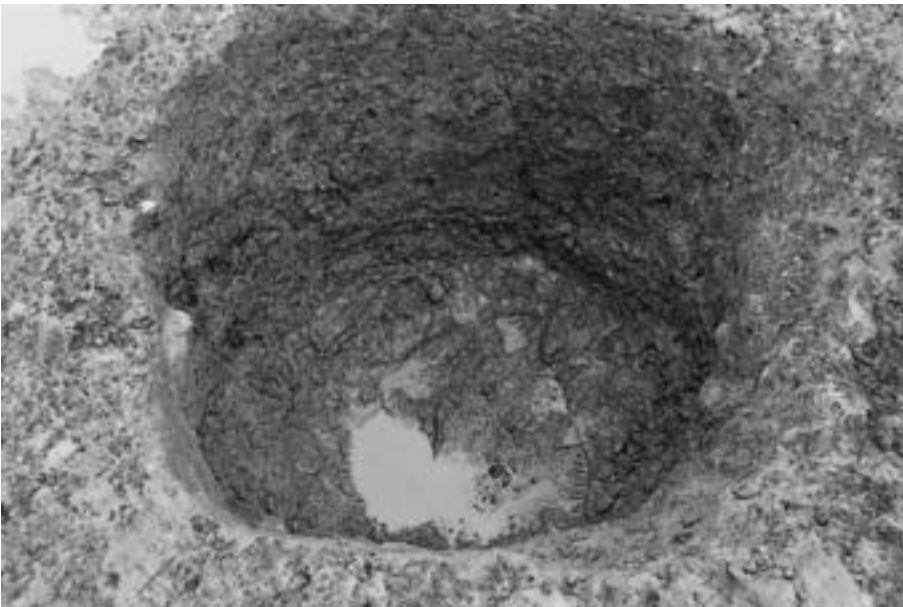
(2)尾流地区土坑SK80検出状況  
(北から)



(3)尾流地区土坑SK80完掘状況  
(南から)



(1) 尾流地区土坑SK97検出状況  
(北から)

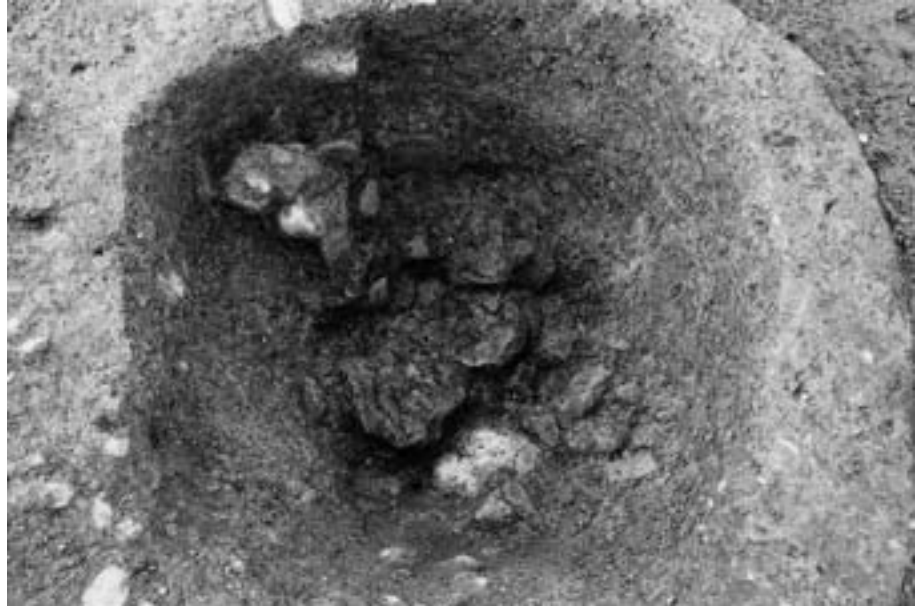


(2) 尾流地区土坑SK97完掘状況  
(南から)

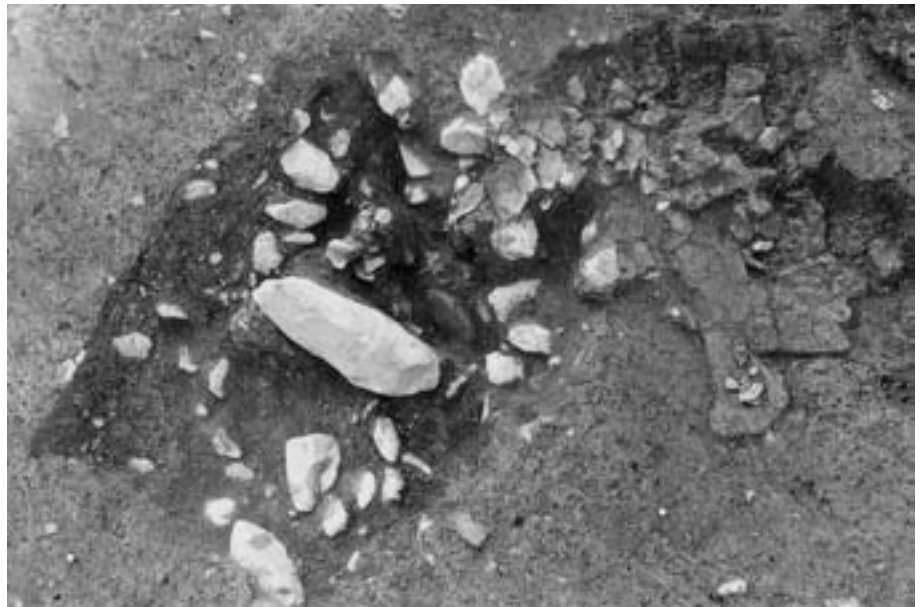


(3) 尾流地区土坑SK105  
上層検出状況(北から)





(1)尾流地区土坑SK105  
下層検出状況(南から)



(2)尾流地区土坑SK93検出状況  
(東から)



(3)尾流地区竪穴式住居跡  
SH58検出状況(東から)



(1) 尾流地区竪穴式住居跡  
SH58完掘状況(東から)



(2) 尾流地区竪穴式住居跡  
SH58内遺物出土状況  
(北から)



(3) 尾流地区貯蔵穴SK94  
検出状況(北から)



(1) 尾流地区竪穴式住居跡SH58  
内炉跡SK93検出状況  
(北から)



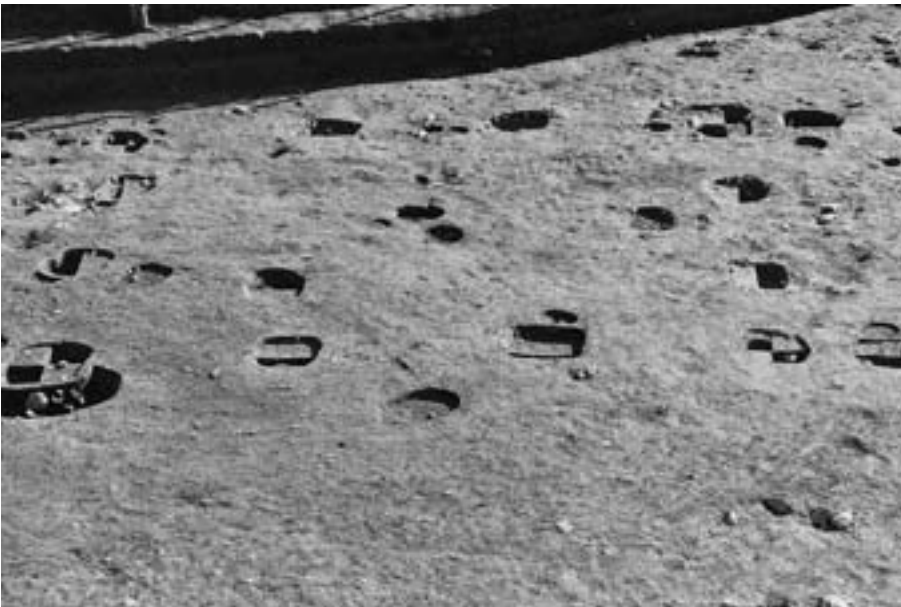
(2) 尾流地区竪穴式住居跡SH58  
内砥石出土状況(北から)



(3) 尾流地区土坑SK54検出状況  
(西から)



(1) 尾流地区掘立柱建物跡SB06  
検出状況(西から)

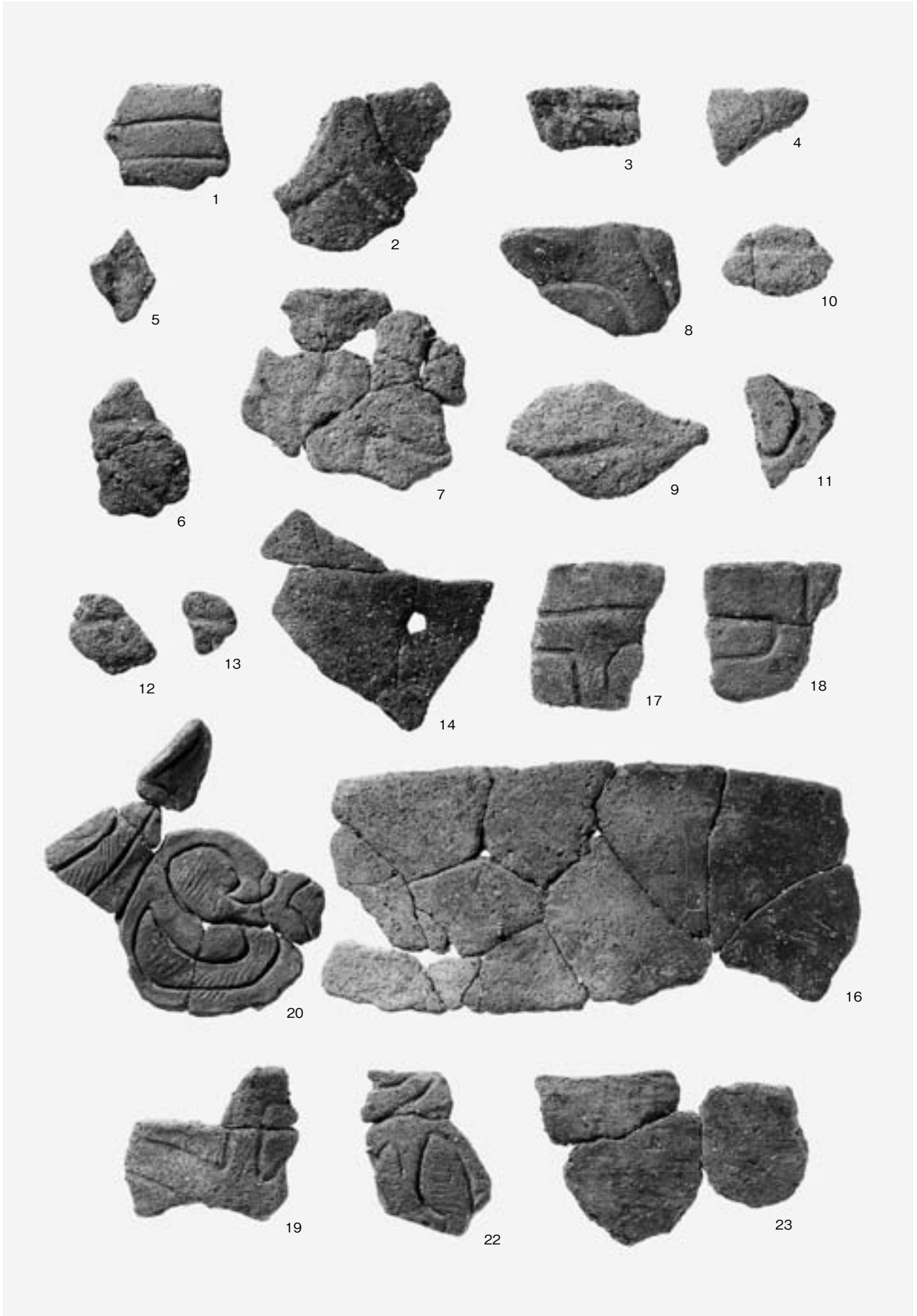


(2) 尾流地区掘立柱建物跡SB60  
検出状況(北から)



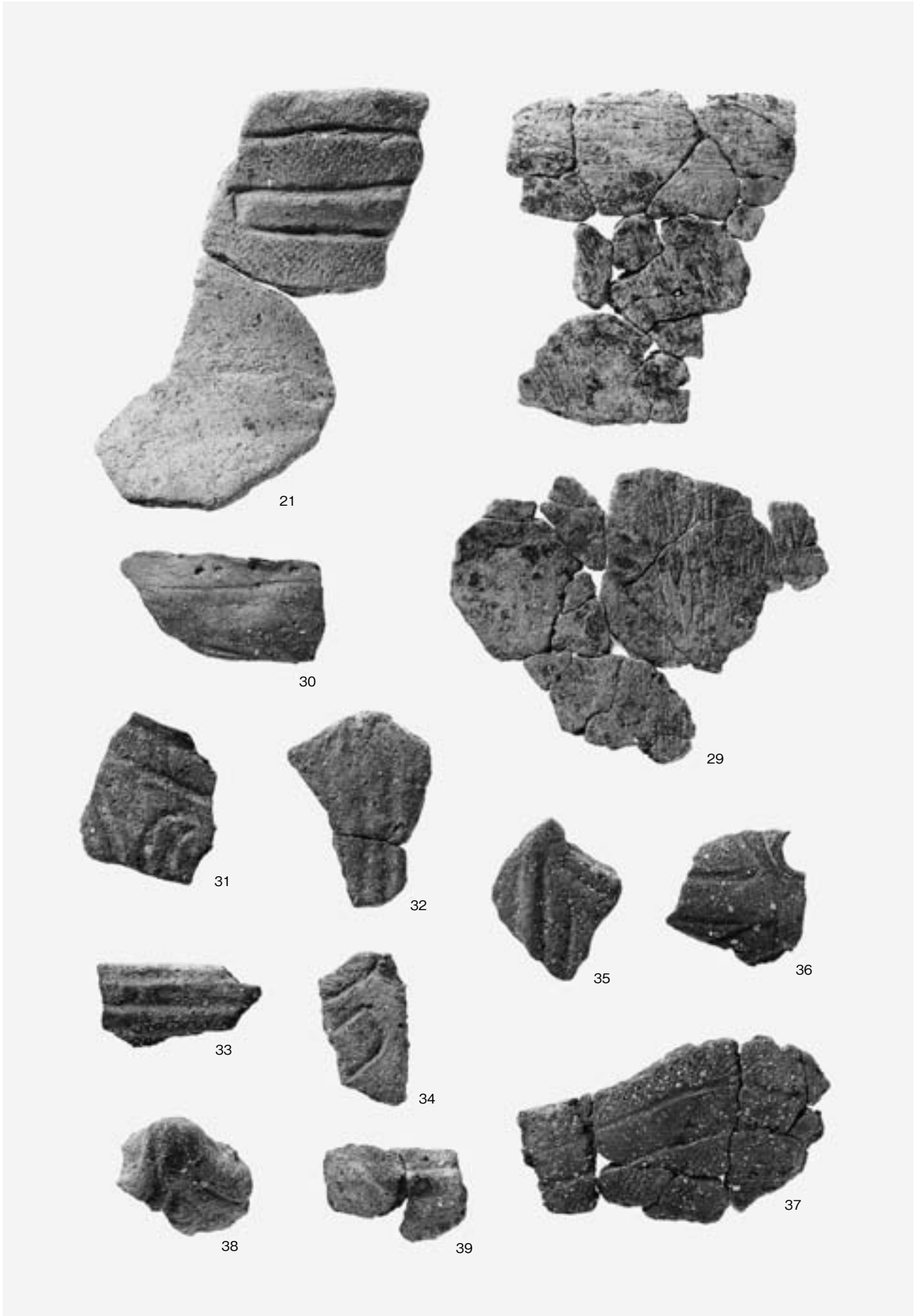
(3) 尾流地区土坑SK05検出状況  
(南から)

京都第二外環状道路関係遺跡 図版第41  
長岡京跡右京第957次・下海印寺遺跡・西山田遺跡

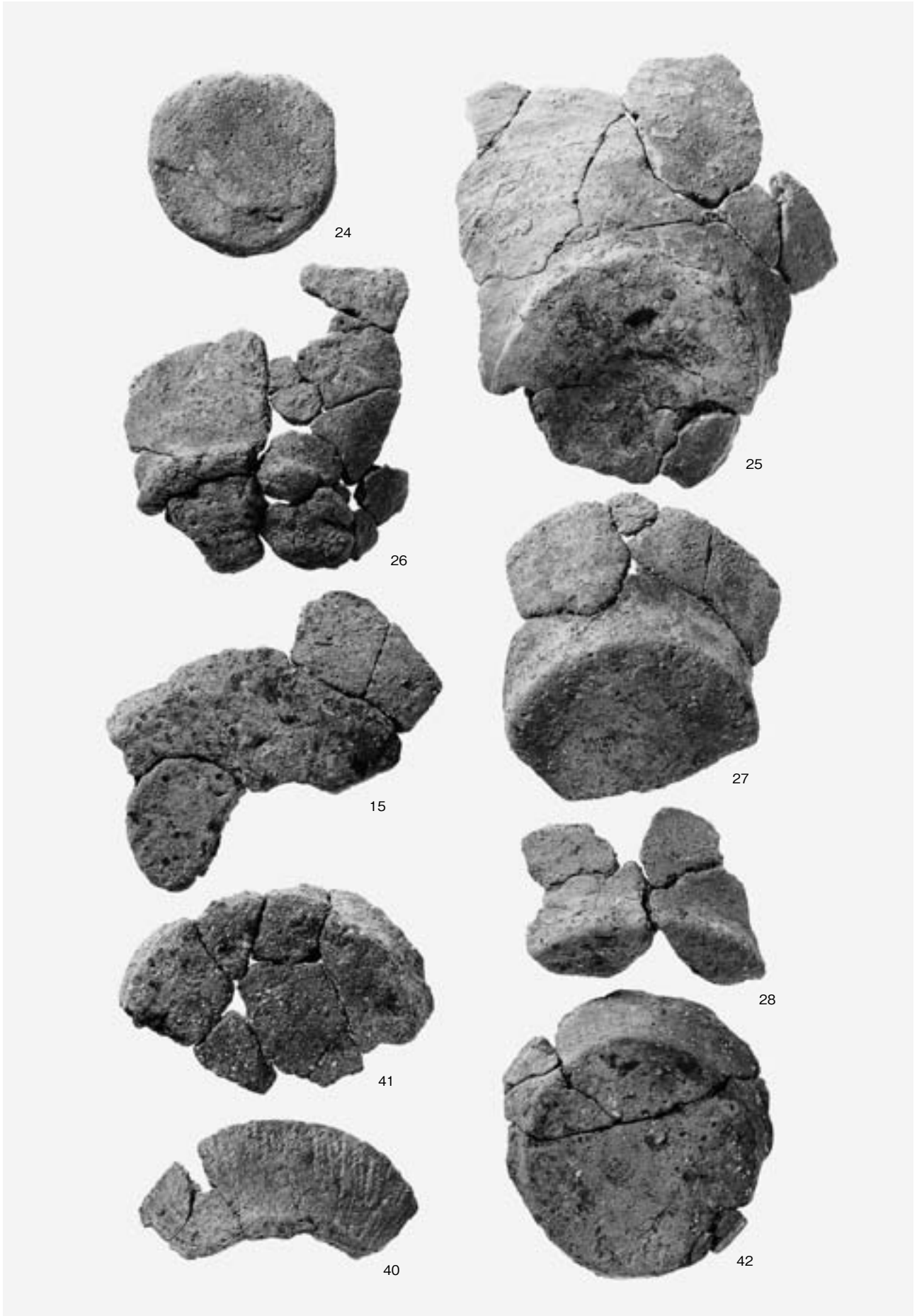


尾流地区出土遺物(1)





尾流地区出土遺物(2)





京都府遺跡調査報告集 第 137 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141